始

323-365 エト4J-38

ローマ字文の研究

理學博士
田丸卓郎
著

東京
日本のローマ字社
發行

大正
9. 12. 1
内交

はしがき

我國で日用の文字としてローマ字を使ふやうにしなければならないことは、數年前に著した『ローマ字國字論』で詳しく論じて置いた。其後いろいろな人の說を聞いて居るが、自分が『ローマ字國字論』で述べたことを變へることを必要とするやうな說は一つもなくて、ローマ字採用について反對の意見又は疑問を持つて居た人で、其書を讀んでから、それにあるやうな趣意方針であるならば贊成だと云はれたと云ふ例は數多聞及んだ。

特に最近にはローマ字問題に注意する人が目立つて多くなつて來て居る。これは此度の世界大戰爭の爲に國力の充實を眞面目に考へるやうになつたことと、日本も五大强國のうちの一つになつて世界の日本と認められたことが、日本人各自の考に影響を生じた爲かと思はれる。

このやうなわけで、ローマ字を國字にするが必要だといふことは、——一部分の人はまだ疑つて居るかも知れないけれども——社會に取つては、もはやきまつた問題であると思ふ。それ故に、我々は、その次の問題卽ち「ローマ字の日本文はどのやうに書くのがよいか」に就て我々の今迄に調べたことを發表するのが時を得て居ると考へる。

ローマ字文の書き方に關する問題では、綴り方の問題と語の分け方の問題と語や言ひ廻しの選び方とが最も要用な問題である。その外に、直接に文章の書き方には關係しなくても、字母と標しの名前や日本語の文法をローマ字文に適するやうに整理することなども考へる必要がある。

このうち、綴り方の問題は『ローマ字國字論』で大體論じて置いたけれども、も少し立入つた所を本書第一章で述べる。併しローマ字に關する要用さの程度から云へば、綴り方よりも語の附け離しの問題と語や言ひ廻しの選び方とが遙に大切な問題であるので、本書のうちで一番力を注いだのも此部分である。綴り方に關して本書に述べてある點を十分納得されない人でも、第四章以下には參考されて然るべきことが少なくはなからうと考へる。

本書に書いてあることは、只空に想像して書いたのではなくて、十餘年間實際ローマ字文を書いて居る間に研究して來たことである。而も、それは雜誌『ローマ字世界』に使はれてあるので、可なり多數のローマ字實用者の實際讀み書きして居る書き方である。このことは、本書を世に薦めるについて特に私が心强く感ずる點である。

この書に書いてあることは、上の通り、多年ローマ字文を書いて居る間に、實際に出會つた問題を材料として、それを整理したものであるが、研究の足りない點や、取り殘した問題がまだ澤山あるに相違ない。さういふことに氣付かれた方は、御手數ながら成るべく著者までそれを御知らせを御願ひしたい。研究の上、雜誌『ローマ字世界』に出し、又追ては本書の版を改める際にそれを加へることにすれば、ローマ字仲間一般の爲にもなるわけである。

この書の附錄とした「簡單な文法字引」は、誰でもローマ字文を書くときに問題になるやうな語や文句について、文法上の見方及び書き方を手輕に搜し出す爲に作つたものである。これにも、出すべきもので拔けて居るのが多くあるに相違ない。この部分を成るべく役に立つやうにするには、新しい問題に出會ふに從つて書き加へる必要があるので、各頁の下の場處を餘分に明けて置いた。この書を使ふ方は、銘々に其場處を利用されることが望ましい。

終りに、此書を出すについて種々助力を與へられた內藤豐一君、楠島文兵衛君、蒲池法學士其他の方々の御好意に厚く御禮を申し上げる。

大正九年七月

田丸卓郎

目　　錄

第一章　ローマ字の綴り方(上)
ヘボン式綴り方 §1—2 1
ヘボン式綴り方と我々のローマ字を使ふ趣意 . . §3—5 2
日本式綴り方 §6—7. 4
日本式綴り方とヘボン式綴り方との比較其一、日本語の性質から見て §8—9. 7
同其二、實用上から見て §10—12. 12
同其三、ローマ字綴り方と五十音圖 §13—14. . . 13
同其四、音聲學との關係 §15—17. 15
同其五、科學的な書き方 §18—20. 18
同其六、聞く人の書き方と言ふ人の書き方 . . . §21—24 19
同其七、英語や外國人に對する點 §25—28. . . 21
同其八、外國の ti, tu 音などの書き方 §29—31. 25
日本式綴り方と假名遣ひ §32—42. 27
ウ列の音に u を省く說について §43—46. . . 35
ローマ字のいろいろな綴り方(南部式、左近式、片山式、鳴海式、稻留式) §47—61. 37

綴り方の結論、日本式の過去と將來 §62—65 . . 48
現在の狀態に適切な方針 §66—68. 51
第二章　ローマ字の綴り方(下)
引く音 §69—75 54
はねる音 §76—78 59
つまる音 §79—81 61
いろいろな特別な音 §82—87 63
外國語の書き方 §88—89 64
外國の人名や地名の書き方 §90—95 67
日本人の姓名の書き方 §96—98. 71
名簿索引字引の綴り方と列べ方 §99—101 . . . 72
第三章　字の名前と標しの使ひ方
字の名前 §102—108. 74
標し §109—125 80
第四章　ことばの附け離しと種類分け
語の附け離しの一般の規則 §127—130 90
組み合せ詞 §131—133. 92
ことばの役目の種類 §134—136. 94
ことばの種類 §137—140 98
名　詞 §141—155 100
代名詞 §156—157 112
關係詞 §158—166 114

動　詞 §167—197 120
形容詞 §198—216 137
副　詞 §217—222 150
數　詞 §223—242 155
廣さ詞 §243—250 163
接續詞 §251—253 170
呼かけ詞 §254—255 173
文章の組立 §256—258 174
第五章　ことば及び言ひ方
ローマ字文を書くときの根本の方針 §259—260 . 177
ことば §261—275 179
言ひ方 §276—296 189
いろいろな書式 §297—306 200
第六章　文語體の書き方
一般のこと §307—309 208
單語に關すること §310—316 210
助動詞と助詞の問題 §317 213
詞のつづいた文句 §318—321 215
附　錄　簡單な文法字引 . . . . . (1)—(128)
索　引 . . . . . 1—6

ローマ字文の研究

第一章　ローマ字の綴り方(上)

ヘボン式綴り方

1. ローマ字の綴り方には、現在尙和英辭書や外國人關係の方面に多く行はれて居る綴り方がある。これは明治の初年にヘボン (Hepburn) 氏が氏の辭書に使つたのに、明治十八年に當時の「ローマ字會」で修正を加へたものである。人によつては此修正(最も要用なのは拗音 キャ キュ の類を kiya kiyu のやうにして居たのを kya kyu のやうに改めたこと) を重く見て、これを「ローマ字會式」と言ふ。併し私は、此修正は只外國人の思違ひをして居た點を直したと云ふに過ぎないので、主な點では變化のないものと見るし、且つ其後のヘボン氏の辭書には此修正された綴り方が使つてあるから、これを「ヘボン式」と稱へ、若し最初のものと區別する必要があるならば、「後のヘボン式」又は「ローマ字會で改良したヘボン式」と稱へることが適當であると考へる。現にチェンバレン氏の「口語日本語」にも此綴り

方を——ローマ字會のことは一言も云はずに——單に「ヘボン氏の式」と稱へて居る。

2. ヘボン式綴り方は、母字 (a i u e o) はイタリヤ語ドイツ語のやうに、父字は英語で普通に使ふ音を取つて定めたもので、五十音にあてて見れば、アイウエオ の横列に a i u e o の母字を使ひ、カサタナハマヤラワ ガザダバパ の縱列に大體は k, s, t, n, h, m, y, r, w, g, z, d, b, p を使ふが、只除外例として シ を shi, チ ツ を chi tsu, フ を fu, ジ を ji, ヂ ヅ を ji zu と書く。又拗音は大體は ya yu yo の前にそれぞれの父字を添へて書くが、除外例として シャ シュ ショ を sha shu sho, チャ チュ チョ を cha chu cho, ジャ ジュ ジョ を ja ju jo, ヂャ ヂュ ヂョ も ja ju jo と書くのである。又、はねる音には多くは n を使ふが、b, p, m の前には m を使ひ、つまる音には次に來る音の カ行、サ行、タ行、パ行なるに從つて k s t p を挿むのである。又長音には母字の上に横線を添へて ā ī ū ē ō とするのである。

ヘボン式綴り方と吾々のローマ字を使ふ趣意

3. ヘボン式はもともと外國人特に英米人が日本語を書くため、又外國語特に英語の中に日本語を書くために起つたものである。もとのローマ字會でそれを改良したけれど

も、それは只外國人の思違ひをして居た點を改めただけで、下に論ずるやうな大事な點ではそのままになつてゐる。從つてそれが上のやうな綴り方になつて居ることは當然なことで、外國人や外國語に關係した方面に使ふローマ字としては、ヘボン式の綴り方は相當に適當なものだと云つてもよい。

4. 併し、我々のローマ字を使ふ趣意は、これと違つて、日本人が日本語を書く正式な書き方にそれを使はうと云ふのであるから、立場が外國人外國語關係に使はうと云ふのと全く違ふ。從つて、一方で適當と云ふべき綴り方でも、吾々の立場から見れば不適當であるのは寧ろ當然なことである。

前のローマ字會でヘボン式を使ふことにしたときにも、それの不適當なことを鳴らした人(田中館愛橘、日高眞實等の諸氏) が少なくなくて、ローマ字會の雜誌 Rōmaji Zasshi と並んで、ヘボン式とちがふ書き方(今の「日本式綴り方」) で書いた Rōmazi Sinsi といふ雜誌も出て居た。日本最初のローマ字國字論者南部義籌氏(*) なども、「若し前のローマ字會でヘボン式でなく田中館氏等の綴り方を採用したならば、ローマ字會の事業はまさか不成功には終らなかつただらう」と云つて居る。又今のローマ字ひろめ會でも、綴り

(*) 南部氏のことは §48 にある。

方を自由にしてあつた時代には、ヘボン式と違ふ綴り方を使ふ人が澤山あつた。これも、日本語のローマ字書き方としてヘボン式綴り方に滿足しない人の少なくないといふ事實を示すものである。

5. ローマ字が一般の日本人の間に廣く使はれる爲には、それの綴り方が一般の日本人に合點納得されるものでなくてはならない。然るに、ヘボン式は外國人や英語を學んだ日本人には合點納得されるだらうけれども、一般の日本人に納得されることはむづかしい。それ故にヘボン式を使つてローマ字の事業を爲遂げることは望みの少いことである。

ヘボン式が一般の日本人に合點納得され難いといふことは、偶然の事情によるのではなくて、理窟から云つてもヘボン式が日本語に適して居ないからである。この論は後に「日本式綴り方」との比較を論ずる處（§8 以下）で十分に述べる。

日本式綴り方

6. 日本語の正式なローマ字綴り方は日本語の性質に合ひ、日本人の使用に都合のよいものでなくてはならない。かう云ふ性質を備へて居る綴り方は、又一般の日本人に合點納得され易いに相違ない。これには假名の五十音配列に

從つて、各行に一定の父字を配し、又キャ シャ等の拗音も假名に於て見ると同樣に規則正しくするが最も適切である。次の表はこのやうに定めた綴り方で、これが卽ち日本式綴り方である。

	ア a	イ i	ウ u	エ e	オ o	拗音 -ya	-yu	-yo	-wa
k	カ ka	キ ki	ク ku	ケ ke	コ ko	キャ kya	キュ kyu	キョ kyo	クヮ kwa
g	ガ ga	ギ gi	グ gu	ゲ ge	ゴ go	ギャ gya	ギュ gyu	ギョ gyo	グヮ gwa
s	サ sa	シ si	ス su	セ se	ソ so	シャ sya	シュ syu	ショ syo	—
z	ザ za	ジ zi	ズ zu	ゼ ze	ゾ zo	ジャ zya	ジュ zyu	ジョ zyo	—
t	タ ta	チ ti	ツ tu	テ te	ト to	チャ tya	チュ tyu	チョ tyo	—
d	ダ da	ヂ di	ヅ du	デ de	ド do	ヂャ dya	ヂュ dyu	ヂョ dyo	—
n	ナ na	ニ ni	ヌ nu	ネ ne	ノ no	ニャ nya	ニュ nyu	ニョ nyo	—
h	ハ ha	ヒ hi	フ hu	ヘ he	ホ ho	ヒャ hya	ヒュ hyu	ヒョ hyo	—
p	パ pa	ピ pi	プ pu	ペ pe	ポ po	ピャ pya	ピュ pyu	ピョ pyo	—
b	バ ba	ビ bi	ブ bu	ベ be	ボ bo	ビャ bya	ビュ byu	ビョ byo	—
m	マ ma	ミ mi	ム mu	メ me	モ mo	ミャ mya	ミュ myu	ミョ myo	—
y	ヤ ya	(イ i)	ユ yu	(エ e)	ヨ yo	—	—	—	—
r	ラ ra	リ ri	ル ru	レ re	ロ ro	リャ rya	リュ ryu	リョ ryo	—
w	ワ wa	ヰ wi	(ウ u)	ヱ we	ヲ wo	—	—	—	—

注意。yi, ye, wu の綴り方を使はない（§33 參照）。

尙、引く音、はねる音、つまる音等、特別な場合の綴り方は第二章 §69 以下で述べる。

7.　ヘボン式綴り方に慣れて居て日本式綴り方を初めて見る人には、チを ti, ツを tu, シャ ジャ チャ ヂャ を sya zya tya dya などと書くことが奇體に見えるだらうと思ふ(*)。殊に、それ等の人の中には、日本語の音の音聲學的の性質だけを日本語の性質だと思ひ込んで居る人が少なくない。さういふ人は、上の日本式綴り方を日本語の性質に合はない、五十音圖に誤られた綴り方だと思ふであらう。併し、日本語の音の音聲學的の性質は、日本語の性質のうちの只一つに過ぎない。のみならず、其音聲學的の性質は外國人に取つては最も大切な性質であらうけれども、日本人に取つては、日本語の運用に關する性質の方がそれよりも遙にもつと大切なものである。かういふ點まで突込んで調べると、五十音圖に表はれた音の關係は、日本語に取つて甚だ大切なものであることが知れ、從つて日本式の綴り方が日本語に適して居ることも知れるのである。

(*) sy, zy, ty, dy のやうな組合せが英語などで見慣れない組合せである爲に、それを危ぶむ人がある。さういふ人は Funk and Wagnalls の Standard Dictionary の卷尾にある The Principles and Explanations of the Scientific Alphabet の項を見られたい。そこには j<dzh<dy と書いて、英語の j の音が dy から來て居ることを示してあり、又 sh の濁音 zh の音を説明して、"occasion, vision に於ける si (=zy) の音である" と云ひ、composure の發音を compozyur と示してある。濁音の dy や zy を認めるとすれば、それに對する清音の綴り ty や sy は（この字書には出て居ないけれども）當然認められることは云ふまでもない。

下に凡ての點から見たヘボン式と日本式との比較を述べて、吾々が日本式綴り方を薦めて疑はない理由を明にする。

日本式綴り方とヘボン式綴り方との比較　其一
日本語の性質から見て

8.　日本式綴り方が日本語の性質に適して居ることの最もよい實例は動詞の變化と音便の變化である。

a.　現在の日本語の文法で同種類の動詞と見られて居る五段活用（文語では四段）の動詞書く、汲む、押す、立つ等の變化を書いて見るに、

日本式なれば	kak-u,	-anai,	-i,	-e,	-ô
	kum-u,	-anai,	-i,	-e,	-ô
	os-u,	-anai,	-i,	-e,	-ô
	tat-u,	-anai,	-i,	-e,	-ô
ヘボン式なれば	kak-u,	-anai,	-i,	-e,	-ô
	kum-u,	-anai,	-i,	-e,	-ô
	os-u,	-anai,	-*hi*,	-e,	-ô
	ta-*ts*u,	-*t*anai,	-*ch*i,	-*t*e,	-*t*ô

日本式では四つの動詞が全く同じ型で行くが、ヘボン式ではさうは行かない。

b.　文語で中二段の動詞落ちる、朽ちる等の文語變化や口語變化を同種類の起きる、下りる等のそれと較べて

見るに、日本式で書くと。

otu,　otizu,　otureba ;　otiru 等
kutu,　kutizu,　kutureba ;　kutiru 等
oku,　okizu,　okureba ;　okiru 等
oru,　orizu,　orureba ;　oriru 等

この通り變化が同じ形になる。これをヘボン式にすると、

otsu,　ochizu,　otsureba ;　ochiru 等
oku,　okizu,　okureba ;　okiru 等

のやうになつて、これ等の動詞が變化し方に於て同種類の動詞であることが形に表はれなくなる。

c.　自動詞と他動詞の關係でも、タ行と他の行と五十音圖に從つて同樣に行つて居る。日本式で書くと、

otiru（落）と　otosu
hiru（干）と　hosu

など、又

tatu（立）と　tateru
aku（明）と　akeru
komu（込）と　komeru

など、皆平行に行く。ヘボン式にして okiru, tatsu などとしては同じ形には行かなくなる。

d.　音便の例を見るに、例へば

日本式なれば	*T*ama	*t*ikai	*T*ure
	Aka*d*ama	te*d*ikai	Miti*d*ure
ヘボン式なれば	*T*ama	*ch*ikai	*ts*ure
	Aka*d*ama	te*j*ikai	michi*z*ure

日本式では t が d になると云ふ規則一つで盡きて居るのに、ヘボン式ではそれが三通りの變化になる。

e.　ハ行の音便でも、

*H*une（舟）が　Ko*b*une
*H*uta（蓋）が　Naka*b*uta

になるのと

*H*a（歯）　が　Ire*b*a
*H*itu（櫃）が　Kome*b*itu
*H*ei（塀）　が　Ita*b*ei
*H*ori（堀）　が　Turi*b*ori

になるのとを較べ、又

*H*uku（服）が　Mon*p*uku
*H*un（分）　が　ro*pp*un

になるのを

*H*a（派）　が　Sin*p*a
*H*i（日）　が　Ten*p*i
*H*en（遍）　が　hyap*p*en
*H*on（本）　が　Gap*p*on

になるのと較べると、フとハヒヘホとが全く同様な性質を持つて居て、これ等の變化は、日本式では單に h が b 又は p になると云ふことで盡きて居る。ヘボン式で書くとすると、h と f との二つが全く同じものに變るといふ珍しい結果になる。

f. 他の音便の例を云へば、

kakeba　が　kakya

yomeba　が　yomya

になる類がある。日本式では

tateba　が　tatya

oseba　が　osya

だから、皆 kakeba yomeba などと同じ形で行つて、凡て eba が ya に變ると云ふ規則で統べられる。ヘボン式でそれを書くと、タ行サ行に限つて

tateba　が　tacha

oseba　が　osha

だから、そのやうな規則が成立たなくなる。

上の通り日本式の方で規則が簡單になるのは決して偶然なことではなくて、それが日本語の性質に合つて居るからであるのは言ふ迄もない。言ひ換へれば、上の實例は皆日本式綴り方が日本語の性質に合つて居る證據だと言つてよい。

9. 漢字の音 (*) を漢字の字引で引くと、例へば

「加」は「古牙切」とある。

これは、ko-ga の前の字は父字 k, 後の字は母字 a を供給して「加」の音 ka を與へることを意味して居る。即ち、k(o-g)a に於ける中の部分を取去つて其音を知るのである。拗音の方では、例へば「秒」が「亡沼切」とあるのは、bô-syô を b(ô-s)yô のやうにして、byô がそれの音であることを示すのである。又「驅」が「丘于切」となつて居るのを見ると k(yû-)u だから、説明の字二つのうちの前の方が拗音であるのは無關係であることが知れる。

このやうな規則を知つて「地」を引くと、それは「徒利切」となつて居て、to-ri を上のやうにすれば t(o-r)i で自然に「地」の音として ti の綴りが得られる。又「貯」の「丁呂切」は t(ei-r)yo で tyo の綴りを與へる。逆にチやチュの音からタテツなどの出る例は、「琢」の「竹角切」が t(iku-k)aku で taku を與へるの（若し chiku-kaku と書いて ch を獨立の父字と見るならば chaku になる筈）や、「呈」の「直貞切」が t(yoku-t)ei で tei になる（若し choku-tei ならば chei になる筈）などである。「墜」の「直類切」が t(yoku-r)ui で tui になるなどは、チ音とツ音とが同じ父字で綴られることを示す點で特に面白い。

(*) 玆に云ふのは日本で認められて居る漢字の音のこと。

これで見ると、日本式綴り方は、日本で——ローマ字の形にこそは現はれなかつたにしても——昔から認めて居たもの否實地に使つて居たものである。

日本式綴り方とヘボン式綴り方との比較　其二
實用上から見て

10.　日本式綴り方は五十音圖に對して規則正しいから、外國語や音聲學を知らない小學校生徒や一般の日本人に極めて容易に合點される。一方ヘボン式は、大體五十音圖に從つて居て、而も shi, chi, tsu, fu 等不規則なものがある爲めに初學者には甚だ困難である。特に拗音は、日本式なら凡て一定の規則で行く爲に一度に全部を覺えるに引きかへて、ヘボン式では、キャキュキョは kya kyu kyo だが、シャシュショは sha shu sho, チャチュチョは cha chu cho, ジャジュジョは只二字の ja ju jo であるなど、初學者には中々合點され難い。又「丁稚」「一丁目」を Detchi, Itchōme とするなども覺えにくい方の著しい例である。

11.　又、實地の讀み書きについて比較するに、日本語には直音のシチツなどは甚だ多く使はれる音であるのに、ヘボン式でそれ等に限つて他の直音よりも一字づつ多くの字を讀み書きするのは甚だ煩はしい。これは、少しでも日本式を使つて見た人の誰れも實際に感ずることである。尤

も、ジャジュジョ　ヂャヂュヂョについては、日本式は各三字を要しヘボン式は二字ですむけれども、是等は日本語で出て來ることが少くもあるし、又是等の音は シャシュショ チャチュチョ と同じ資格の音である點から、日本式で是等と同樣に三字づつで書くのが吾々の心持から云つても寧ろ自然で、それが煩はしいといふ感じを生じない。現に看板や廣告などに ジャジュジョ などを jya jyu jyo などと書いてあるのが珍らしくないのはこの自然の心持を證明して居る。

12.　田中館博士が明治十八年頃に數多の普通の文章（新聞紙などから取つた實地の例）に就いて取られた統計によると、同じ文章をヘボン式で書くのと日本式で書くのとでは、字數が百分の三位違ふと云ふことである。即ちヘボン式で書いて百頁の書物は日本式では九十七頁で濟むわけになるので、これは、日本全國にローマ字を使ふ場合には、紙や色々な手間に莫大な差を生ずる譯である。

日本式綴り方とヘボン式綴り方との比較　其三
ローマ字の綴り方と五十音圖

13.　人によつては、五十音圖が音聲學的に規則正しくない處から、それの組み立てが「誤つて居る」とか、「價値のないものだ」とか評するのを聞く。併し、上に述べたやうに、日本語に實際使はれる音の使ひ途の關係から、ローマ

字の綴り方と同等だと云つてよい漢音の反切までが、全く五十音圖に對して規則正しくなつて居る事實は否むわけに行かない。

それ故、若しローマ字の綴り方を——五十音圖をけなす人々のやうに——ヘボン式又は其他の五十音に拘泥しない式で書くとすれば、上のやうな文法上のことを說明するには、其式で五十音圖を書いて置いて、問題の起る毎にそれを參考しなければならなくなる。現に英語で書いた日本語の文法書にはそんなのが珍しくない。若し五十音圖の通りのものを書いて置かないとすれば、例へば「規則正しく行けば ti になるべきものは chi になり、tu になるべきものは tsu になる」などといふ規則を設けることが必要になる。併しかういふ規則は、五十音圖を掲げるのと實質に於て同じことであるのは云ふまでもないから、つまり五十音圖をけなす人は却て五十音圖を座右に備へて置いてそれの厄介になるといふ滑稽に陷るわけである。

これはつまり、五十音圖が日本語で音の使はれる關係を規則正しく表はして居るといふ事實だけはどうしても認めなければならないといふことの證據である。

14. 日本式綴り方を使ふとなれば、五十音圖の實質が綴り方の中に含まれて居るから、五十音圖を別に備へて置く必要がなくなる。そしてサ行タ行等をカ行マ行其他と同樣

に取扱つて行けることは前に (§8, 9) 述べた通りである。

日本式綴り方とヘボン式綴り方との比較　其四
音聲學との關係

15. 日本語の音を表はすと云ふ點から見てヘボン式が正しくて日本式が正しくないと思ふ人があるが、第一、ヘボン式が正しいと云ふ考へは當つて居ない。一體、ヘボン式は父字の發音を英語の規則に從はせて居るのであるのに、其英語の發音の shi や fu などは日本音のシやフと丸で違ふ。日本のシには英語の si の方が shi よりも近いと云ふ人が多いし、又フも、語と人によつて、hu に極めて近い音はいくらも聞くが、fu (上の齒と下の唇とを接して出す音) のやうな音は聞く事がない(*)。

又現在のヘボン式ではヅを zu と書くが、音から云へばこれは dzu と書く方が正しいとは外國人も云つて居る (Chamberlain 氏の「口語日本語」p. 17, 本書 §36 參照)。又、ンを書くのに b, p, m の前では m を使ふと云ふのは音聲學的に正しい爲と云ひながら、k, g の前でンが英語の ng の値を持つ場合の區別——m になる場合と同等に取扱はれるべき筈の區別——を書き表はさない。のみならず、

(*) Lange といふ人の書いたドイツ文の日本語の教科書に、"f は u の前にのみ使はれて、多くの日本人の發音では h のやうに響く" と書いてある。

日本語のンは西洋の n や m と丸で違ふ特別な音である(*)といふ最も大切な點さへ書き表はす方法を講じてない。又シを shi チを chi と書くならば、ニヒやキミリなども何とか別の書き方をしなければいけないことになる（すべてイ列の父音は外の列の父音とは少し變つて拗音の父音と同じになるのが日本語の特性である）のに、さうはしない。要するに、音聲學的に見るならば、ヘボン式は中途半端なものだと云はねばならない。ヘボン式が音聲學的の價値を持つて居るなどと思ふのは大きな誤である。

16. 日本式では音が正しくないと云ふのは、音聲學的の立場から、例へばタチツを ta ti tu と書いては、同じ t の字が三つの異なる音を表はすことになるからいけない、と云ふのである。併し、吾々のローマ字は日常生活に使ふ道具で、音聲學の道具ではないから、上に述べたやうに、日本語の性質上根據があり、實用上にも便利であることを犧

(*) 日本語のンはフランス語の鼻音と同樣な音で、半ば母音の性質を持つて居る。これは、唱歌や其他の謠ひ物でンをいくらでも長く引いてうたつて居る事實から考へてもよく分ることである。西洋人にはこれが餘程むづかしい音であると見えて、西洋人の日本語の聞取れなかつたり、不自然に聞えたりするのを注意して見ると、ンを英語などの n のやうに言つて居る爲であることが多い。この點から見て、耶蘇教の讃美歌でンを西洋の n のやうに取扱つて居る（ンに獨立の音譜を與へない）のは、日本語として甚だ不都合なことであると思ふ。これは、西洋人が西洋人の持つて居る材料から作つた理窟を何にでも當嵌めると云ふ理不盡から來たものであるらしく思はれる。

牲にしてまで音聲學に氣兼をする必要はない。つまり、日本の ti はチ、tu はツだと定義を下すことにするから、音の正しいも正しくないも丸で論がない。尤も、定義を下すとすれば、どう定めてもよいといふ意味ではない。吾々のは、上に述べたやうな理由が十分あつての上の定義であるから、其定義に權威を持たせてよいのである。何でもかまはず定義で行かうといふ左近式（§52—54）のやうな態度には吾々は感服し兼ねる。

17. 外國語でも各の文字が一定の値を持つて居るとは限らない。t が英語の ch の値を有する例は英語の Christian の類にあり、發音の規則正しい獨逸語でさへ t が ts の値を有する例は tion や tial の語尾を有する無數の語にある。尤も、是等は獨逸語の中でも語の種類が特別だからとも云へるが、もつと一般的な實例は、同じく獨逸語で、“p 及び t の前にある s はいつも sch と同樣に響かせる”といふ規則である。日本式で“t は i の前では英語の ch のやうな音、u の前では英語の ts のやうな音を表はす”と云ふ規則は、これと全く同樣な取り極め方で、實用的の書き方の取り極めとして、少しも不都合だといふことも煩しいといふこともない。

日本式綴り方とヘボン式綴り方との比較　其五
科學的な書き方

18.　日本式の綴り方は非科學的 (unscientific) だといふことを云ふ人があるが、此論は科學といふことに就て、一を知つて二を知らない議論である。

一體、科學は或る與へられた範圍の事柄を分類し、系統を立てて、人がそれを學び、合點し、又他にそれを應用するのに便宜なやうな仕組である。物理學や化學のやうに、考へるべき事柄の範圍性質の定まつて居るものでは、科學的な取扱ひ方が大抵きまつて居るのが普通であるけれども、他の問題になると、取扱ふ材料題目次第で、科學的な取扱がいろいろに變つて來るのは寧ろ自然なことである。

19.　音聲學は凡ての人類の話す音を題目としてそれを最も便利に取扱ふ仕組である。そのやうな音を取調べる場合には、音聲學の書き方で種々の音を書くのが科學的なのである。

20.　吾々の今考へて居る題目は、人間全體の音ではなくて、日本語にある音である。而も吾々の目的は只音を寫すだけの仕組ではなくて、日本語で思想を書き表はす爲の書き方、即ち意味もあり、語と語との文法上の關係も具はつて居る數多の語を書く仕組が問題になつて居るのである。

このやうに、取扱ふべき材料も違ひ、其材料の資格も違ふのだから、音聲學の書き方として科學的な書き方は決して日本語の實用上の書き方として科學的ではない。上に日本式が日本語の性質に合つて居ると云つて述べたことは、言換へれば、日本式が、思想を書く爲の日本語の書き方として最も科學的だといふことを意味するのである。

日本式綴り方とヘボン式綴り方との比較　其六
聞く人の書き方と言ふ人の書き方

21.　ヘボン式は聞いて學ぶ人の書き方、日本式は言ふ人の書き方だと云ふことが出來る。聞く人は音を聞いてそれを寫すことを第一の要件とするわけで、外國人が日本語を聞いてそれを書く場合に、其音を自分等に成るべく分り易く寫すと云ふ態度を取つたのは當然なことと云はねばならない、——それが完全に正しく寫されて居ないとしても。

22.　併し言ふ人の側から云へば、出る音よりも、どういふことばをどう結び合せて思想を表はすかが問題である。例へば「金」と云ふ語と「屏風」と云ふ語とを組み合せて Kinbyòbu と云ふときに、キンのンが m の音に變るといふことは、發音そのものを調べる人には要用なことであらうけれども、言ふ人の側では一向注意しないことで、ンが m の音になるのは當人が意識しないで自然に起る變化であ

る。又「金貨」と云ふのも同樣、此時キンのンが ng の音になることも、言ふ人は少しも注意しないことである。つまり言ふ人は「金」「金屏風」「金貨」の三つで Kin と云ふ語は同じつもりで居るので、n が m になり ng になるのは自然の結果として表はれるのである。聞く人はそれを n m ng と書き分けるのもよからうが、言ふ人はそれを書き分ける必要を感じない、寧ろ同じに書く方を當然と思ふわけである。日本式では實際吾々日本人が各々の語を云ふときに、云はうと思ふことを主にして書いて居るので、同じ n を使つて Kin, Kinbyôbu, Kinkwa と書いて居る。

23. 上に出したのは組立言葉であるが、シチツなどの綴り方に就ても全く同樣である。§8 で述べた通り、吾々の實際使ふ上の關係を云へばタチツテトの五音は全くカキクケコの五音と同樣であることから考へて見ると、t の音が i の前や u の前で性質が變るといふことは、n が b や k の前で性質をかへるのと全く同樣な、日本語の自然の性質である。從て、言ふ人、音を使ふ人の心持から云へば、タチツテトを ta ti tu te to と書くのが全く當つて居るのである。

24. 要するに、音の使ひ途から云へば五十音圖は全く規則正しいもので、それのうちの或る音が音聲學的に不規則になつて居るのは、日本人の發音上の癖と見るべきである。どうせ、吾々の使ふ道具であるから、このやうな癖には正しい正しくないといふやうな議論はある筈がない、只そのやうな癖があると云ふ事實が絶對の權威を持つて居るのである。そのやうに不規則になつて居るのが善い日本語の音なのである。

このやうに自然に起つて居る音の變化は、吾々使ふ人の側から云つて一々それを書き表はす必要はない。音を使ふ人は使ひ途の規則正しさに從つて規則正しい書き方をするのが當り前なことであつて、それが卽ち日本式の書き方である。

日本式綴り方とヘボン式綴り方との比較　其七

英語や外國人に對する點

25. 英語に對する點。兒童に ti をチと讀むやうに敎へると、英語を學ぶときに英語の ti を同樣に讀んでこまるだらうと云ふ人が少なくない。これは我々が考へて居るローマ字の重大な使命を知らないで、枝葉の事柄を心配するのであつて、たとひ其やうな點でこまつてもかまはないとすべきであるけれども、實際上そのやうな障りがあるかないかを考へることも、全く無用ではあるまい。

ローマ字で書いた綴りをローマ字流に讀んでは英語と違ふといふことは、ti や tu に限つたことではない。英語の

a I made to do are などはいづれもローマ字流に讀んではこまる語である。この點に於て ti や tu の場合と何の差もない。綴りが同じでも日本語だからア、イ、マデ、ト、ド、アレと讀む、英語だからエー、アイ、メード、トゥー、ドゥー、アールと讀むのである。それと全く同じことで、日本語だからチと讀む、英語だからティと讀むのである。この日本語だから、英語だからといふ區別は、どんな綴り方を使つても、始終注意して居なくてはならないことであるから、ti tu について特に讀み違へてこまるといふ論は全く入らない心配である。現に、日本式を學んだ兒童に就て其點に注意して見た人の話を聞いても、そんな困難はないのである(*)。[若し ti に就て困難があるとすれば、それはローマ字でチをさう書く爲に起るのではなくて、英語の ti 音其物が日本人にむづかしい爲であるに相違ない]。

一體英語の發音は日本語の音と違ふのだから、ローマ字を英語の豫備として教へるなどは適當であり得ないことである。若しローマ字と英語の間に關係があるとすれば、それは只、日本語を書く間に字の形を覺えるのと、k s t などのやうな父字は母字と合して始めて音を表はすといふ性質

(*) ロシヤ語を學び始めた人の經驗談に、ロシヤ語の p は英語などの r, c は s, y は u, H は N と同じものであるので、取り違へさうに思はれるけれども、案外取り違へることがないといふ。これも上と同樣な事實である。

を悟るといふ利益がある點である。これだけの利益は、日本式でローマ字綴り方を習つたので十分に得られる。もつと立入つた各綴りの發音になると、日本語のローマ字綴りと英語の綴りとは全く關係のないものになつて居る方がよいのである。此點ではヘボン式のやうに英語の規則によつて綴り方を取捨したものは、それで英語流に正しい發音に當つて居るかのやうな感じを起させる爲に却て誤を起すことが多い。

要するに、日本語のローマ字綴り方は、我々のローマ字を使ふ立場から云へば勿論、英語を學ぶものの爲から云つても、英語と全く關係のないものにして、日本語は日本語、英語は英語、別々だといふことを初から納得させて置くことがよいので、日本式綴り方は丁度此方針に合つて居る。日本語のローマ字綴り方を英語の發音規則の爲に取捨するのは日本語、英語兩方の損である。

26. 外國人に對する點。日本式では外國人がちがへて讀むだらうと心配する人があるが、一體日本語の讀み方の規則を學ばない外國人ならば、日本語と違ふやうに讀むのが當然で、現にヘボン式で書いてさへカマクラをキャミャキュラと讀む。發音の規則を學ぶとすれば日本式でも極めて簡單で、外國人に取つて何の困難もない。却て日本式の方が文法上の規則が簡單になる爲に、日本語を學ばうといふ外

國人に都合がよい。

27. 萬國的な點。日本語の發音規則を學ばない外國人の場合を云へば、獨逸人佛蘭西人伊太利人がヘボン式のチ chi を見てヒやシやキと讀むときの相違と、日本式の ti を見て外國の ti の通りに讀むときの相違とを較べると、前の方は丸で違ふので意味が通じないが、後の方は誤解の恐なく意味が通ずる。ヂの ji と di も同樣で、外國船に品物を賣込む「明治屋」が「メイイヤ」と云はれる處から Meijiya を改めて Meidiya としたのはこれの最も適切な實證である。日本式の tya, tyu, tyo, dya, dyu, dyo なども、どの國語でも日本音に近く發音する。ヘボン式の cha, chu, cho, ja, ju, jo が丸でちがふ風に發音されるのに較べると、日本式の方が萬國的性質を多く備へて居る。

28. 世界に於ける日本語の書き方。外國人方面で行はれて居る日本語のローマ字綴り方がヘボン式にきまつて居ると考へて居る人があるが、決してさうでない。ドイツ語の地圖 (Andree の) に Tschoschi (銚子)、Itschinomija (一の宮)、Hodscho (北條)、フランス語の百科辭典 (Larousse や Colin) に Fouziyama (富士山)、Tokousima (德島) などとある。

尤も、大體の形勢を見ると、ドイツやフランスでもヘボン式が多く使はれて居るが、それはやがて英米人のきめた

日本語の書き方が正式な日本語のローマ字書き方と見られる虞があることを示すものであるから、吾々は今のうちに——卽ち外國でまだ全く一つにならないうちに——吾々の手で吾々に適切な書き方を定めなくてはならないのである。

上に述べた通り、日本式綴り方は丁度さういふ適切な綴り方であつて、而もそれが萬國的性質を具へて居るといふのであるから、吾々は躊躇することなく、この日本式綴り方を採つて進むべきである。

日本式綴り方とヘボン式綴り方との比較　其八

外國の ti 音 tu 音などの書き方

29. ti tu をチツと讀ませるならば、外國の ti tu 音をどう書くかといふことを危ぶむ人がある。併し、外國の ti tu 音は日本語の音ではない。此點では英語の cat の a, not の o, 獨乙語の ch, 佛蘭西語の鼻母音など、皆同樣である。外國の ti tu 音を書くことを心配するならば、これ等の種々の音の書き方も皆心配しなければならないわけである。さうなると、問題が日本語の書き方でなくて、人類の凡ての音の書き方になるわけで、吾々の目的と丸で離れてしまふ。これ等の多數の外國音を書く方法を設けて置く必要が

ないとすれば、外國の ti tu の音も別に書き方を設ける必要はない。(外國でも、例へばドイツ語やフランス語などでは英語の th 音をどう書くことも出來ず、英語や佛蘭西語などでは獨乙語の ch 音をどう書くことも出來ず、佛蘭西語や伊太利語では—h が常にサイレントであるから—英語や獨逸語などの h 音をどう書くことも出來ない。日本語の中で外國の色々な音をどう書くことも出來ないことも、これ等と同樣止むを得ないとして當然なことである)。尤も、特にこれ等の音のことを日本語の文章の中で論ずることはあるだらう。其時には、茲に私が書いて居る通り "Gwaikoku no *ti tu* no On" と書けばよい。"ドイツの ch" "フランスの en" 其他も同樣にすればよい。

30. 人によつては、外國の ti tu などの音は、今は日本になくても、其内に行はれるだらう、其時はどうするかと云ふ。これも考へ方が淺い。假にそれが行はれるとして、何にさう云ふ音が行はれるかと云ふと、外國語を日本語の中に使ふ場合に行はれるに相違ない。外國語を入れる場合のことを云へば、上に云つたやうな種々の外國音も皆同樣に使はれることがあり得る譯であるから、獨り ti tu のみを心配すべき理由がないし、且つ又何れの外國音に就いても心配する必要がないのである。何故なれば、外國語は、假令日本語に混ぜて使つてあつても、綴り方も讀み方

も元のままに置くのが當然なことであるから。例へば英語の tin と云ふ語を使へば、それは英語だから(英語とわかるやうな處でなければ使つてはいけないことは云ふ迄もない)、tin と書いて英語風に讀むべきである。

31. 此外に、ti tu のはいつた外國語が、他の點では日本化して、只 ti tu の發音のみが外國流になつて居るといふ場合も考へられないことはないが、私の考へでは、日本人の發音の癖から見て、かういふことは起らない——tincture をチンキ、Typhus をチブス、Platina をプラチナ、Nicotine をニコチン、Distoma をヂストマ、Radium をラヂウム、Diastase をヂアスターゼ、Tuberculin をツベルクリン、Doek をヅックとする實例もあるから。假令又或る特殊な語だけは ti tu を外國語風に讀むとしても、それが外國の語である點から、それは特別にそのやうに讀むのだとして少しも差支なく、且つそれが最も穩當な處置である。少くとも、このやうな、起りさうにもない事の取越苦勞から、現在十分な理窟のあることを矯める必要はない。

日本式綴り方と假名遣ひ

32. 日本式綴り方ではザ行の zi zu zya zyu zyo とダ行の di du dya dyu dyo を區別して書き、又 ka ga と kwa gwa も區別して書く。これ等の音は、人によつては區別な

しに言ひ且つ聞く爲に、――特にザ行ダ行に就いてはヘボン式でどちらも同じく ji zu ja ju jo とする爲に――日本式は假名遣ひに拘泥して居ると考へる人もある。

然るに、他方では假名でハヒフヘホと書いても音がワイウエオであるのは wa, i, u, e, o と書き、假名ではシヤウ、ショウ、セウ、セフなどと書き分けるのでも音が syô ならば皆 syô と書く。其他の拗音の場合も皆同樣である。これ等の點では日本式は發音的であると云へる。

此等の二通りの取り極めが撞着して居るやうに見えるので、日本式は譯がわからないといふ評を受けることがあるが、下に記す吾々の立場を見れば此疑は解けようと思ふ。

33. 日本式の立場は次の二個條にあるので、上の二通りの取り極めは二つとも其れの結果である。日本式では

(1) 從來各々の假名が單獨に表はして居る諸音は各々の獨立の存在を認める。

それ故にザ行とダ行とに似寄つた音があつても、別々に獨立の存在を認める。之に反して、ヤ行のイエ、ワ行のウは、ア行の イエウ と同じ假名になつて居るから、yi ye wu の綴りは認めない(*)。私の考では、yi ye wu の音は日本人の趣味に合はないいやな音であるので（私自身の感じ

(*) 英語風の綴り方では ye の綴りが使はれて居る、特に金の「圓」の外國綴りが皆 yen になつて居るけれども、ローマ字では圓を En と書く。

は實際其通り）それを使ふべき所にはア行の音を使ふのが善い日本語だといふことに自然になつて居るのであらう。

この方針は、假名に盲從又は拘泥するといふ意味でなく、現在の書き方で區別を認めて居るものは、ローマ字でも區別するのが當然なことだといふ意味から來て居る。

(2) 假名の書き方で書いてある通りに、卽ち單獨の假名通りに發音しては實際と違ふ場合には、實際の發音を表はす書き方に從ふ。

それ故にシヤウ、ショウなども音が si-ya-u si-yo-u でなくて syô である場合には syô と書き、ハヒフヘホも音がワイウエオである場合には waiueo と書く。ワ行の wi we wo も、單獨の音としては存在を認めて居るが、實際に使ふ語では大抵の場合に其通りに發音しないので、綴り方も大抵 i e o にする。尤も“植ゑる”などは音に於ても uweru の方が當つて居るかも知れないが、これも關西では却つて uyeru といふ音にして居るといふことであるから、矢張 ueru が一番無難らしい。

34. 關係詞のヲだけは、實際の發音も wo の方が正式なものと認めて――假令日常の多くの場合には o の方が近くても、改まつて注意して云ふときには wo と發音すると認めて、書き方も wo とする(*)。

(*) 近畿から中國邊の人は、改まつて云ふときにも o と發音するらしいけれども、o ではいけないと思ふ人が實際少ないとは云へないから上の樣にする。

35. kwa gwa は實際 ka ga と違ふやうに發音する人が多く、且つ其方が正式だと認められて居るから、kwa gwa と書く。東京辯では kwa gwa を ka ga と同じに——例へば Hakurankwai を Hakurankai のやうに——いふけれども、これは東京辯の訛りと見てよい。これを東京辯の訛りといふのは余り酷だと云ふ人もあるやうであるが、併し「火鉢、日比谷」を Sibati, Sibiya といふのは誰でもそれを東京人の訛りとするに異存があるまい。? 次に「新宿」を Sinziku と云ふのはどうか、これはヒをシと云ふ程に判然と訛りと感じて居ない人が多いらしいけれども、Sinziku で正しいとは誰も云ひ得ないことで、それは矢張り東京辯の訛りであると云はねばならない。クヮをカと云ふのは、シュをシと云ふのと性質までも似た違ひ方で、「シュをシと云ふのは訛りであるが、クヮをカと云ふのは訛りではない」といふ議論は成立ちさうに思はれない。

併し、「皇、光」などの漢字の發音になると、kwô と發音する人は極めて稀で、發音に注意して讀む場合でも、大抵 kô と云ふから、これは kô と書いて居る。若し尙取調べた結果、kwô も音の方から別の存在を認める必要が起つて來れば、矢張り kwô と書くのが正當になるわけであるが、是迄の處その必要を認めて居ない。又、反對に、將來 kwa gwa を ka ga と云ひ分ける人が、現在 kwô を kô と云ひ分ける人の少いと同じ程度に少くなるならば、kwa gwa を ka ga と書くのが當然になるわけである。

36. ジとヂ、ズとヅ等に就いては、日本式で各々獨立の存在を認めることは上に述べたが、音の點から云つても、これ等は別々のものである。九州四國邊の人は實際其區別をして居て、ヂと云ふべき處をジと云ふと意味が通じないといふ事實から見て、それ等が別々の音だといふことに少しの疑を挿むことも出來ない。

私自身は東北の生れで、この區別には不得手であるが、それでもこの區別に注意して居れば、云ふ方にも聞く方にも區別が出來る。つまり、シズと云ふ通りの口付きで聲を喉から出せばジズになり、チヅと云ふ通りの口付きで聲を喉から出せばヂヅになる。これは誰でも自分で練習すれば區別が出來るやうになる。東京其他の地方で區別をして居ないのは、知つて同じにするのではなくて、このやうな教育を怠つた爲に、區別を知らないのだと云ふのが當つて居ると思はれる。

外國語の發音に就てはむづかしいことを知つて居る人の中にも、日本語のジとヂ、ズとヅ、ジュとヂュ等の區別を無視する人のあるのは滑稽なわけである。英語の buds と buzz の差や、injure の ju と exposure の su の差などは丁度ダ行とザ行の差に當るやうに思ふ。チエンバレン氏の

「口語日本語」の書 (p. 17) に、「水」を mizu とするのは音の上で正しくないと云ふ意味のことの書いてあるのを見ても、ズとヅの區別は却て外國人によく感ぜられる區別だといふことが知れる。

37. ジとヂ、ズとヅは音の資格の上から云つても、一方はシスの濁音、一方はチツの濁音だから、各々獨立に存在すべきものとするのは至當なことである。この點は音便の變化を見れば尙具體的にわかる。

*S*ika—Me*z*ika	*t*ikai—te*d*ikai
*S*umi—Syu*z*umi	*T*uki—Mika*d*uki
*S*yasin—Iro*z*yasin	*T*yaya—Ikken*d*yaya
*S*yusu—Ke*z*yusu	*T*yôsi—Hon*d*yôsi

これ等は皆サ行がザ行に、タ行がダ行に變るといふ一般の規則に從つて居るので、それが

*S*ake—Siro*z*ake	*T*ama—Aka*d*ama

と同樣な音便變化であることが、z と d との書き分けによつて適切に表はされるのである。

38. zya zyu zyo と dya dyu dyo に較べて、ja ju jo の方が短くてよいと云ふ人が少なくないけれども、短くない方が却て日本人一般の感じに適して居ることは §11 で述べた通りである。

39. 上に述べたのは、理窟の上から、ka ga と kwa gwa, zi zu zya zyu zyo と di du dya dyu dyo を區別して書く方が正當だといふことを述べたのであるが、人によつては、(1) これ等の云ひ分け、聞き分けをする日本人が少ないと云ふ理由、又は (2) 自分等がこれを區別しないから、區別をさせられるのは實際上こまる、といふ理由から其區別をなくしようと主張する。

40. これ等の言ひ分け、聞き分けをする人が少ないと云ふ點に就て考へるに、若しその區別をなし得る人でも其區別をすることに左程熱心でなくて、どうでもよいといふ態度で居るか、又はさういふ人が極めて少ないのならば、kwô (皇光)の場合のやうにそれを書き分けなくてもよいとなるに相違ない。併し、今はまだ中々さうではなくて、其區別をなし得る人が其區別を廢すること（例へば「水」をミズのやうに發音するのが正しいとすること）に異議を申出さなくなることは實際望のないことであるし、又さういふ人の數は——比較的には少數だとしても——まだ可なり多いのである。其上、現在の假名書きではそれ等を區別して書いて居るのだから、いくら區別をなくしようとする側からひいき目に見ても、其方針にきめて進むことは無理なことである。

41. 一體、上のやうな區別を廢するかどうかは、國語其ものの問題で、ローマ字の問題ではない。國語の方で一般

の意見が改めたいときまつて居る問題ならば、字を改めるを機として實行するといふのも結構であるけれども、一般の意響のきまつて居ない問題に對しては、ローマ字の方から勝手な取極めをすることは穩でない。ローマ字使用の目的から云へば、ジヂの區別の存廢の問題は、國語の問題として其まゝ殘して置いて差支のないことで、其方が穩當でもある。將來國語の側で、ヂをジと書くのがよいと一般に認められるならば、その時になつてdiを廢してziと書くことにしても晩くはない。それまでは、ローマ字では矢張區別を存して置くのがよい。

42. 上のやうな區別を音の上で爲し得ない人が、實地書くのにこまるといふ論は、一應尤なことであるが、それの參考になるのは、書き方の規則正しいと考へられて居るドイツ語のf, v, phである。これ等は同じ音であるに拘らず、ドイツ語で書き分けることになつて居るが、我々ドイツ語を學んだものはそれの爲に大きな不都合を感じては居ない。全く教育を受けない自分の言ふ音のみを知つて居るドイツ人には困難があるかも知れないけれども、日常の新聞雜誌等を見て居るものには、まぎれることがない。日本語でヂジ等の區別の丸で出來ない人でも、ローマ字で書いた文章に多少慣れれば、見た形の方から區別が自然に出來て何の苦勞もなくなることは、このドイツ文の例で十分分

る。只ローマ字文に慣れないうちは、自分で書かうとする時に、時々問題が起つて字引を引く世話がいる。併し、これも、二三度書いた後には、ひとつの語はzなりdなりで目に映るから、ぢきに見覺えられるので、實際上は左程手數のかゝることはない。

ウ列の音にuを省く說について

43. 人によつては、ウ列の音、クスツムルグズヅブプ等を書くのにuを省いてk, s, ...と書く、例へばarimas, wataksiなどのやうに。これには二種の論者がある。第一は是等の場合にはuの音が實際ない——a-ri-ma-su, wa-ta-ku-siといふのとは違ふ——からuを省くと云ふ論者。第二は、實際の發音はどうでも、只日本のクスツ.....をk s t.....と書くと取り極めるから、それでよいと云ふ論者。

44. 第一の論者の云ふ事に私が贊成しない理由が二つある。一つは、實際それ等の場合にuの音が丸でないのではなくて、只輕く小さく(喉で聲を出さずに口先だけで)發音して居るのであると云ふ點である(*)。例へば横濱で外國

(*) 地方によつては(例へば高知の人などは)玆に云ふやうな無聲音を使はなくて、凡てwa-ta-ku-si a-:i-ma-suと各の假名(綴り)を十分に云ふ。今玆では、東京の云ひ方を標準として、それに就て論ずる。

人が出した日本語の本などにも、ari-masŭ このやうな印をつけて、u を省いてはないのなどもその爲かと思ふ。又このやうに口先だけで音を出すことは、ウ列の音に限つたことでなくて、Kiku（菊）Kita（北）の *Ki*, Sita（下、舌）Sika（鹿）の *Si*, Kinpika（金ピカ）の *pi* なども同樣な所謂無聲音である。これを考へても、決してクスッ……などにだけ u を省くといふ理窟がないことがわかる。

45. もつと大切な第二の點は、吾々の最も注意すべきは正式な日本語の書き方であると云ふ點である。小說か何かで、人の云ふ詞を癖や訛りまでそのまゝ寫す場合などは別として、普通の吾々の書き物は思想を表はすことが主であつて、人がそれをぞんざいに讀むか、開き直つて讀むか、各自の癖のままに讀むかは、問はないのが一般の場合である。それ故に、このやうな書き物は、正式な讀み方、正式な日本語に適するやうに書くべきである。

正式な日本語としては、ウ列の音にも u 音の存するのが至當であることは、吾々が開き直つて物を云ふとき、歌にさう云ふ文句を入れる場合、唱歌や從來の種々の謠ひ物でそれを取扱ふ仕方等を考へれば、少しも疑ふ餘地がない。從つて正式な書き方は、それに從ふのが當然である。このやうに arimasu, watakusi と書いてあるのを讀む場合に、arimas, wataksi に似たやうに讀まうと讀むまいと、それは讀む人の勝手にしてよい。

46. 第二の論者の云ふやり方では、例へば、u の音の確にある kamu を kam とし kumu を km 又は kum とする類で、これはローマ字の性質を根本から變へるのであるから、失ふ所が多くて、得る所が少いだらうと思ふ。

ローマ字のいろいろな綴り方

47. ローマ字の綴り方には、ヘボン式日本式の外に、眞面目な研究の結果として纏まつた形に整理されて發表されて居るのが、南部式、左近式、片山式、鳴海式、稻留式などいろいろある。

48. 南部式綴り方。南部義籌氏は日本で最初のローマ字國字論者で、明治二年と五年に、ローマ字を國字とすべき建議を其時の文部省に出した人である。その後、絕えずローマ字問題に努力して居られたが、大正六年三月に高知で死なれた。氏は「土佐日記」のローマ字書き（明治二十七年版）、Abezyibumi no Itoguti（大正五年版）其他色々の本を書かれた。

49. 南部氏は、讀みくせは惡い習はしであつて、假名遣ひの通りに讀むのがよいと云ふ見方から、假名遣ひの通りをローマ字で書いて、書いた通りに讀まうと云ふことを主張されたので、立場が吾々とは違つて居る。それ故に吾々

から見れば發音とちがふ假名遣ひと見えることも、氏の立場から見れば假名遣ひではなくして、音の通りをそのまま書くと云ふことになる、例へば「卽（すなはち）」と云ふ言葉は吾々はスナワチと發音するのが正しいと見て sunawati と書くが、氏はスナハチと發音するのが正しいと見て sunahati と書くと云ふのである。

50. 氏の書き方を "Abezyibumi no Itoguti で見ると

(1) 各々の假名に相當するローマ字の綴り方は、ヤ行のイエを yi, ye とし、ワ行のウを wu とする外、日本式と同樣である。

(2) 五十音のア行とヤ行とワ行とを除いた各行に y の拗音と w の拗音との凡てを認める。例へば、sya, syi, syu, sye, syo; tya, tyi, tyu, tye, tyo; swa, swi, swu, swe, swo; twa, twi, twu, twe, two など。

(3) はねる音は ng, n, m の三種を認める。

(4) つまる音は次に來る父字を重ねて表はす。

(5) 假名では同じに書く場合でも、國語と字音とでは色々區別があるらしい。例へば、「標し」は *sirusi*,「自然」は *syizen* となつて居るし、「口」は ku*ti*「一」は it*yi* となつて居るし、「一つ」は hito*tu*,「發達」は hatta*twu* となつて居る。

例、mozyi（文字）。euom（拗音）。Nihon（日本）。zenryaunaru（善良なる）。

Iro ha nihohe do, tiri nuru wo, wa ga yo tare zo, tune nara mu. Uwi no okuyama, kehu koye te, asaki yume mi zi, wehi mo se zu.

51. 南部式は既に述べたやうに、吾々とは全く違つた立場から來て居る書き方であつて、吾々の立場から見て、それが今日の實用に適するものとは考へられないけれども、古典語を書く書き方としては良からうと考へられる。それにしても、シ チ ッ などを國語であるか字音であるかによつて書き分けるなどは餘りむづかし過ぎると思ふ。

52. 左近式綴り方。左近義弼氏は大正五年の夏頃から、ローマ字の綴り方について、度々（幾分づつ違ひのある）案を出して居られたが、いよいよ案がきまつたと見えて、大正六年六月に「國字としてのローマ字」といふ本を出して、左近式綴り方（自分では「最新式綴り方」と名付けて居られる）及びそれの利益を色々述べて居られる。

53. その綴り方の要點を書いて見ると

(1) クグスズツヌフブプムユル は常に（實際の音に u があるないに關らず）k, g, s, z, t, n, h, b, p, m, y, r と書く。

(2) キギシジチニヒビピミリ は常に q, ɢ, c, ɟ, x, j, f, ɸ, ɸ̈, v, l と書く。

(3) 拗音は (2) に出した キ ギ シ 等の標しに a, u, o を添へて書く；qa キャ、cu シュ、xo チョ、ja ニャ、vu ミュ、

lo リョ などのやうに。

(4) はねる音は ñ で表はす。

(5) Gai などをグアイなどと讀ませたい時には、Gäi などのやうに、母字の上に (··) をつける。

(6) ヂ、ヅ、ヂャ、ヂュ、ヂョ、クヮ、グヮ は ジ、ズ、ジャ、ジュ、ジョ、カ、ガ と同樣に ϵ, z, ϵa, ϵu, ϵo, ka, ga とする。

(7) 引く音は普通には短かい音と同じに（標しをつけないで）書き、特に必要と認める場合にだけ母字を重ねて表はす。

(8) つまる音は k q の前では k, s c の前では s, t x の前では t, p f の前では p と書く。

(9) 名詞は日本式と同樣に凡て大文字で書き出す。

例、Szme（雀）。Hel（緣）。Fgac（東）。Cl（臀）。Xz（地圖）。Vnav（南）。Lkt（理窟）。Yq（雪）。Waj（鰯）。Gäi（工合）。Cppo（尻尾）。Fakco（百姓）。Boz（坊主）。Cohoo（處方）。Cooho（商法）。Lote（兩手）。Qnta（砧）。Qñta（金太）。Cmbac（新橋）。Hmpat（奮發）。Krcv o xttomo crazj or.（苦しみをちつとも知らずに居る）。

54. 左近氏は、字數を少なくする爲と、讀み易くする爲との二つの目的から、斯樣な綴り方を撰ばれたものらしい。字數の點では氏がヘボン式及び日本式と比較して居られる通り、餘程少なくなるに相違ないが、讀み易くと云ふ目的に添ふかどうかは疑問であらうと思はれる。特に、ロ

の性質を顧みない斯樣な書き方は、世界的に通用し發展する上では、至つて値打の少ないものと云はなければならない。

55. 大正七年五月に左近氏は又上の式を改めて、c f j l q v x を使ふことを止め、其代りにイ列の音を、其行の父字の中程に横線を引いて表はすことにした。それに a u o を添へて拗音を表すことは前と同樣である。併し「左近式」といふ名前で尤も人の注意を引いたのは上に述べたものであるから、茲には前のものを主として述べた。後の式とても、横線付の b k などをビやキと讀ませるなどローマ字の形と性質をこわして居ることは前のものと同樣である。

56. 片山式綴り方。醫學博士片山國嘉氏は大正三年十一月に「羅馬字の假名式遣方」と云ふ本を出された。それによつて見ると、氏の案には歴史的假名遣ひとローマ字との間に一致調和を計ると云ふことが土臺になつて居るので、今の發音から見て同じ音でも假名遣ひにあるだけの區別はローマ字でも區別しようと云ふ書き方である。

57. その綴り方の要點を書いて見れば

(1) 各々の假名が單獨に表はして居る音の書き方は、ヤ行のイエを y, ye とし、ワ行のウを w とする外大體日本式と同樣である。拗音も同じこと。

(2) ワ イ ウ エ オ と讀まれるハ ヒ フ ヘ ホ は há

(又は â), ï, ú, é, ó とする。

(3) アイウエオと讀まれるワヰウ(ワ行のウ)エヲはaiueoの上にVの標しをつける。

(4) オと讀まれるア、オと讀まれるフ——例へば、アヲメ(青梅)をオオメ、タフス(倒す)をタオスの類——はauの上に°をつける。

(5) 差支のない限りku, gu, su, zu, bu, pu, mu, ruのuとto doのoを省いて、k, g, s, z, b, p, m, r, t, dとする。

(6) 引く音は假名遣ひに關係のないのは、母音を二つ重ねて表はすのであるが、假名遣ひの定まつて居るのはそれに從て色々に書き分ける。

(7) 音が同じで假名遣ひのちがふものは假名遣ひに從つて凡そ次の通りに書き方を區別する(いま、便宜の爲めに、yoo, yuu, waの外は母字だけで出して置く)。

イと讀む
- イ=i
- ヒ=ï
- キ=ĭ
- (ヤ行の)イ=y

イーと讀む
- イイ=ii
- イヒ=iï
- イキ=iĭ
- キイ=ii

ウと讀む
- ウ=u
- フ=ú
- (ワ行の)ウ=ŭ(又はw)

エと讀む
- エ=e
- ヘ=ė
- エ=ĕ

エーと讀む
- エエ=ee
- エイ=eì
- エヒ=eï
- エイ=ĕi
- エヒ=ĕï

オと讀む
- オ=o
- ホ=ó
- チ=ŏ
- ア=â
- フ=ú

オーと讀む
- オオ=oo
- オホ=oó
- オチ=oŏ
- チオ=ŏo
- チチ=ŏŏ
- オウ=ou
- オフ=oû
- チウ=ŏu
- チフ=ŏû
- アウ=au
- アフ=aû
- ワウ=ău
- ワフ=ăû
- アオ=âo
- アチ=âŏ

ヨーと讀む
- ヨウ=you
- ヨフ=youû
- ヤウ=yau
- ヤフ=yaû
- エウ=eu
- エフ=eû
- エウ=ĕu
- エフ=ĕû

ユーと讀む
- ユウ=yuu
- ユフ=yuû
- イウ=iu
- イフ=iû

ワと讀む
- ワ=wa
- ハ=hâ(又はâ)

[上の表並に下の例では、活字の都合から、aiueoの上にVの標しをつけるべきのをăĭŭĕŏと書いてある]。

(8) kau kouなどは普通はコーなどと讀むことになるから特にカウ、コウなどと讀ませるときはka'u, ko'uなどのやうに(')をはさむ。

例、Maï（まひ—舞）。Sakaï（さかゐ—酒井）。Kaéri（かへり—返り）。Koóri（こほり—氷）。Koě（こゑ—聲）。Ōnna（をんな—女）。Kahà（かは—河）。Satbit（里人）。Kadmatu（門松）。Hukda（福田）。Tyou（ちよう—寵、重）。Syau（しやう—正、商）。Tou（とう—等、燈）。Raù（らふ—蠟、蘭）。Heu（へう—表、雹）。eù（えふ—葉）。iu（いう—郵、友）。Iù（いふ—邑、言ふ）。Ka'ù（買ふ）。

片山氏は尙、姑息假名式（假名遣ひの分らない時の間に合せの書き方）、統一假名式（將來、だんだんに假名遣ひが簡單にされた場合の書き方）、羅典語其他外國語の書き方及び讀み方などを述べて居られるけれども、要用な點は上に書いた點である。

58. 片山式は假名遣ひとの連絡をつけることには或程度まで成功して居るといへる。然し、上のやうに澤山の標しをつけて書くといふことは、とても今日の實用に適するとは考へられないし、さればとて、古典語を書くなどの目的にも適當なものとは思へない、(兎に角今日の音によつて書いて居るのだから)。つまり片山式は「假名遣ひと連絡をつける書き方の研究」としては面白いが、實用には緣の遠いものと思はれる。

59. 鳴海式綴り方。鳴海要吉氏は大正四年五月から雜誌 Akatuki（大正六年九月の27號から Akatki Bungak と改めた)を出して、文學の方面からローマ字文を開拓して行くことに力を盡して居られた。氏は初めは日本式綴り方を採

つて居られたが、雜誌の名を改めた頃からだんだん綴り方を變へて行かれた。近頃ではほぼ方式が定まつたやうで、氏はそれを「有機式ローマ字」と稱して居られる。

鳴海式は、"文章は、語の「內性」語源などに從つて書き、讀み方は時代の發音に從ふべきものだ"と云ふ考へから出立して居る書き方で、歷史的假名遣ひ其他を取り入れた頗る複雜な書き方である。

雜誌 Akatki Bungak に發表された處や氏の談話を總合して、その書き方の要點を書いて見れば

(1) 各々の假名が單獨に表はす音の書き方は、ヤ行のイエを yi ye とし、ワ行のウを wu とする外、大體日本式と同樣である。拗音も同じこと。

(2) ハヒフヘホは讀み方の如何にかかはらず ha, hi, hu, he, ho とする。

(3) ワヰウエヲは讀み方の如何にかかはらず wa, wi, wu, we, wo とする。

(4) 引く音はイーは iy, エー（エイ）は ey とする外、假名遣ひ語源などに從つて凡そ次のやうに書きわける（中には日本語には出て來ないものもあるけれども、あり得ると思へる形を出して置く)。

ウーと讀む｛ウウ＝uw,　ウウ＝wuw
　　ウフ＝uh,　ウフ＝wuh

オーと讀む｛オウ＝ow,　アウ＝aw,　チウ＝wow,　ワウ＝waw
　　オフ＝oh,　アフ＝ah,　チフ＝woh,　ワフ＝wah

ユーと讀む｛イウ＝iw,　イウ＝yiw,　キウ＝wiw,　ユウ＝yuw
　　イフ＝ih,　イフ＝yih,　キフ＝wih,　ユフ＝yuh

ヨーと讀む｛ヨウ＝yow,　ヤウ＝yaw　エウ＝ew,　エウ＝yew,　エウ＝wew
　　ヨフ＝yoh,　ヤフ＝yah,　エフ＝eh,　エフ＝yeh,　エフ＝weh

(5)　つまる音は語源に從つて凡そ次のやうに書き分ける

k.　ga*k*kaw（學校）。　ro*k*pon（六本）。
t.　ke*t*ki（血氣）。　te*t*sen（鐵扇）。
h.　ha*h*pi（法被）。　ka*h*ta（買つた）。
r.　ki*r*saki（切先）。　arta（有つた）。

(6)　はねる音は語源に從つて凡そ次のやうに書き分ける

n.　Nitpo*n*（日本）。　bu*n*gak（文學）。
m.　ka*m*dow（感動）。　yo*m*da（讀んだ）。
b.　to*b*da（飛んだ）。　yo*b*da（呼んだ）。

(7)　母音は活用的であつて、父音は非活用的であると云ふ見方から、イキギシジチヂニヒビピミリを i, ki, gi, si, zi, ti, di, ni, hi, bi, pi, mi, ri（活用的）と y, ky, gy, sy, zy, ty, dy, ny, hy, by, py, my, ry（非活用的）とに書き分け、ウクグスズツヅフブプムルを u, ku, gu, su, zu, tu, du, hu, bu, pu, mu, ru（活用的）と w, k, g, s, z, t, d, h, b, p, m, r（非活用的）とに書き分ける。例へば、

yuky ni ki（雪に木）と yuki ny ky（行きにき）。

ughis ga naku nary（鶯が鳴く也）と
ughis ga nak nari（鶯が無くなり）。
moti（持ち）と moty（餅）。

尙、下に漢字音、動詞、形容詞などの例を出す。

kak（確），kaku（佳句）；tat（達），tatu（立つ）；siky（色），siki（指揮）；tay（隊），tai（他意）；key（經），keiro（毛色）；teh（蝶），tehuki（手拭き）。

kuhu（食ふ），kuhe（食へ），kuhaw（食はう），kuhan（食はん）；sew（せう），sey（せい）；koy（來い）。karu（刈る），turu（釣る）[終りの u が變る動詞]；tater（立てる），mir（見る），kur（來る），sur（爲る）[終りのるが變る動詞]。nayte（泣いて），koyde（漕いで），kasite（貸して），katte（勝つて），sinde（死んで），kahte（買つて），yobde（呼んで），yomde（讀んで），karte（刈つて）；泣いた，漕いだ等も同樣。

takayi（高い），takak, takaw, takakte；krusiyi（苦しい），krusik, krusiw, krusikte.

文例。Kono ysi no hitot mo tare ka tkuri em.

Sedo no yama ha waraby mo htok, ...

60.　鳴海式には、上の通り中々面白い點もあるけれども、實用的の書き方としては餘り煩はしいものであるから、一般の使ひ途には到底見込がない。鳴海氏自身もこれを實用の書き方として推薦しようとは考へないらしい。

61.　稻留式書き方。此頃稻留正吉といふ人が出された「新日本の文字と其の綴字法、附日本の羅馬字と其の綴字法」といふ本の後の半分に、氏のローマ字綴り方が出て居る。これは、五十音及び拗音は大體日本式と同じであるが、外に音を引く標し、名詞の單數複數の標し、陽性陰性陰陽

性の標しなどいろいろな標し(讀まない新字)や、i や n を少しもぢつた形を使ひ、又音便のいろいろな場合を示す爲に ' をいろいろに向けかへた形を挿むといふ方法である。中々手のかかつた研究で、研究としては面白い點があるけれども、余り複雜で實用には向くまいと思はれる。

綴り方の結論。日本式の過去と將來

62. 一方にヘボン式綴り方を見、一方に上に述べたやうないろいろな綴り方——何れも眞面目な深い研究の結果である綴り方——を見ると、一方は日本語の性質を餘り輕く見たもの、一方は餘り日本語の性質のみを見てローマ字の世界的な性質を見ないもの、又は餘り複雜過ぎて實用に適しないものである。かういふのを並べて見ると、日本式の綴り方が、日本語の性質を主にして居ながら、ローマ字の根本の性質を無視するやうなことなく、理窟に協つて居て同時に實用に適して居る綴り方、要するに中庸を得て居る綴り方であることが特に明に知れると思ふ。

63. 一體、ローマ字運動の目的は、日本國民全體がローマ字を使ふことにあるは言ふまでもない。このやうに國民全體に受入れられると云ふには、其事が國民の感じにきつちり當嵌まるやうなものでなくてはいけない。昔から外國から日本にはいつて來た思想其他のもので、國民の大部分に

受入れられて居るものは、皆日本固有の思想に同化したものに限るので、今後も、この點は變るまいと思はれる。

かういふ點から見ても、ローマ字が將來日本國民全體に使はれるとすれば、それはローマ字が一般の國民の自然の感じに一致したものになつた上のことであるに相違ない。現に前からローマ字を使つて居たといふ人でも、"ヘボン式を書いて居る間、どこか落ち付かない感じがして居たが、日本式を知つてから、丁度捜して居たものを見付けた樣な心持で、安心してローマ字を書いて居る"と云ふ人が少なくない(*)。この心持が非常に大切なもので、ローマ字の將來を考へる人はこの點に目を着けることが必要である。

日本式が日本人一般の感じに合ふことの實例は、名簿、索引、字引の類の排列にもある。これは尙§100で述べる。

64. 日本式が日本人が自然に書く書き方であることは、明治維新よりもずつと前に、蘭語の行はれて居た時に、日本語をローマ字綴りにしたのが既に其行き方であつたのでもわかる。寛政七年に出た大槻磐水の蘭學佩觿にも、五十音圖を全く規則正しい綴り方で書いてあつて——ウ列の音を、u の代りにオランダ流に oe で表はしたことと、ハ行に h と f と二行、ヤ行に j 字、ラ行に l と r と二行を書いて

(*) ヘボン式が特に文藝家などの氣持にはまらない最も要用な原因は、他の直音と同樣に感じて居る シ、チ、ツ をこれ等に限つて三字づつに書くといふ點らしい。

あることなどが違ふけれども、——全く日本式の行き方と同じ行き方である。島津齊彬公の書かれたローマ字文もこれと同じ綴り方である。

明治五年に國學者黒川眞頼氏が木版本で出した「横文字百人一首」は、今吾々が使つて居る日本式綴り方と同じ綴り方になつて居る、只ワと讀むハをhaと書くと云ふやうに、音の變つて居るのも假名通りに書いてある點が違ふだけ。

今英語方面や外國人方面で行はれて居るヘボン式は、外國人の書き始めたものであるからあのやうになつて居るのであるが、日本人が外國人に關係なく書いたものは上の通り、もつと古くから日本式と同樣なものであつたのである。これは、理窟は別に考へたわけではないらしく見えるが、理窟を考へなかつただけ、却てそれが日本人の自然の氣持に一致して居ることの證據だと云へるのである。

其後、英語の流行とヘボン氏の辭書から引續いた勢力の爲に、ローマ字と云へばヘボン式だけのやうになつて——明治二十年前後に田中館博士の仲間が日本式を使つたことも一般の人には知られないで——最近に及んで居たのであるが、我々の同志が日本式綴り方を使ひ出してから僅か十年位にしかならない今日、現に日本式のローマ字仲間が、ヘボン式のローマ字仲間に勝るとも劣らない位の景氣を持つやうになつて居ることも、上に云つたやうに、これが日

本人の自然の氣持に合つて居る爲であると思はれる。

今日では、日本式は只少數者の議論の上の書き方ではない。現に、中央氣象臺、陸地測量部等で公にこの綴り方を採用して居られるのである。

65. このやうに、日本式の過去と現在とを見、それが持つて居る據り處を考へると、日本式の綴り方が將來益々それの價値を現はして來て、それによつてローマ字が日本國民全體に受入れられるやうになることは、疑ふ餘地がない。

現在の狀態に適切な方針

66. 上に述べた通り、綴り方に就いて根本的に考へて、吾々は日本式を日本語の正式な綴り方にすることを絶對に必要と考へるのであるけれども、併し、現在の狀態では、外國人や外國語に關係した方面でヘボン式がまだ多く行はれて居るから、ローマ字初學者に對して、日本式のみを教へて、ヘボン式は讀めなくてもかまはないとするのは、不親切なやり方だと云はねばならない。それで、吾々が現在の狀態に適すると考へる方針は、

初學者には先づ學び易い日本式を教へる、讀み書き共に日本式に十分熟した後に、ヘボン式の日本式と違ふ綴りの讀み方を教へる、

つまり、初學者にはヘボン式を書くことの練習を課する必

要はないが、讀み方だけは教へることにするのである。讀み方だけならば、ヘボン式でも左程の困難なしに覺えるから左程の負擔にもならない。若しヘボン式の書き方を練習させる暇がある位ならば、其暇を利用して、ローマ字文の讀み方の練習を積む方が効能が多い、——ローマ字文は只讀めるだけでは足りない、樂に早く讀めるやうになることが必要だから。

一寸考へると、日本式の上にヘボン式を學ぶことが甚だ複雜なやうであるけれども、先づ日本式の簡易な綴り方によつてローマ字の綴り方の方針を呑み込んでからなれば、ヘボン式を追加して習ふことも困難ではないのである。

これは、只想像上の論ではなく、吾々の同志が多年、小學校生徒や其他の人に——多いときは百三十人を一組にして教へたこともある——實地に教へて見て、うまく行くことを確めて居ることである。

67. 世間には、「ローマ字論者が綴り方に於て一致しない間は、ローマ字を小學校などで教へられない」といふ人があるが、これは實地の事情を知らない人の議論か、左もなければ、ローマ字教授を煩さがる人の逃げ口上である。一體ヘボン式の綴り方が現在の處世間に行はれて居ることは否まれない事實であり、又日本式が上に述べたやうに當然發達すべき性質を具へて現在既に廣く使はれて居ることも動

かない事實であつて、これ等の事實は、小學校での教授の都合の爲に變へられるわけのものではない。從つて、日常必須の事を教へるべき小學校では、兩方を合せて教へるのが當然であるので、この點では、ローマ字論者の意見がどうだといふことは一向問題にならないのである。而も、そのやうに兩方を教へることが別に困難を伴ふのではないから、此點は何も心配する必要はない。

尙ローマ字教授の點から云へば、綴り方に日本式とヘボン式とあるのは、丁度假名に平假名と變體假名のあるのに似て居る。平假名を習つた上で、普通に出て來る變體假名を教へると同じ心持で、簡單な日本式の後にヘボン式で違ふものを教へればよい。變體假名を好んで書く人があると同樣に、世間にヘボン式を書く人があつても別段差支はない。只小學校邊では、變體假名を書くことを奬勵する必要がないと同樣、ヘボン式を書く方には力を入れる必要はないのである。

68. 追々には、上に述べたやうなわけで、日本式が一般に承認されるにきまつて居るので、さうなれば外國人や外國語に關係した方面でも、それを使ふことになるから、さうなれば、小學校邊でも最早ヘボン式を合せ教へる必要がなくなる。

第二章　ローマ字の綴り方(下)

引　く

69. 引く音は、從來多く母字の上に横線（ー）を置いて表はして居るが、吾々は山形（∧）を使つて居る、kâkâ, pîpî, gûgû, mômô などのやうに。これは近來ローマ字方面では一般に行はれるやうになつた。

我々が横線を捨てゝ山形を取る理由は二通りある。

第一、横線は通常細く且つ簡單で目立たない、特にペンで書く場合には、ペンを持ちかへなければ細過ぎて見えにくく、且つ急ぐ時など線が長すぎたり、t の棒と紛はしくなつたりしていけない。山形の方は體裁もよく、形も纏つて居るのと、やや複雜なのとで此やうな缺點がない。

第二、日本語では長音と短音との區別が明かに感ぜられて居るし、假名で書くにしても、其區別を形に表はす習慣になつて居るから、長音の標しは肝要なものであるべきである。然るに横線は英語などで發音を示すといふ臨時の目的に添へる標しになつて居るし、其他の國語でも語の要用

な部分としては使はれて居ない。卽ち、あつてもなくても語には變りはない。それ故に此標しを使ふと兎角それを輕く見て、付けたり付けなかつたりする傾きがある。山形の方は、少くもフランス語では語の肝要な部分になつて居て、それのあるのとないのとは異なる語として取扱はれて居るから、習慣上大事にされるといふ資格があるので、これは丁度吾々の希望に協つて居るのである。

70. 引く音に標しを使ふ流儀の外に、母字を重ねて書く流儀がある。これはドイツ語にも多少あるし、特にオランダ語には廣く行はれて居る方法であるが、日本語にも、これは大に參考する必　がある。そのわけは二つある。

第一、場合によつて長音の標しを付けることが體裁上又は實際上都合のわるいことがある、——例へば店の看板や、特別な字體の活字などの大文字を使ふとき。大文字の活字や、變つた活字には普通山形を付けた活字がないので、差支へることが多い。又タイプライターで山形の標しの設けてないのを使ふ場合にも差支へる（あとから山形を一々ペンで書き込めば無論よいが）。こんな場合には、長音の標しをつける代りに母字を重ねて書くことにするのが、經驗上からも甚都合がよい。Oosaka, TOOKYOO など。

第二、語によつて、長い音と見るが正しいか、母音が二つあると見るが正しいか明かでない場合がある。tiisai か

tisai か、ookii か ôkii か。吾々は tiisai ôkii と書いて居るが、これは強い理由があつてかう書き分けて居るわけでなく、主に心持からそれを適當と見て居るのである。假名遣ひから云へば、チヒサイ、オホキイだから、二つが同樣な取扱ひになるべきやうである。「各」も、語源からいへば ono-ono に相違ないけれども、現在の云ひ方は寧ろ onôno だと思ふ。このやうな場合にも、ô と oo とを同等と見ることにしてあれば、別にむづかしい問題がない。

71. 引く音を oo のやうに くことを許す位ならば、一層凡て引く音には母字を二つ書くとしたらどうだらうと云ふ說もある。それにすると、例へば「女皇」「往往」「鳳凰」「相應な」などが Dyooo, oooo, Hoooo, soooona などとなつて甚だ讀みにくい。尤も、これには、讀み易くする爲に Dyo'oo, oo'oo, Hoo'oo soo'oona などと書く案もあるけれども、餘り工合がよいとは云はれない。矢張山形の標しを認めて置く方が都合がよい(*)。

それで、要するに、

長音は母字を二つ重ねたものと同等に扱ひ、それを書くには、母字を二つ重ねても、母字一つの上に山形を付けても、どちらでもよいことにするのがよい。

(*) この外に、引く音を書くのに oh, uh など h を使ふ說もある。これも、相應 sohoh がソホーと讀まれ、應用 ohyoh がオヒヨーと讀まれる類の困難がある。これを救ふには h の次に ' を付けるなどの方法もあるけれども、兎に角これは面白い方法とは考へられない。なほ音聲學の標し(▼▲)を使はうといふ說もあるけれども、一般向きの書き物には向くまいと思はれる。

吾々の經驗で最も適當と感じて居るのは、普通の場合には小文字には ô を使ひ、大文字には Oo 又は OO を使ふと云ふやり方である。

72. この問題は特に字引や索引名簿の類で要用な關係を生ずる。ô を o 一つと同じ扱にして排列することにすると、onôno か onoono かによつて在り場所がちがふから、どちらだらうと思ひ惑ふわけになる。ô を oo と同等として排列することにすれば、排列の場所が、どちらの書き方を取つても同じことだから、搜す所が一つで甚便利になる。

73. ei と ê。「名譽」「生命」のやうな漢語は、東京邊の日常の云ひ方では、殆ど Mêyo Sêmê のやうに發音するけれども、吾々が改まつて讀むときには矢張り Meiyo Seimei のやうに云ふこと(土佐九州邊では普通語でも Meiyo Seimei といふ)と、假名の方の習慣からとで、吾々は Meiyo Seimei と書くことにして居る。

Eiri (營利) と Eiri (繪入) とは、一方は Ei-ri であつて、一方は E-iri であるために實際の發音も幾分異ふから、後の方を E'iri と書く案もある。これは又英語などの習慣に從つて Eïri としてもよいわけであるが、普通の場合には標なしにどちらも Eiri でよからう。

併し、「ネーサン」「アノネー」などのやうに單にエをのばして云ふものは ê（又は ee）と書く。又「知らない」「違ひない」などを訛つて「知らねえ」「ちげえねえ」などと云ふのをそのまま寫す場合には、ai が ê となつたものと見て siranê, tigênê と書く、——かういふ訛を寫す場合にはなるべく實際の音に近く書く方がよいから。尙「ページ」「テーブル」などのやうな外國語から來たものは大抵 ê を使つて Pêzi Têburu などと書くことにして居る。

74. yuu と iu。動詞の「言ふ」と「結ふ」とは、東京辯ではどちらも yuu, itta などと發音し、關西辯では同じく yuu, yûta と發音するけれども、それの活用し方を見ると、iwanai と yuwanai, ieba と yueba などの差があるから「言ふ」は「いう」、「結ふ」は「ゆう」が正式なものと見るべきだと思はれるし、且又實際上から云つても區別を存して置いた方が便利であるから、「言ふ」を

iu, iwanai, ieba, ii, iô, itta

と書き、「結ふ」を

yuu, yuwanai, yueba, yui, yuô, yutta

と書くことにして居る。

75. 「商人」「狩人」、「桐生」「柳生」、などは Akiudo, Kariudo, Kiriu, Yagiu か、Akyûdo, Karyûdo, Kiryû, Yagyû か、明かな判斷を下すことはむづかしいが、吾々は

實際の音に近いと思ふ方に從つて、Akyûdo. Karyûdo, Kiriu, Yagiu と書くことにして居る。

形容詞の副詞形「うれしう」「たのしう」の類は、uresiku, tanosiku の音便で k の拔けたのだと云ふ點から uresiu, tanosiu の書き方がよいやうに思はれる。尤も、akaku, omoku が akau omou を通り越して akô omô まで變つて居るのを見ると、uresiu, tanosiu も既に uresyû, tanosyû まで變つて居るのだと云ふ方が當つて居るかも知れないから、uresyû tanosyû でもよいとして からう。

はねる

76. 日本式では、はねる音には凡て n を使ふ。

77. 西洋語では b p m の前では、はねる音は大抵 m になつて居る。音の性質から云へば、m の方が正しいだらうが、b p m の前でさういふ口付きや音になることが、自然のきまりであるとすれば、殊更毎度それを示す必要もないわけである。日本人の今迄の仕來りは、ム を使つたときにも、多くンを使ふ今の流義でも、凡てのはねる音を一樣に考へて來て居ると思はれるから、かたがた、これは一齊に n にするのを適當とするのである。

音の性質から、b p m の前のンを是非とも m にしなければならないといふ論法で行くと、「金貨」「音樂」などの

ン(英語の ng の音)にも n とちがふ字を使はなければならないことになる(§15參照)。これをさうしないとすれば、m も使ひ分ける必要がないわけである。

78. はねる音に關係して、問題になるのは、それが母字や ya yu yo の前に來る場合である。「品位」「金曜日」などを Hini Kinyôbi と書いては ヒニ キニョービ と讀まれるから、それを避けるのにどうするかといふ問題が起る。これには、吾々は

n の後に (') をつける、Hin'i Kin'yôbi のやうに。

以前は上の場合につなぎ(-)を n のつぎに使ふのが普通になつて居たけれども、(-)は組立詞に使ふのが主で、只音だけを切る處には適當しない。(')は普通には音の省かれた處に使ふ標しであるが、日本語のンは英語やドイツ語の n と異つて、時間を取ることは他の假名と同樣である。歌で字數に入れることも唱歌や謠ひ物で長く引くことの出來るのも、皆他の假名と同樣である。それ故に、日本語のはねる音は不明瞭な母音の添つて居るものと考へることが至當かと思はれる。此不明瞭な母音を書き表はす代りに使ふものとすれば、(')の標しが最も適當なわけである。

但し、(')の標しをつけなくても紛れのない場合には、便宜上それを省いてもよいことにして置いて差支なからう。例へば、「金曜日」と書くのに、キニョービといふ詞がないから、Kinyôbi と書いてもよいことにしてよからう。

つまる音

79. つまる音の書き方は、日本式でもヘボン式と同樣、父字 kstp を重ねて書く。尤も、これも、英語やドイツ語の似寄つた綴りとは發音の工合が全く異つて居て、つまる音の處には聲が止み又は不明瞭になつて居る時間があるから、これも Gak'kô, is'sô, it'tai, ip'pai などと書いてもよいやうであるが、日本語としては (') がなくても紛れる虞がないから、それを入れないことにする。

80. つまる音に就て問題になるのは、正式な日本語にはないことであるけれども、普通の口語で

(1) 詞の終りをつめる場合。「コラッ」「ソンナコトガアルカッ」。これは音だけを云へば、つまる標しを付けなくてもよいとも考へられるが、矢張り、それを表はす方法を設けて置く方がよい。これは次のやうに書くのが一番工合がよいやうである。

Kora'!

Sonna koto ga aru ka'!

(2) 語の中でつまる場合。「と」「とて」又は「と云つて」をつめて「ッテ」と云ふ場合例へば、「見タッテ」と云ふのを書くに、mitatte と一語のやうにするのは面白くない、

「ッテ」は過去の動詞に限らず、いろいろな語につゞいて云へるから。それ故、これは mita tte と書く。

Sô sita tte, dame da.

Asita kuru tte itte imasita.

Sô sita kara tte, Siyô ga nai.

「ダッテ」もこの類であるが、次のやうなのは一つの出來上つた語と見て、datte と書く。

Datte, sonna Koto ga dekiru mono ka!

Nan' datte sonna Koto wo sita n' da?

Tora datte Sisi datte kowakuwa nai.

81. 尙、吾々日本人はつまる音のいろいろな場合について區別を感じて居ないことは、はねる音の場合と同樣だから、凡てつまる所に t を使つてはどうだらうと云ふ說がある。例へば「學校」「雜誌」「法被」などを Gatkô, Zatsi, Hatpi などとしようといふのである。これなれば、前節にある語の終りのつまつたのも別段の問題なく、"Korat!" "Sonna Koto ga aru kat!" となる。

併し、現在の書き方でも、「次に來る父字を重ねる」といふ極めて簡單な一つの規則ですんで居て、別に煩しいこともないし、他にそれを統一すべき强い理由もないから、吾々はそれでよいと思つて居る。

いろいろな特別な音

82. 「ッァ」と「ッォ」。正式な日本語にはないと云つてよいやうであるが、普通の語又は訛りに「オトッツァン（お父さん）」「ゴッツォー（御馳走）」「ソイツァコマッタ」などのやうに、「ッァ」及び「ッォ」といふ五十音圖にない音が稀に現はれて來る。これには二通りの場合がある。

83. 「オトッツァン（お父さん）」「オハッツァン（お初さん）」「キッツァン（吉さん）」「ゴッツォー（御馳走）」などは、それぞれ Ototosan, O-Hatu San, Kiti San, Gotisô などの t と s との間の母音が音便の爲に拔けて前がつまる音になり、t の音が s の音色に變化を與へたものであるから、Ototsan, O-Hattsan, Kittsan, Gottsô のやうに書く。此場合にはッァ ッォの前が必ずつまることは注意すべきである。

84. 「そいつぁー困つた」のッァは少し異ふ。これは Soitu wa komatta から來たものであるから、soitu 'a（又は soitu 'â）komatta と書く。koitu 'a, aitu 'a なども皆同樣である。これは watasi wa が音便で watasi 'a（又は watasi 'â）となるのと同じである。

85. ye sye の類。これも正式な日本語にはない音であるが、訛りには、e をヤ行の音にしたイェのやうなの、セゼをシェ ジェのやうにいふの、「チェー殘念」のチェーのやうなの

などがある。これ等をそのまゝに書きたい場合には、ye, sye, zye, tyê などと書けばよい。

86. 「馬」や「梅」の類。「馬」や「梅」などは實際の音は Mma, Mme であるけれども、吾々は假名の習慣の通り Uma, Ume と書くことにして居る。「姥」「宜」なども同樣に Mba Mbe と書かずに Uba Ube と書く。

87. u は、ma me mo ba be bo の前では m の値を持つことが多いが、mi mu bi bu の前では矢張り u である。「產む」といふ動詞の場合を考へて見ると、

umanai ume umeba umô などは

普通　mmanai mme mmeba mmô

と發音するけれども、

umu umi

などはそのままである。若し u が m の値を持つ場合には、u と書かずに m と書くことにするならば、これ等の場合にもそれぞれ書き分けなければならないわけで、煩はしくなるから、ma me mo ba be bo の前でも u を書くことにして、讀み方は實際の音に從ふといふのが穩當だと思ふ。

外國語の書き方

88. 日本語の中に外國語を使ふ場合に種々ある。

a. 本來は外國語でも、實際上既に日本語になつて居ると見るべき語は、日本流に綴る。

Ranpu, Inki, Miruku の類はそれである。

若しこれを英語の lamp, ink, milk の通りに綴るとすれば、日本兒童が書くに困るばかりでなく、其發音が矢張英語通りを正しいとするのが自然の勢であるから、英語の出來ない人はランプやミルクと日本流に云へば、人に笑はれても仕方がないことになる。大抵の日本人が安心してランプ、インキ、ミルクの語を使へなくなつたり、女中や子供にまで、こんな日常の語のために英語の發音を敎へるのが正當なやり方だとなるなどは至當なことでもなく、實際上にも煩はしさに堪へないわけである。それ故に、此種の語は新たにさういふ日本語が出來たものと見て、書くにも元の外國の綴り方に拘泥しないのが至當である(*)。

b. 併し、特別な狹い範圍內で、外國語と感じて使つて居る外國語は、もとの通りの綴り方で、もとの通りの發音を正しいとすべきである。多數の學術上の語や、學生間の往復に外國語を交ぜて書くなどの場合はこれに屬する。

c. 上の二つの區別が不明瞭である場合もある。日本語化することの途中にある外國語は、人によつて (*a*) のやう

(*) フランス語で英語の bulldog を自國流に bouledogue と綴つて使つて居るのはこの流儀である。

に、人によつて (b) のやうに書くことも自然の勢で、又當然なことと云はねばならない。

近年文學上や繪の方面で新しい語が多く出て居るのなどは、稍此種のものと思はれる。こんなのは矢張專門語と見て、少くもこれが極めて普通な語にならないうちは、元のまゝの書き方讀み方が正しいとすべきものかと思はれる。

89. 度量衡などに關係した外國語メートル、センチメートル、キロメートル、リットル、グラム、ミリグラムなどは、皆日本名が別に出來て居るものと見て、mêtoru, sentimêtoru, kiromêtoru, rittoru, guramu, mirigurамu などと書く。但し符號を使ふときには、世界共通に行はれて居るものを其儘使ふ。mêtoru を m 又は mtr, sentimêtoru を cm, rittoru を l, guramu を g 又は gm など。符號が語の綴り方に必ずしも從はなくてよいとする例は、ドイツでセンチメートルを Zentimeter と書くに拘らず符號を cm と書き、英語で pound の符號を lb と書くなどで、日本でも上のやうに取極める事は最も適當だと思はれる。

英語の度量衡の pound を pondo, mile を mairu, yard を yâru（裁縫の方で）と書くなどは、それが普通に使はれて居て且つ發音に就てもむづかしいことがないからよいが、foot feet になると、單數複數の區別も煩はしく、音も特別であるので、精密な數でない場合ならば、成るべく

syaku を代用するがよいやうである；そして精密なことの必要な場合には英語綴りの儘を使ふ方がよいやうに思ふ。

金の單位で doru などは、音も元の語と違ふから新な日本名が出來たと見るより外に仕方がない。pondo, huran, maruku なども同樣に見てよからう。

日本で普通に使はない單位名はもとのまゝに書くのが當然であることは云ふまでもない。

外國の人名や地名の書き方

90. 外國の人の名は、もとの通りに綴るべきは云ふまでもない。

只問題になるのは支那人の名前である。現在は支那人の名前は大抵漢音讀みで日本人に知られて居るから、書くにもそれを使ふより外に方法がないが、將來ローマ字の世の中になれば、支那に於ける讀み方のまゝの綴りが行はれるであらう。

91. 外國の地名になると、ヨーロッパ、イギリス、ドイツなどの類もあつて、これ等は十分出來上つた日本名であることは疑のないことであるから、一概には云はれない。

よく考へて見るに、此樣に日本に特別な名前の出來て居るのは、五大洲及び要用な國の名だけで、都會や山川などはいつも成るべく原名に近く云つて居る。それ故に、

五大洲及び要用な國の名は日本流に書き、其他の地名は元の通りに書く、

Yôroppa, Igirisu, Huransu, Doitu ;

London (Rondon とは書かない)、Paris, New York 等。

外國の市街の名前で全くの日本名が出來て居ると見るべきのは Urazio だけらしい。

支那の地名の書き方には問題が二つある。(一) 場所によつて漢音讀みと支那讀みとあるのは、當分兩方共行はれるものとして兩方共認めるのが適當であらう。「漢口」「青島」などはこの類である。(二) 支那音で通つて居る名前「上海」「北京」等を英語綴りに從つて Shanghai, Peking と書くか、普通日本人が感ずるやうに Syanhai, Pekin と書くかは問題である。英語綴りの方は向うにも通ずるが、日本綴りは通じなかりさうである點から見ると、英語綴りを New York, London などと同樣の資格のものと見て、それに從つて Shanghai Peking 等と書くのを正式とすべきやうに思ふ。但しそれを知らない人は變則として日本綴りを使つてよいとするがよからう。

92. フランス、アフリカなどは英語などの France Africa に似て居る爲に Huransu Ahurika と書くのは餘りをかしいと云ふ人もあるけれども、此等の場合に (H と F との差は暫く措き) u の音は實際あるに違ない。特にアフリカの場合には、日本人の言ひ慣れて居る言ひ方は Ahu'rika とフの處で音が高くなつて居るから、Africa の綴りはどうしても認めるわけに行かない。又フランスの場合に、フランスだけをイギリスやドイツと違つて取扱ふべき理由もなく、「フランス人」を Huransu'zin とスの處で聲をつよく云ふ人もあるので知れる通り、France-zin とは到底書かれない。既にもと母音のない處に u を挿んで書くとすれば、そこに日本流の云ひ方が出來て居る事を認めるのだから、F だけを保存する理由もなく、自然 Huransu, Ahurika が最も適當だといふことになる。

93. 外國の人や市街山川などの名前をもとのままに綴つて日本語の中に書くとすると、それの讀み方を前から知つて居る人の外はそれをどう讀んでよいか分らないことになる。此點は、假名で書くのよりも不便なやうである。併し、假名の方で云へば、書く人自身が (外國語を習つた人でも) それの正しい讀み方を知らないで、只自分勝手の推量讀みによつて書いて居る場合が思の外に多いもので、その爲に却て誤を生ずる (又は了解されない) 場合が少なくない。之に反して、原(もと)のままに書いてあれば、正しい讀み方は分らなくても、地圖なり百科全書の類なりで、それが何處又はどんな人といふことが分るから、つまり原(もと)のまゝの方がよいと云はなければならない。現に外國では、英語な

ら英語にフランス人やドイツ人の名を書くのに、原のまゝの綴りを使つて、自分流の綴り方に改めるやうなことはして居ない。

94. ローマ字文の中に外國の人や土地の名があつて、それの讀み方の分らないときには、よい加減な推量讀みをする外に仕方がない。外國でも其通りで、それが笑ひ話の種になることも珍しくない、英人がゲーテ (Goethe) をグッシーと讀み、大音樂家のバハ (Bach) をベッチと云つて居る爲に話が分らなかつたといふ類。さういふ名前の正しい讀み方の知りたい時には、然るべき人に尋ねるか參考書で調べるより外に仕方がない。

95. 一般向の文章の中に出る外國の人名地名の讀み方を示して置きたい場合に、やり方が二つある。

一つは、全く日本流の讀み方で成るべく近くもとの音を表はすもの。これでは、l は r で示し、英語の v は b で示し、父字だけの音も母字を添へて示すことになる。例へば Glasgow を gurasugô と書くやうに。此流儀では f の音は hw で表すことにして居る。

一つは、f, l, v の三音と母音なしの父字の讀み方位をローマ字學習の中で敎へることにし、其他の外國音は成るべく近い日本音で表はすもの。これなれば、例へば Glasgow を glasgô と書き示すことが出來る。f, l, v 三字の音や、

母音の添はない父字の讀み方位は、凡ての外國語に共通に役に立つことであるし、それだけ知つて居れば大分正しい云ひ方に近くなるわけであるから、ローマ字の性質といふ意味で、これ位のことは一般に敎へた方がよいと思はれる。

日本人の姓名の書き方

96. 日本人の姓名は、姓を先に名を後に書いて間につなぎ(-)を入れる、Oota-Tarô, Sakata-Kintoki のやうに。Sakata-Kintoki 君が名又は姓名共を略して初めだけを書く場合には、Sakata-K., S.-K., Sa.-Ki. などと書く。

西洋の姓名の呼び方は名姓の順である爲に、日本人でローマ字で名を書く時にも、矢張り名姓の順に書く人があるけれども、日本人の名はどうしても名姓の順では不自然である。外國文の中に入れる場合ならば、外國の習慣に從ふといふにも理窟があるが、日本人が日本語の文章の中に書くのに外國の習慣によつて姓名を顚倒して書くといふことは、丸で謂れのないことである。それ故、少なくも日本文では、日本の順に從つて姓名の順に書くべきである。

併し、現在の處まだ西洋流に書く人が多いから、只 Sakata Kintoki と書くと、姓が金時で名が坂太であるか、姓が坂田で名が金時であるか分らない。日本流の方につなぎ(-)を入れることにすると、此不便がなくなる。又、日本

では姓のみを云ふよりも姓名全部を呼ぶ方が普通である點から見ても、つなぎを入れることが適當と思はれる。

97. 普通の場合の綴り方。日本人のうちで、是迄外國人の關係などから、各自にきまつた日本式とちがふローマ字綴り方を使つて居る人がある。さう云ふ人は、綴り方を變へると別の人と思はれる虞があるから、元の綴り方をそのまゝ使ふのも止むを得ない。それで我々は、各個人の名前の綴り方に就ては、其人の慣れた綴りを變へることを强ひないといふ方針にして居る。

89. 併し又、外國に名の知れて居る人でも、日本文の中に書く場合は別だから、外國文に書くのと違ふ綴り方でも差支ないと云ふ人もある。實際、日本文の中では、前節に述べた通り、姓名の順序や書き方（つなぎを入れること）も外國流と違ふやうに書くのだから、日本流の順に書いた場合には、綴り方も日本式に變へるといふことは、左程の差支がないやうに考へられる。成るべくは、このやうな取りきめを認められるやうにしたいものである。

名簿、索引、字引の綴り方と列べ方

99. 日本人の姓名の綴り方について、銘々の書き方が日本式と違ふ場合に、日本式の方も認めることが必要になる場合がある。それは名簿や索引に名を列ねる場合である。

日本では現在の處ローマ字が普通に行はれて居ないから、銘々の綴り方を他の人は知らないのが普通である。特別な綴り方を知らないで名簿や索引を繰らうといふには、一般に通ずる綴り方に從つて名前が列んで居なければ用を達さないことは云ふまでもない。それ故に、

各個人が自分では特別な綴り方を使ふ場合でも、名簿索引等には日本式の綴り方に據つて列べるのが適切である。

100. 電話帳のやうな、普通一般の人が使ふ名簿が、ローマ字書きになる場合のことを考へると、日本式がヘボン式よりも適して居ることが特によく感ぜられる。それは、日本式なれば五十音の各行の音が凡て一固りになつて居るので、タ行ハ行も他の行と異なることがない、これは普通の日本人には極めて自然に感ぜられる。之に反してヘボン式に從つて排列すると、チが帳簿の初めに出てタツテトが終りの方にあり、フが早く出てハヒヘホが中程にあるわけで、これは日本語には不自然に感ぜられる。

このことは、姓名に限らず、一般の索引や字引の排列に就ても同樣である。

101. 名簿索引等で、特に注意を要するのは引く音の置き處であるが、これは §72 で述たやうに、母字を重ねたのと同じに取扱ふのがよい。ô=oo, û=uu, î=ii 等。

第三章　字の名前と標しの使ひ方

字の名前

102. ローマ字はイギリス、フランス、其他の國で使つて居る字ではあるが、それの名前は國々で違つて居るので、日本の名前は日本の名前として別にきめる必要がある。この名前には、綴り方に於けるやうに、どうでなければならないといふ理窟のないのが多いので、玆に出すのは一つの案に過ぎない。

a	b	c	d	e	f	g	h	i	j
ア	ベ	セ	デ	エ	フ	ゲ	ハ	イ	ヨ
k	l	m	n	o	p	q	r	s	
カ	ラ	ム	ヌ	オ	ペ	ク	レ	ス	
t	u	v	w	x	y	z			
テ	ウ	キ	ワ	キ	ヤ	ゼ			

103. 此案は次の方針によつて定めたものである。

(1) 使ひ途に對して不適當でないやうにすること。

(2) 父字の名はフランスの新しい名のやうに不明瞭な名を取らず、種々の母音を添へて聞取り易いことを期すること。

(3) 一音にすること。

(4) 日本人の言ひ易い音にすること、(但し f l v の三つは外國音を表はすにのみ使ふから、それの名前のフラヰも只大凡の名とし、精密に云へば、外國音の fu, la, vi が正しいとする)。

(5) その字の外國の名に、他の字の外國名とまぎれない適當なのがある場合には、それを採ること。

a e i o u の名前は (1) の方針できまつて居る。

c は英獨共に (4) に合はなくて、佛のセが云ひ易いから、それを取る。

b はビもベも惡いことはないけれども、a c のつづき合ひで、例へば "a b c 順" などと云ふ場合の語呂習慣からアビセよりはアベセがよいとする。

d t の英語名は (4) に合はないので獨佛のデとテを取る。

f には fa fi fu fe fo のうちで似寄つた音の云ひ易い fu を取る。

g と j では，英語名と佛蘭西名とが入り違ひになつて居るので (5) にさはつて取られない。g に就いては (1) の條件の爲にグの獨乙名を取り、j は獨乙名のヨットの初めの部分を取る。

h は英佛共に (1) に協はなくて、獨乙名が工合がよいから、それを取る。

k はケカ共に差支はないが、カの方が特に明かであるから、それを取つた。

l m n r s の外國名は (3) の條件に從はないから、何とか別に定める必要がある。r と l とは西洋の音樂の音階名で re la と使はれて居るので、それを其まゝ使ひ、m n には初めは最も明かな發音の ma na を與へて居たが、メキシコで日本兒童に敎へて居た人の申出によつて mu nu と改めた。la mu nu は丁度ギリシャの名の lambda, mü, nü を簡單にしたのに當つて居る。s には、sa si su se so のうち、c の名にした se と英の c に似た si を除くと、sa su so が使はれ得るわけで、其間に差別をつけるべき理由もないが、外國の名のエスの終りを日本流にした su を取ることにした。

p は英佛獨共に b と平行にしてあるから、矢張り b と同樣な母音を添へて pe.

q は簡單な方に從つて獨乙の ku を取る。

v は英佛の v 音（獨の w 音）を表はすに使ふ字であるので、英の vi か佛の ve かを取るべきであるが、佛の ve は b の名にした be と紛れる虞があるから、英の vi を取る。

w は、ワ行の音のうちで最もよく日本人の云ふ音に從つて wa と呼ぶ。

x は算術や代數で“エックス”と云つて居るが、これは

英語名の訛つたもので、若しこれを其まま ekkisu が正しい名だと云ふことにすると、外國名に似もせず、簡單でもない嫌的なものになるから、寧ろ上の (3) に從つて、ギリシャ語の ksi を漢字の反切流につめて ki とした。x は時々キリストの標しにも使はれるから、其頭字のキだと見てもよい。

y には、ヤ ユ ヨ の中で、j の名にした yo を除くと、ヤとユが使はれ得るが、ヤの方が云ひ易く聞き易いから ya にした。

z は英の名によつて ze にした。

104. ローマ字の歌。ローマ字二十六字の順は世界に共通なもので、字引索引名簿其他凡てそれに從ふのが便利であるから、一般に敎へる必要がある。上の名前を使つてローマ字の順を記憶するのに都合のよい歌が出來て居る。

ローマ字は

アベセデ　エフゲ　ハイヨカラ

ムヌオペクレス　テウキワキヤゼ

勿論意味のないものだが、口調だけは三十一字の歌になつて居るから、記憶の助けにはなる。

105. 別の案。上に出した方針は、外國にある名前のうちで差支のないのを取るといふやうになつて居るが、これは別に大切な方針でもないから、もつと統一した方針で名前を定めた方がよからうと云ふ說もある。さういふ方針で工合のよいのは、

(1) a i u e o は使ひ道の通り。

(2) 父字のうち五十音圖の清音に當るもの (k s t n h m y r w) は、ア列の音で呼ぶ。

(3) 日本語で使ふ他の父字 (g z d p b) はエ列の音で呼ぶ。

(4) 日本語で使はない字は上の關係の外で適宜にきめる。これには l の外は、§102 の名前で差支がない。只 l には lu が 工合がよかりさうである。

上の方針にすると、次の通りになる。

a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m
ア	ベ	セ	デ	エ	フ	ゲ	ハ	イ	ヨ	カ	ル	マ

n	o	p	q	r	s	t	u	v	w	x	y	z
ナ	オ	ペ	ク	ラ	サ	タ	ウ	キ	ワ	キ	ヤ	ゼ

106. 尙考へられ得る案は、日本語に使ふ字の名は上の通りにして、日本語に使はないのは日本語に緣の薄いものだから、特別扱にするといふ意味で、そのうち凡ての外國名で前に e のつくもの f l x の三つには、矢張り前に e を付けて、efu, elu, ekkisu とする案である。これ等は外國名に似て非なるものではあるけれども、思ひ切つてかういふ日本名だとするのも一つの案に相違ない。

107. 初學者に對する名前。綴り方をまだ知らない初學者には、上のやうな名前を初めから教へるのは適當でない。それには、日本語に必要な十九字だけ下のやうに教へるがよい。

a＝ア　　s＝サシスセソのしるし
i＝イ　　t＝タチツテトのしるし
u＝ウ　　n＝ナニヌネノのしるし
e＝エ　　h＝ハヒフヘホのしるし
o＝オ　　m＝マミムメモのしるし
k＝カキクケコのしるし　　y＝ヤユヨのしるし

r＝ラリルレロのしるし　　d＝ダヂヅデドのしるし
w＝ワキエヲのしるし　　b＝バビブベボのしるし
g＝ガギグゲゴのしるし　　p＝パピプペポのしるし
z＝ザジズゼゾのしるし

108. §102 のやうな名前を初めから兒童に教へると、例へば k をカと教へると、カの音を書くに、假名と同樣に k 一つでよい筈と思ふのが自然である。それに對して「それはいけない、a を添へねばならない」と云ふ理窟を說明したりすると、頭のよい兒童以外には、兎角呑込みが出來ないで、つまりローマ字はむづかしいといふことになる虞がある。

之に反して、上のやうな名前にして置くと、名前だけでも、綴り方の規則が推測される程であるから、綴り方が極めて容易に覺えられる。そして綴り方を皆覺えてから後には §102 のやうな名前を教へても何の障りもない。殘りの七字 c f j l q v x の名前は、その時になつてから教へればよい。

一體 §102 に出したやうな簡單な名前の付け方には是非どうでなくてはならないといふ理窟が少い——綴り方のやうなことはない——ので、上に出した名前も一つの案に過ぎない。從つてそれを全くきまつた名前のやうにして子供に教へるのもどうかと思はれる。併し、「何々のしるし」

といふ方の名前なれば、各字の性質をそのまゝ表はした名前だから不適當といふ懸念がないし、且つ實際それを教へた子供が其通りに呼んで居る樣子で見ても——少々長い名前だといふ難があるに拘らず——中々工合がよくて、これは將來益廣く行はれるべき名前だと思はれる。

簡單な名前の必要は、是迄「イの何番」「ロの何番」と云ふと同樣に、物の番號や符牒を附けるときと、代數などに起るだけで、其外には長い名前でも大抵差支がない。

標しの使ひ方

109. ローマ字で書いた文章の中で使ふいろいろな標しの使ひ方及び名前（一部分は自分の案）を次に述べる。

110. . 止め（英語式でペリオド）。これの主な使ひ途は、通常の文章の終りに置くこと。例へば

Ame ga hareta.　Hi ga teru.

もーつの使ひ途は、語を略して書いたときに略字の次に置くことである。略字のうちで、經驗上工合がよいのは

sunawati　を　sun.

tatoeba　を　tat.

Taisyô 5 nen 3 gwatu 31 niti を

Tsy. 5 n. 3 gt. 31 nt.

などである。

111. ? 問ふしるし。問ひの文章の終りに置く。例へば、

Mondai ga dekimasita ka?

Sore wa nani?

112. ! 呼ぶしるし。感動を表はす詞又は人に呼びかける詞や文章の終りに置く。動詞の命令形にはこれを附けるのを普通とする。例へば、

Oya-oya!　Kore wo mi tamae!

Koko e oide!

113. , 句切り (*)（又はコンマ）。文章の中で文句の切れ目に置く。例へば

Hai, sô desu.

Ame ga hutta node, kaette kimasita.

Sokode, watasi wa kangaemasita.

114. ; 大句切り (†)（英語式でセミコロン）。一つの文章の中で、意味がつづいて居て文の連絡が切れる處に置く。例へば、

Tôkyô wa ôkina Mati desu; Zinkô ga hyakuman no ue arimasu.

日本語では、文の連絡を切つて云つた方がよい場合に

(*) もとは「切り」と稱へて居たが、「句切り」の方が使ひ方もはつきりしてよい。

(†) もとは「中切り」と稱へて居たけれども、落付かない感じがあつたが、「大句切り」なれば丁度はまつて居るやうである。

も、テガノデカラなどを入れて、ずるずるに長い續いた文章にすることが多い。書いたものを讀むときには、特にかういふのは讀みにくい。これは、成るべく文章を切つて書く方がよい。そして、語が切れて居ても、意味の連絡の上から新たな文章にしない方がよい場合には、間に大句切りを置くのがよい。

大句切りは又、澤山の語を並べたときに、種類の變つたものに移る處に使ふ。例へば、

Watakusi, anata, anohito; kore, sore, are; koko, soko, asoko nado wa mina Daimeisi desu.

文句の脈が切れなくても、同種類の長い句を並べ立てる場合、特に各の長い句の中に句切りが使つてある場合には、間に大句切りを使ふのが工合がよい。例へば

Doko mademo tuduite iru, Ki no sigetta Yama; sore no aida wo nutte, siroi Nami wo tatete nagareru Kawa; tokorodokoro ni tatte iru kayabukino Ie; kôiu Kesiki wo mi nagara.....

115. ：二つ點 (*)（英語式でコロン）。立ち返つて云ひ直すとか、説明を添へるとか、文を引用するとか、凡て氣を變へて文を續ける處に置く。例へば、

(*) もとは「大切り」と稱へたけれども、不適當な點があるので、これに改めた。

Dewa kô nasuttara ii desyô: ano hô kara sakini katadukeru koto ni.

Kotowaza ni kôiu Koto ga aru: Saru mo Ki kara otiru.

116. ( ) 括弧。説明の爲の語や句を添へる時に、それの前と後とに置く。例へば、

Maeno Nitiyôbi (5 gwatu 6 ka) ni Kwazi ga atta.

117. [ ] 角括弧又はかぎ括弧。補ひの語又は句を添へる時に、それの前と後とに置く。例へば、

Uma wa Rappa [no Oto] ni odoroita.

118. —— 線。氣を變へて詞を續ける時、詞を云ひ殘す時、説明の文句を添へる時などに使ふ。例へば、

Taigai sitte imasita keredomo, ima dya yokuwa —— mattaku sirimasen.

Kôsyaku —— Sôrôkô desu.

線は又、處や人の名前などの頭字だけを書いて、あとをわざと書かない場合などにも使ふ。

Sinano no Yamaoku ni K—— to iu Mura ga aru.

119. — — 又は ..... 省略の標し。詞を略した所に使ふ。長い文章の所々を出す時など、例へば（§114の文）

Nippongo dewa..... zuruzuruni nagai tuduita Bunsyô ni suru koto ga ôi.

120. ＊＊＊＊ふせ字の標し。殊更に語又は句を書かない時、其語又は句の代りに使ふ。例へば、

＊＊＊＊ Kun.

Kôiu Koto wa kakanai hô ga ii ne, ＊＊＊ kara niramareru kara.

121. “ ” 引用のしるし。人の云ふ語又は云つた詞を其ままに書く時に、それの前後に置く。例へば、

Yamada Kun wa “Boku mo sansei desu” to itta.

引用のしるしには ‘ ’ の形も使はれる。これは特に “ ” の中にある文句の中で句を引用するやうな場合に多く使はれる。例へば、

Tarô: “..... ‘Ron yori Syôko’ to iu Kotowaza ga arimasu. .....”

122. ＊星†剣などは文章の中の或語の右に添へ、同じ標しを其頁の下の部に置いて、それの註釋又は附加への文句、即ち「脚註」を書くに使ふ。

Tat.(*) konna hûni tukau.

上のやうに ＊† を ( ) に入れるのはフランス文の流儀である。英語流では括弧をつけない。又ドイツ文の流儀では *) †) のやうに半分の括弧を附ける。何も附いて居ないと、逆に文の中で其標しのある處を捜すときに容易に見附

(*) *Tat.* wa *tatoeba* no Ryakuzi.

からなくてこまることが多い。併しドイツ文の流儀では、§116 の ( ) の片割れのやうな氣がするので、まごつくことがある。それ故一番工合のよいのは上のやうなフランス文の (*) (†) のやり方である。

脚註が同じ頁に多くある場合に、イギリス流のやうに *, †, ‡, §, ‖, ¶, **, ††, ‡‡, §§ の順で行く流儀もあり、又 *, **, ***, †, ††, †††, ‡, ‡‡, ‡‡‡, §, §§ などの順で行く流儀もある。

又、近年脚註の目標しに數字を使ふのが多くなつた、特に一頁に脚註が澤山ある場合にはそれが都合がよい。これも (1) (2).....などのやうに ( ) に入れるのが一番工合がよい。

123. -つなぎ。二つの語を組み合はせて一つの語を作る時、又は一つの語が一行の右端に書き切れない時に、其行に一部分を書き、行の終りに此標しを置いて、其語が次の行につづくことを示す。例へば、

Syôgakkô-seito. hanasi-tudukeru.

.....watasi wa ben-

kyôseneba naranai.

本來は組み合はせた詞でも、現在の用法が只一つの詞と同樣に（即ち新な一つの意味を持つやうに）なつたものには、つなぎを挿まない。例へば、

名詞で、Yokomozi, Tozimari, Hanami, Hunaasobi 等；

動詞で、mikagiru, utisuteru, kirihanasu, kiritoru 等。

尤も、語によつては、見方によつて、つなぎを入れても入れなくてもよい場合もある。（組み合せ詞については §153, 171 等で委しく述べる）。

行の終りにつなぎを使ふときには、一つの音を表はす綴り（例へば ka とか sa とか kyô とか）を中途で分けないやうに、又はねる音の前で分けないやうに、又つまる音は必ず二つの重なる父字の間で分けるやうにすべきである。例へば、

yorokobu は yo-ro-ko-bu の中ならどこで切つてもよいが、yorok-|obu や yor-|okobu などはいけない。

kantanni は kan-|tanni か kantan-|ni かにする。

Kwappan は Kwap-|pan の外分け方がない。

又語の成立ちのよく分かるものは、成るべく成立ちに從つて分ける方がよい。例へば、Yokomozi は Yokomo-|zi 又は Yo-|komozi と分けるよりも、Yoko-|mozi と分ける方がよい。

尙、語を組合せる時には二重つなぎ（=）を使つて、（-）は行の終りで語を切る時と、語を一綴りづつに分ける時

（例へば、必要によつて Hanami を Ha-na-mi と分けるなどの時）とにばかり使ふ流儀もある（Funk and Wagnalls の Standard Dictionary は此流儀によつてゐる）。

124. ' 抜け字の標し、分ける標し。正しい語の或る字を省いて、俗語などの音を特に表はしたい時に、字の抜けてゐる處に使ふ。例へば、

Kô sita mono da kara を

Kô sita mon' da kara といひ、

Kimi wa sitte iru ka? を

Kimi wa sitte 'ru ka? といふ類。

koitu wa を koitu 'a と書くことは前に出した。

但し訛りでも kereba を kerya と云ふ程にちがふのは音の通りに書く。

又此標しは、並んで居る字を分けて讀ませたい場合に使ふ（此時はわける標しと云つてもよい）（§70; 78）。

Gen'in, Kin'yôbi; ô を oo と書く場合に Dyoô を Dyo'oo, sôôna を soo'oona など。

又特別な使ひ方として、語の終りに來るつまる音を書くのに kora'! などと書くことがあることは前に云つた（§80）。

125. ^ 音を引く標し「山形」。これは母字の上につけて、音を引くことを示す。これは只省いてはいけない。例

へば「東京」を Tokyo と書くのは、ローマ字流ではいけないことにしてある（これでは トキ だから）、必ず Tôkyô 又は Tookyoo とする。

引く音のことは §69 節以下に詳しく述べてある。

126. ′音を上げる標しと ｀区別の標し。「鎌」と「釜」、「牡蠣」と「柿」と「垣」のやうに音が同じでそれの上げ下げのちがふ語がある。それを區別する爲に母字の上に標しをつけることがある。(′) は音の上がることを示し、(｀) は音のあがらないことを示す（必ずしも下がるとは限らない）。即ち鎌は Káma 釜は Kàma, 牡蠣は Káki 垣は Kaki 柿は Kàki と書く(*)。

尙次に少し例を示せば

Hási（箸）	Hasí（端）	Hàsi（橋）
Hári（針）	Hàri（梁）	
Sáke（鮭）	Sàke（酒）	
Yúki（衍）	Yùki（雪）	
Haná（花）	Hanà（鼻）	
káu（飼ふ）	kàu（買ふ）	
kátte（飼つて）	kàtte（買つて）	
máku（蒔く）	màku（卷く）	

(*) 音の上げ下げは地方によつて大變ちがふ。高知邊のは大抵東京邊のと反對である。こゝでは東京のに從つて書く。

máite（蒔いて）	màite（卷いて）
ítte（炒つて）	ìtte（行つて又は云つて）
kóori（行李）	kòori（氷）
kóote（飼うて）	kòote（買うて）

これらの標しは必ずつけるのではない。只必要なときだけ使ふのである。前後の關係によつて意味の十分明瞭な場合にはこれらの標しを使ふには及ばない。

「或る」は「有る」（又は「在る」）と音の上げ下げも全く同じであるけれども、區別する必要がある場合があるから、さういふ時は arù と書く。（場合によつては toaru を使つてもよい）。例へば

Boku no Uti ni aru Huruido kara dete kita Koban ga aru.

といふやうな文章が、僕の家に在る即ち“僕の家の古井戸から出て來た小判が（どこかに）ある”といふ意味ではなくて、“或る古井戸から出て來た小判が僕の家にある”といふ意味であることを示す爲に Boku no Uti ni arù Huruido kara dete kita Koban ga aru と書く。（尤もかういふ場合には ni の次に句切り (,) をつける方が尙明瞭である）。

第四章　ことばの附け離しと種類分け

ことばの附け離しの一般の規則

127.　ローマ字文では、假名交り文などのやうに始から終までのべつに字をつゞけては書かない、一語一語宛を纏め語と語との間を隔てて書く。これが、ローマ字文が——一通り慣れさへすれば——大變讀み易くなる原因である。

漢字や假名がローマ字よりも讀み易いと思ふ人もあるが、漢字の讀み方の不定なことは暫く措いても、それが讀み易いと云ふのは、一字一字の認め易いことを意味するだけで、一語一語が認め易いことではない。例へば、小田原田村井上原のやうな行列が、語の切れ目が見えない爲に讀めないのは勿論であるが、間を離して、小田原　田村　井上　原と書いたとしても、小田原なら小田原は、どこまでも、小と田と原の行列で、小田原と云ふ一つの纏まつたものの感じを與へない。これは一字一字が各自に餘りよく纏まり過ぎて、他の字をそれの横に持つて來ても、それとなじまない爲である。此點では假名も漢字と同樣である。つまり、何字かをよせて書いた一語が一つの纏まつた形をなすといふ性質は、ローマ字の特に優れた性質で、漢字や假名は到底この點でローマ字の比較にならない。

同じ理由から、語の附け離しの問題は、ローマ字文では、甚だ大切な問題で、離すべき處を附けたり、附けるべき處を離したりすると、讀み取りにくくなるばかりでなく、時には誤解されることもある。

128.　語の附け離しを極める根本の方針は次の通り。

文章の中で一つの物事を表はして居る詞や一つの役目をして居る詞を一つの語と見て一つに纏めて書く。

例へば「三人の親」といふ句が「子供三人の親」の意味ならば、「三人」が子供三人を表はす一つの語、「の」は子供三人と親との關係を表はす役目をする關係詞であるから、sannin no Oya となる。若し「三人の親」が「親三人」の意味ならば、「三人」といふものが別にあるのではなくて、「三人の」が親の數を示す形容詞の役目をして居るから、sanninno Oya とすべきである。同樣に subeteno Gen'in と書けば「幾つかある原因の凡て」の意味であり、subete no Gen' in と書けば「凡ての事柄の原因」の意味になる。

129.　或る言ひ方は、分解すれば幾つかの語から出來て居るに相違ないに拘らず、全體が普通に使はれる一つの物事を表すか、文法上一つの役目をして居ると見るべきときには、それを一つに續けて書くのが普通である。例へば

「申上げる」といふ動詞は「申す」と「上げる」といふ二つの動詞で出來て居るに相違ないに拘らず、我々はこの二つのことを別々に考へないで、只「申上げる」といふ一つの働きを考へるから、môsiageru と一と續けに書く。又

Sô sita *tokoroga*, Sikata ga nai.

の tokoroga は、元來は「ところ」と「が」とで出來て居るだらうけれども、ここではこの二つの語の意味が別々に感ぜられないで、只「さうした」といふ文句と「仕方がない」といふ文句とを繋いで兩方の關係を示すといふ一つの役目——接續詞の役目——をして居る。それ故、上のやうに一つに纏めて書く。

130. 此種の問題には、文章の文法上の組立に關する一般の法則も要用な參考材料を與へる。併し又、理窟からは判斷しにくいことも珍らしくない。そんな場合は當分どちらでもよいとして、自然に習慣の固まるのを待つのがよい。併し、一般の方針としては、

二つの語で出來て居る文句で、附けて書くべき特別の理由が明かでない場合には、離して書く方に從ふがよい。

組　合　せ　詞

131. 幾つかの語を組合せて一つの纏まつた考を表はす詞をなして居るのに、組立てから見て二つの場合がある。

(A)　一つは、それを組立てて居る語を別々に見てもそれ等の連絡が文法上正當な形を備へて居るもの。例へば「松の木」「菊の花」などは Matu no Ki, Kiku no Hana として少しも差支へのない組立てであるけれども、實際は松といふ考と木といふ考と別々に感ぜられないから、Matu-no-ki, Kiku-no-hana 又は Matunoki, Kikunohana とした方が適當して居ると思はれる。

(B)　もう一つは、それを組立てて居る語を別々に見ては文法上の連絡がない場合で、これが正式な組合せ詞である。かういふのは一語に纏めて書くのが正式である（場合によつてはつなぎを挿んで）。かういふ場合には音便の變化のあることも、全體が一つに融け合つて居ることの證據だと云へる。

Ame　+Kaze　=Amekaze.

Koharu+Hiyori=Koharubiyori.

Utagai +hukai =utagaibukai.

132. 分解すればいくつかの語になる語で、その分けた語の各々の意味が感ぜられる場合には、上の

(A)　の種類の組立てならば、離して書き、

(B)　の種類の組立てならばつゞけて書くのを原則とする。

例へば「貸借の關係」Kasikari no Kwankei は (A) の組立てであるが、關係詞を省いて「貸借關係」といへば (B)

の組立てになるから、Kasikari-kwankei と書くことになる。同様に "Hikô no Kyori" 又は "hikôsita Kyori" は (A) の類で "Hikô-kyori" は (B) の類である。

組合せ詞については尙後に (§153, 196) 述べる。

133. つなぎの問題。理窟上一語とすべき組合せ詞（前々節の場合及び前節の (B) の場合）のうちで、十分に熟して出來上つた一つの語と見るべきものには、つなぎ (-) を入れない；臨時に組合せたと見るべきものには、つなぎを入れて讀み易くするのが通常である。大體で二つの區別を云へば、前の方は辭書に出て居る程度の詞、後の方は辭書に出て居ない詞に當るわけである。

例へば Yomeiri, dekakeru などは出來上つた詞と云つてよいが、Rigai-kwankei, omoi-mayou などは臨時に組合せたものと見るが適當である。實際に當つて見ると、いづれとも見られるのが澤山あるけれども、つなぎを入れると入れないとは、只便宜上の問題で、文法上一語と見る點に於て變りがないから、此點は區々になつても大きな不都合にはならない。

ことばの役目の種類

134. 附け離しを上の方針できめるとすれば、ことばについては、語原から解剖的に見て種類を分けるよりは、それがどういふ役目をして居るかによつて種類をきめることが適切である。

ことばが文章を組立てて居るときの役目や使ひ途には、次の八種類あると見られる。

(1) 名詞の役目。話の主な材料になり、次に來る關係詞によつて他の詞と關係すること。

(2) 關係詞の役目。名詞の役目の詞の次に來て、それと他の詞との關係を示すこと。

(3) 動詞の役目。文章で云はうと思ふことを言ひ立てること。

(4) 形容詞の役目。名詞の前に來て、それを形容し又はそれの範圍をきめること。

(5) 副詞の役目。動詞や形容詞の前に來てそれを形容し又はそれの範圍をきめること。

(6) 廣さ詞の役目。他の詞の次に挿んで、どれだけ又はどういふ度合に其文句の事柄が當るかを示すこと。

(7) 接續詞の役目。文句の始め又は終りに置いて、其文句と前後との關係を示すこと。

(8) 呼びかけ詞の役目。人又は自分に呼びかける文句であることを特別に示すこと。

例。（下の例で各の語の下に添へた字は上に示した役目の種類分けの略字）。

Hokano Hito wa sakanni Te wo tataita noni, kimi
（形）　（名）（關）（副）　（名）（關）（動）　（接）（名）

dake wa tatakanakatta ne!
（廣）（關）　（動）　（呼）

135. 詞の順序に關係して、最も注意すべきことは、

a. 形容詞の次に來てそれに形容されるのが名詞、

b. 副詞の次に來てそれに形容されるのが形容詞又は動詞であることである。

例へば、次の二つの文章で、

Hizyôna Yukwai da.

Hizyôni yukwai da.

前の方の Yukwai は hizyôna といふ形容詞に形容されて居るから名詞であり、da は動詞である。後の方の yukwai は hizyôni といふ副詞に形容されて居るから名詞ではない、yukwai da は omosiroi と同様な云ひ方で、yukwaina といふ形容詞の「はたらきの形」即ち動詞の役目をして居る形と見る（§213）。

同様な例は

Konouemo nai（形容詞句）Hukeizai（名詞）da.

Konouemo naku（副詞句）hukeizai da（動詞の役目をして居る形容詞）。

136. 上の規則と違つて名詞の前に副詞の來る場合に就ては、次の二つが注意される。

a. 動詞から導いた名詞の場合。例へば

motto hukaku kangaete Miyô ga nai.

Yome ni Moraite ga nai.

yokoni Katamukekata ga tarinai.

などでは、いづれも副詞性の文句の次に名詞が來て居る。これは、例へば motto hukaku kangaete miru to iu sono Miyô ga nai などの意味で「もつと深く考へて」といふ副詞句は名詞の原になつて居る動詞につくのであるから、嚴重に書けば Motto-hukaku-kangaete-miyô, Yome-ni-moraite などいふ名詞だとすべきであるけれども、あまり長くつなぎでつゞけるのも都合がよくないから、上のやうに書く。

b. 場處に關係した名詞代名詞の場合。例へば

diki Tonari e yuku.

sugu soko desu.

taihen Enpô kara kimasita.

これも、Tonari, soko, Enpô などが tonarino Ie, sono Tokoro, tôi Tokoro と云ふやうに、形容詞の部分を（少くも心持では）持つて居るので、diki, sugu, taihen は其形容詞に附屬する副詞と思はれるが、兎に角形の上では名詞の前に副詞が來て居る。[taihen Enpô には taihenna Enpô と云ふ正式な云ひ方もある]。

ことばの種類

137. ことばの種類を考へるにも、此やうに見るから、昔の日本文法のやうに、體言、用言といふやうな區別は適當でなくて、自然、外國語にあると同じやうな種類分けになる。尤も同じやうな種類分けになると云ふだけで、全く同じ種類に分けねばならないといふことはない。國語の性質がちがふから、他國の語にあつて日本語にないものや、外國の語にないもので日本語にあるとすべき種類もあるわけである。

138. 但し日本語では、動詞と形容詞は、いろいろ語尾をかへてちがふ役目に使はれることがある。例へば、utukusii といふ形容詞も utukusiku といふ形にすると副詞の役目をする。これ等は、役目といふ點から云へば、無論形容詞、副詞と區別する必要があるけれども、各の語を切り離して單語として見るとき、又語尾の變化の規則を調べるなどのときには、一つの語の異なる形と見る方がよい。

これから下に出す種類分けは、このやうに形の變つたのを一つにして、それの代表者となるべき形を取つて、各の語の所屬を定めるといふ分け方にしてある。例へば utukusiku といふ語は、utukusii といふ形を主な形とするから、語の種類は形容詞だとする（それの使ひ途までを合

せて云ふには「副詞形の形容詞」又は「形容詞の副詞形」と云ふ）。字引などで詞の種類分けをするには、この流儀で主な形について分類すればよい。

139. 此方針で見ると、ローマ字で書く日本語では、上に役目の種類として擧げたものに代名詞と數詞を加へて、次の十種類を見て置くのが都合がよいやうである（分り易い例を一緒に出して置く）。

1. 名詞。　例、Yama, Hito, Kotogara, Nôryoku.
2. 代名詞。　例、watasi, anata, sore, soko, dotira.
3. 關係詞。　例、Hito *ga*, Hon *wo*, anata *no*, Tôkyô *kara*, sore *to* issyoni の ga, wo, no, kara, to など。
4. 動詞。　例、osu, oseba, osita.
5. 形容詞。　例、utukusii, kireina.
6. 副詞。　例、diki, yohodo.
7. 廣さ詞。　例、bakari, koso, demo.
8. 數詞。　例、hitotu, itimai.
9. 接續詞。　例、sikasi, sosite, keredomo ; .....sita *ga* の ga.
10. 呼びかけ詞。例、Aa! Oyaoya! ..... ne! ..... ka?

140. 近來日本語の文法で、大部分外國語と同樣な種類

分けをしてあるのにも、大抵「てにをは」と云ふ種類が設けてあるが、世間でいふ「てにをは」には餘り多くの種類があつて、「てにをは」といふことばの種類を設けるとすれば、それの役目がこれこれと云ふことが出來ないやうに思ふ（性質は「獨りでは意味を持たないもの」などと或は云へるかも知れないけれども）。それで私は「てにをは」といふ種類を設けない。尤も、品詞には關係なく、只、そればかりでは意味をなさない短い語を引きくるめて云ひ表はす名前として、「てにをは」といふ名前を殘して置くことは別に差支ない。

名　　詞

141. 名詞は Yama, Hito, Kotogara, Nôryoku などのやうな詞であるが、それの特徴は、それの次に關係詞 ga, wo, ni, no, kara, e, yori などが來て、文章に於ける其名詞の關係を示す (a の例) ことである。但し廣さ詞が關係詞の前に挿まり (b の例)、又は關係詞に代る (c の例) こともある。

a. Kaze *ga* huite, Hokori *ga* tobu.
　　Kodomo *ni* Okwasi *wo* yaru.

b. Kodomo *dake ni* Okwasi wo yaru.

c. Kodomo ni Okwasi *dake* (=dake wo) yaru.

[關係詞の次に廣さ詞の附くこともある (§243, 249)。]

142. 名詞の後に關係詞の來ない場合には、(1) 次に來る語の説明に添へるもの (例、Ogawa hitori ga……)、(2) 其まゝで呼びかけるか又は次に呼びかけ詞の來る場合 (例、Oota, ……; ……wa Oota ka)、(3) bakari, gurai 等の補ひ語になる場合 (例、Oota gurai na Tosi de……)、(4) 廣さ詞を挿み又は挿まないで同じやうな名詞を二つ以上重ねて使ふ場合 (例、Oota ya Ogawa nado ga……) 等である。

この外に「風吹く」などのやうに云ふのは文語の言ひ方で、口語ではない。尤も口語の稍壞れた形と見るべきものには、

Watasi itte kimasita.　Anata itte goran nasai

Anohito wa Neko daite iru.　Hon yonde imasu.

こんなのがある。併しこれらも本當は矢張 ga や wo などのあるべきものが抜けたのだと見るべきだと思ふ。つまり、正式な口語日本語では上のやうな場合を除いては、名詞は必ず次に關係詞を持つものである。

143. 名詞は初めの字を大文字で書く。これは獨逸語にあると同じ規則であるが、日本語では獨逸語以上に此規則の必要を見る。と云ふわけは、日本語には、關係詞其他の短い語と同じ綴りの短い名詞（又は綴りは同じでなくても、同じ程度に短い名詞）がかなり澤山にある。To (戸)、Wa (輪)、Ka (蚊)、Mo (藻)、Ni (荷)、No (野)、Kara (殼)、Niwa (庭) など。口で云ふ時には名詞には自然聲を強くし、關係詞其他の輕い語には自然聲を弱くするから、これらの區別が明かで紛れることがない。併し、字で書く時に名詞

を關係詞などと同じに書くと、區別が見えなくなつて、意味がとれにくい。名詞を大文字で書くと、見分けが容易になつて、意味を讀み取るに工合がよい。つまり、口でいふ時に強く云ふと同じことを、字では大文字で形に表して居るやうなわけになる。

このやうに名詞を大文字で書くことの便利なことは、次の例で十分に分ると思ふ。

名詞に大文字を使はない書き方

Haru no no no asobi.

taihenni ni ni naru.

te to te to tunagu.

ki kara ki ni tobu.

名詞に大文字を使ふ書き方

Haru no No no Asobi.

taihenni Ni ni naru.

Te to Te to tunagu.

Ki kara Ki ni tobu.

144. 元來は名詞であつても、そのままで、又は語尾がついて、他の種類の役目をして居るものには大文字を使はない。

a. koto, mono, tokoro, hô, hito, kata (sonokata などの形で使ふ) などは代名詞に使はれる (§157)。

b. kenkôna, ryûkôseino, amerikaryûno, kakugatano などは形容詞に使はれる。

c. yôna, hûna, guaino, anbaino などは前の文句につづけて形容詞に使はれる (§207)。

d. tukiduki, tokidoki, kekkyoku などは副詞に使はれる。

e. toki(-ni), koro, tame(-ni), tôri (dôri), hodo, kekkwa, sue, ageku, aida などは前に來る文句につゞけて副詞又は接續詞に使はれる (§219)。

f. ima, mukasi, kinô, kyô 等は「時の副詞」として使はれる (§228)。

g. monode, monono, tokorode, tokoroga などは接續詞として使はれる。

145. 「附添ひ名詞」の一。ue, sita, migi, hidari, uti, hoka, naka, soto, mae, usiro, noti, aida 等は、多く「何々の上」「何々の下」などと他の名詞に附屬して（實際附屬して居なくても、附屬したのと同じ心持で）使はれるので、さういふ場合には、大文字で書いては目立ち過ぎるから、特別扱にして小文字で書く。かういふのを、私は「附添ひ名詞」の第一種と稱へたいと思ふ。例へば、

Tana no ue kara orosu.

mae e susumu; usiro e muku.

但し特別な意味で獨立な名詞と同樣に使はれるもの、其他獨立して居て意味の重いものは大文字で書くのが適當である。例へば、

Ue niwa Ue ga aru.

かういふ扱にする語の範圍は問題であるが、大體、kami, simo, soba, katawara, gururi, mawari などは小文字の方がよかりさうで、Mannaka, Sotogawa, Utigawa, Yokogawa, Hazi, Huti などは普通の名詞のやうに、大文字の方がよいやうに思ふ。併しこの區別は明かな標準のあるものではないから、場合によつて心持に從つて變つてもよからう。

146. 上に出したやうな語の次に no（「にある」「に於ける」「に關係する」の意味の no）や ni（時の ni で、to と云ひかへられない ni、「にある」又はそれと同樣に使ふ ni、場處の de 又は e の意味の ni）があるときには、これまでつづけて形容詞や副詞の形に書くのが便宜である。

Tukue no *ueno* Hon.

Ki no *sitani* aru Isu.

kotosi no *utini* dekiru.

tôka *maeni* kaetta.

Yasumi no *aidani* mita.

ueni sirusita……　　*migini* magaru.

上に括弧内に示したやうな使ひ方でない場合には、離す

ときめて置いてよいやうである(*)。

Tukue no *ue no* kitanai koto.

Kodomo wa tô kara *sita ni* kagiru.

理窟から云ふと、いつでも no ni を離して書いてよいわけである。併し一般に、餘りぶつぶつに切つて書くのは書くにも讀むにも煩はしいものだから、續けて書ける所は成るべく續けて書く方が、書くにも讀むにも都合がよいので大體上のやうにして居る。判斷しにくい場合には離す方にしてよい。

147. 「附添ひ名詞」の二。名詞の次に直接に添へて（又は獨立してでも）それのどんな部分かを示す詞は、意味では §145 の語と同樣であるから、これも小文字で書く(†)。例へば　Oosaka *hen*; Kyôto *atari*; Hanninkwan *izyô*; zyûnin *amari*.

Rin no Kurai *ika* wo kirisuteru.

Sekidô no *atari*, kono *hen*.

「百人以上の學生」などでは、「以上」がないときには hyakuninno Gakusei と no を前へつける（§240）點から云ふと、hyakunin izyôno と no を前へつけるのが正當と思はれる。併し、この場合と形の似寄つた他の場合、例へば Tosi yottu izyô no Kodomo などと書き分けることは餘り煩はしいと思はれるから、izyô ika amari などの次は離すことにきめた方がよからう。

(*)「何々した上に、……」の「上に」は接續詞で、無論 ueni と書く。

(†) ここに云ふのと廣さ詞との差は §243 の脚註にある。

これと同じ種類の使ひ途と見られるのは

Gakusei *zenbu* ga……; Sekai *zentai* ni ……;

Nakama *minna* ga……; Nakama *subete* ga……,

のやうに使ふ zenbu, zentai, minna, subete などや、

Sinamono no *daibubun*; … no *ôku*; … no *itibubun*

のやうに、間に no を挿んで使ふ itibubun, daibubun, ôku などであるが、これ等は何れも副詞として使はれる點が前のものと違ふ。

Gakusei ga *zenbu* (*zentai*, *minna*, *daibubun*, *ôku*, *itibubun*) kaette kita.

148. 「附添ひ名詞」の三。「來る筈です」「年のせいです」「かういうわけなのです」「かういふつもりでした」などに於ける「はず（筈）」「せい」「わけ」「つもり」等の語は、この意味では、獨立に名詞としては使はれない、必ず他の文句に附添うて使はれる。それ故、これ等も「附添ひ名詞」として小文字で書くことを適當と考へる。

kuru hazu desu.　　Tosi no sei desu.

kôiu wake na no desu.　　kôiu tumori desita.

尤も、wake, tumori は、「理窟」「心組」の意味の明かな場合には、全くの名詞として Wake, Tumori とする。

watasi no Tumori dewa, ……

yoku Wake wo hanasite……

149. O, Go などは、(a) 普通名詞につくときは續けて書くが、(b) 固有名詞につく時は間につなぎ (-) を置く。

(a　Otosi, Okao, Gosôdan, Okyakusama, Goryôsin

(b) O-Hana, O-Kiku(*).

150. 名詞につづく Sama, San, Dono, Don などは、(a) 全體が一語と感ぜられるのは前へ附けて書くが、(b) さうでないのは離して大文字で書く。普通名詞につくのは多く (a) の方、固有名詞につくのは多く (b) の方である。

(a) Otôsan, Niisan, Onêsama, Yomesan, Osandon.

(b) Ooi-Tarô Dono, Ooi-Ume-ko Sama, O-Ume San.

［日本人の姓名の書き方は §96 にある］

固有名詞でも、「光子」を「みいちやん」、「光太郎」を「こうさん」、「辰雄」を「たつちやん」などのやうに「ちやん」「さん」に獨立した感じのないの、並に「仁王樣」「鐘馗樣」などは Mii-tyan, Kô-san, Tat-tyan, Niôsama, Syôkisan などとする。又普通名詞でも、「大尉殿」「社長殿」などは、前に、姓を添へたのと同樣な感じがするから、Taii Dono, Syatyô Dono とする方がよい。

女の名前に添へて使ふ「子」は、前につなぎ (-) を置いて、Hana-ko などのやうにする。

(*) つなぎを省き又はつなぎの代りに「分ける標し」を使つて OHana, OKiku, O'Hana, O'Kiku と書くといふ案もよいやうである。

151. gata, tati, ra, domo などは、(a) 普通名詞には續けて書き、(b) 固有名詞には離して書くのが適當であらう。

(a) Gohuzin*gata*, Kodomo*tati*, Onna*domo*.

「貴婦人令嬢方」の類は、Kihuzingata Reidyôgata のうちの前の gata が略されて居ると見て、Kihuzin- Reidyôgata と書くのが正當と思はれる。併し前のつなぎを略して Kihuzin Reidyôgata としてもよい。(§153 の B 參照)

(b) Saigô-Takamori ra, Natume San tati, Kusunoki-Masasige Nitta-Yosisada ra. (ra はローマ字文にふさはしくない、nado などと言ひかへるがよい。)

152. 特別な形を持つた名詞の例。

a. 同じ名詞を重ねたの。

Hitobito, Kuniguni, Simazima, Sumizumi.

[tokoro-dokoro は副詞として使ふ方が多いやうである。]

b. 「さ」「け」「み」などが形容詞の語根についたもの。これは全くの名詞になつたものと見て大文字で書く。

Hukasa, Ookisa ; Samuke, Nemuke ;

Akami, Atumi, Umami.

c. 動詞から導いた名詞や、「て」「やう」「かた」などがそれに付いたもの。

Nagare, Susumi ; Yomite, Kakiyô, Iikata.

動詞から來たこの種の名詞について特別な使ひ方のあるこ

とは §136 で述べた。又、形が同じでも、名詞形の動詞と本當の名詞とあることは §192—194 で述べる。

d. dyû (中) といふ語のついた語で、

Sekaidyû ga sawagi-dasita, Iedyû de dekaketa.

などの場合には、Sekaidyû, Iedyû が名詞に相違ないけれども、

Sekaidyû Oosawagi ni natta.

Iedyû Midu ga ippai da.

などでは、形の上では、副詞の役目をして居る。併し心持の上では兩方の場合に要用な差がないから、是は名詞のままで副詞の役をして居る場合と見て、大文字で書くことにしてよからう。

「家の中ぢう」のやうに複雜なのも Ie no naka-dyû (又は Ie-no-naka-dyû) と書く。

e. zyô (上) のついた語で、Tikyûzyô は名詞としてだけ使ふ語であるけれども、gakumonzyô, zizituzyô などは本當の副詞と見るのが正しからう。

Kore wa gakumonzyô Matigai no nai Koto da.

Sikasi rironzyô sôwa yukanai.

..... gakumonzyô kara mite,.....

Sekaidyû の dyû には (副詞的の連絡になつて居る場合でも) 副詞的の意味は含まれて居ないが、gakumonzyô の zyô には本來副詞的の意味が含

まれて居るから、Sekaidyû は名詞とし、gakumonzyô は副詞とするが適當だらう。

153. 組合せ名詞。 A. 前の部分が後の部分を形容する用をしてゐるの（下の a の例）や、二つのものを合せたものを意味しても全體が一つの觀念を與へるもの（b の例）は、一語につゞけて書く。それが十分に慣れた語ならば、つなぎを入れる必要がないが、左もない時又は餘り長い時にはつなぎを入れる。

(a) Akainu, Hutaoya, Rigai-kwankei, Tyûgakkô-seito.

(b) Oyako, Titihaha, Ane-imôto, Nabe-kama.

B. 少し違ふ場合は、二つのものを合せたものを意味するにしても、二つが各自の意味を其儘に持つて居る場合で、これは眞の組合せ詞ではない、ya 又は to を間に挿むのが正當であるに拘らず、漢文口調などの習慣で連絡の語なしに使はれる言ひ方。これは離して書く。［成るべくは ya to などを挿むがよい。］

Onna (ya) Kodomo nimo wakaru yôni.

Rikugun (ya, to) Kaigun no Gunzintati.

Kôtyô ga Syokuin (ya) Seito wo turete,.....

「陸海軍の」になると Riku-kaigun no と書くのがよかりさうであるが、これも正當な言ひ方ではないから、成るべく Rikugun to (ya) Kaigun no としたい。

154. 固有名詞。 會社や學校の名前のやうな固有名詞になると、一つのものでも澤山の詞を組合せたのがあるから、それを例へば Meidiseimeihokenkabusikikwaisya といふやうにつゞけては、讀み書きに隨分不便である。こんなのは便宜に從つて離し又はつなぎを入れる必要がある。最も普通な方針としては、次のやうなのがよからと思ふ。

a. 土地や人の名前、並に其目的物に固有な名前は離して書く。

b. 終りについた普通名詞の部分はつゞけて（必要な處にはつなぎを入れて）書く。

Nippon Ginkô, Mitukosi Gohukuten,

Nippon Yûsengwaisya, Nippon Yûsen Kabusikikwaisya,

Tôkyô Dyosi-Kôtô-Sihangakkô, Oosaka Asahi Sinbun,

Meidi Seimeihoken Kabusikikwaisya.

c. 固有名詞のあとへ他の詞がつく場合には、例へば Oosaka Asahi Sinbun へ Sya をつける時には、Oosaka-Asahi-Sinbun-Sya; Nagoya Tyûgakkô へ Tyô をつける時には、Nagoya-Tyûgakkô-Tyô のやうにする。［Oosaka Asahi Sinbun Sya と書くことは、Sya と云ふ語が略語のやうな心持の外獨立しては使はれない點から、不自然であるし、Oosaka Asahi Sinbunsya と書いては、新聞社といふものの一つなる大阪朝日新聞社となつて、大阪朝日新聞

の社だといふ心持に適しない。それ故 Oosaka-Asahi-Sin-bun-Sya とする。「名古屋中學校長」も同様。

155. 地理上の名前は、山、川、灣等まで續けて書くのがよい。但し、府、縣、市、區、町（町村制の）などのやうに普通添へて云はない添へ詞は、前につなぎを挿む。

Huzisan, Huzinoyama, Sumidagawa, Tôkyôwan; Musasi-no-kuni, Tôkyô-hu, Tôkyô-si, Hongô-ku; Urawa-mati（埼玉縣廳のある、「浦和」だけも使ふ）Sakanamati（本郷區の中の町、「肴」とは云はない）。

代　名　詞

156. 代名詞は、使ひ方は名詞と同じであるが、大文字は使はない。

watasi, anata, anohito, anokata; dare, donata; zisin, zibun;

kore, sore, are; dore, nani; sonomono.

koko, soko, asoko; doko.

kotira, sotira, atira; dotira.

「あの方」「あの人」と同様な「この方」「その方」「この人」「その人」や「あの男」「あの女」、「あの子」「この子」「その子」の類も、代名詞を使ふのと同じ心持で使ふ場合もあつて、これらは konokata.....sonoko と書いてよいわけである。併し、大抵の場合には kono Kata, sono Kata, kono Hito, ano Otoko, kono Ko などでよいと思はれる。「あの方」「あの人」だけは代名詞的の使ひ方が多いから特に前に出した。

kare, kanodyo などは口語では多く使はれないけれども、使ふ場合には無論代名詞である。

157. 不定代名詞。普通の文法書で代名詞と考へられて居ないに拘らず、代名詞と見るのが適當だと思ふのは、

a. 「他人」の意味の *hito*.

b. "Ookii *hô*", "Ani no *hô*" のやうな hô.

c. "Asonde ita *koto* wo kuyamu" のやうな場合の *koto*. これはそれの前にある文句を纏め、それを代表して名詞の性質を持たせるから。

この外、一般に「事柄」の意味が明に感ぜられない Koto（巻末の「文法字引」Koto の條參照）。

d. 「人」の意味の mono ("Kawarino mono" などの);

"Dôbutu no utide, Sisi ya Tora no yôna *mono* wa....." のやうな mono;

"Kô itte kita *mono* (*mon'*) desu kara,....." のやうな mono.

e. "Asonde ita *no* wo kuyamu" のやうな場合の no. これは上の koto と同じこと。

多く使はれる "naninani-sita *no* de aru" といふ云ひ方の no も此種類の no である。

"Watasi no mita *no* wa....." の no. これは「同種のもの」を代表する。(§166 參照)

f. "Watasi no kangaeru *tokoro* dewa....." の tokoro; 「家」の意味の tokoro (watasi no tokoro の類)。

關 係 詞

158. 關係詞は、名詞、代名詞、又は名詞のやうに扱はれる文句の次に來て、それの他に對する關係を示すものである。

關係詞は名詞代名詞から離して書く。

Inu *ga* hoeru.

Watasi *no* Hon.

Sake *wo* nomuna!

Inu *ni* yaru.

Inu *to* asobu.

Tôkyô *kara* Yokohama *made*.

Hana *yori* (*yorimo*) Dango.

Hikôki *de* Tiba *e*.

A kara B made *wo* hutatu ni wakeru.

Tukihi no tatu no *wa* (*ga*) hayai.

關係詞の to は「共に」の意味の to である。

159. de には、他の關係詞と同樣な普通の使ひ途(下の a b)の外に、特別な使ひ途がある(*)。

a. 場所の de: Tôkyô *de* hataraku, Gakkô *de* benkyôsuru など。これに準ずるのは、Seihu *de* kaiageta の類、Eigo *de* Inu wo "dog" to iu の類。

b. 道具、材料、原因、仕方の de: Hude *de* kaku, Tetu *de* tukuru, hito no Koto *de* sinpaisuru, ôzei *de* hataraku など。これに準ずるのは Okage *de* の de や Kekkwa *de* miruto の de など。

c. 指定動詞の de: Otoko *de* aru (gozaru), Kodomo *de* nai など。de だけで「であつて」の意味に使ふのもこれの部類と見る: Ueno Ko wa Otoko *de*, tugino Ko wa Onna da.

d. 形容詞の de: kirei *de* aru, siduka *de* nai の類は、上の場合と似て居るけれども、kireina sidukana といふ形容詞の動詞形と見る(§213)。これにも「であつて」の意味の de がある: Ani wa ranbô *de*, Otôto wa otonasii など。genki *de* hataraku, kuu ya kuwazu *de* hataraku なども、これに準ずる。

e. 分量や程度の de: kore *de* yoi, sore *de* takusan,

(*) *Rômazi Sekai* Mk. 7, p. 148.

kore *de* Osimai, tô *de* 10 sen, mikka *de* dekiru, iti En *de* ukeau, Midu *de* kekkô などの *de*。これは「であれば」に似た、動詞を含んだやうな心持がある點が普通の關係詞とちがふ。

160. ga no ni wo だけを、外國語の文法で名詞の變化で表はすのに倣つて、特別扱ひにし、名詞に續けて書かうといふ人もあるけれども、それは穩當ではあるまい。日本語では ga no ni wo も kara made などと同じ種類の語であるから、皆な離して書くのが正當と思はれる。

161. 關係詞は——ga と wo と no を除いては——凡て副詞句を作る。ga や wo の付いた句も動詞に續く點に於て副詞句的の性質を持つてゐるけれども、通常副詞句とは云はない。

副詞が名詞の役目をすることがある（§257）やうに、關係詞で出來た副詞句が名詞の役目をすることもある。§158 の例 A kara B made wo..... の A kara B made などはそれの例である。

162. no だけは形容詞句を作る。Sakura no Hana, watasi no Hon などのやうに。

163. no は又、他の關係詞が作る副詞句、或る動詞の te（又は de）で終る形（tuite, kwansite, mukatte など）が作る副詞句、nagara, gatera 等が作る副詞句の次に來て

形容詞を作る。この時には no を前へつけて書く。

Oosaka karano Kaerimiti.
Tôkyô kara Kyôto madeno Kyori.
Kodomo ni mukatteno Ohanasi.
Hon wo yomi nagarano Hanasi.
Sanpo gaterano Hanami.

かういふ場合の no は、是非前へつけなくてはならないといふことはない、離すことにきめて置けば、それでもすむ。併し、この no は自分で別の意味を持つて居るのではなくて、只前の句を形容詞にするだけの用をすることは、動詞や形容詞の語尾の變化と同樣であるから、語尾の扱にして前へつける方が工合がよい。

上の karano, madeno などは、形容詞形にした關係詞と見てよい。又 tuiteno, mukatteno, nagarano 等は、形容詞形にした（補ひを要する）副詞（又は副詞形の動詞）だと見てよい。（§221 參照）

關係詞の ni は副詞句を作るものであるから、理窟からは、no がついて nino となり得るわけであるけれども、單に、ni が no になるのが普通の習慣である。例へば、Daigaku Byôin wa *Hongô ni* aru. を形容詞句にすれば *Hongô no* (=nino=ni aru) Daigaku Byôin.

164. 前の節と同じ樣な續き工合の文句でも、no が形容詞の語尾の性質でなくて、全くの關係詞である場合もある。これは離して書く。

「東京から京都までの半分」といふのでは、「東京から京都まで」が「東京から京都までの道のり」の意味で、上の文句は其道のりの半分の意味であるから、no を離す。

Tôkyô kara Kyôto made no hanbun.

「東京から京都までの距離」では、「この距離は東京から京都までだ」と云へるが、それと同樣に「この半分は東京から京都までだ」と云つては、丸で意味が變つて來る。これは、「東京から京都までの距離」の「の」は形容詞語尾の性質を持つて居るに反し、「東京から京都までの半分」では其性質を持つて居ないことの證據である。

又、動詞の te (de) で終る形に no のつづく場合でも、其動詞が時の觀念を備へた場合、卽ち「何々しての」が「何々した上の」又は「何々してからの」と同じ意味を持つ場合には、no を離す方が適切である。例へば

Seiyô kara kaette no Hanasi.

「電氣に就ての話」は「此話は電氣に就てです」と云へるけれども、「此話は西洋から歸つてです」とは云へないのは「電氣に就ての」の「の」は形容詞語尾と見られ、「西洋から歸つての」の「の」はさう見られない證據である。

165. 關係詞に「廣さ詞」の wa 又は mo のついたのは一つにつづけて書く。（併し no の場合は除く、次の節參照）。

Neko *niwa* yaru.　Inu *nimo* yaru.

Tôkyô *karawa* tôi.　Nagasaki *karamo* tôi.

但し ga と wo とは、それに wa や mo のつくべき處が單に wa や mo となる。この時は wa や mo だけで關係詞と見る。

Watasi *wa* yukimasu ; anata *mo* irassyai !

Watasi wa Sake *wa* nomimasen ; Tabako *mo* suimasen.

wowa に代る woba と womo といふ形も時には使はれる。但しこれ等は文語の形が殘つて居るもので、口語では單に wa, mo となるのが普通である。

他の「廣さ詞」が關係詞の前又は後に來ることもあるが、それは離して書く（§243, 249）。

niwa, karamo 等は、間を離して、ni wa, kara mo などと書かうと云ふ人もあるけれども、これ等は ni, kara 等の關係詞に、wa 又は mo の特殊な色を帶ばせただけで、使ひ途は只の關係詞と變らないから、そのまま各々一つの關係詞と見て上のやうに書くのが便宜である。其上、wa や mo が離れて居るのは、ga 又は wo に代つた場合と同じになる爲に、見て意味を取るのに都合が惡い。尙 §248 を見られたい。

166. no の次に wa や mo の來る時には必ず no wa, no mo と離して書く。その理由は、元來廣さ詞のままの wa や mo は副詞の性質の詞の次に來るので、nani no といふ形容詞句にはつかない。no の次に wa や mo が來る

ときには、その no は必ず代名詞の no (§157 c) である。從つてその wa や mo は、ga 又は wo に代る關係詞になつて居るから、no と離して書くことになるのである。例

Ki no tuita *no wa* (ga) kaetta ato datta.

Tarô *no wa* yoi; watasi *no mo* yoi.

この後の例では no は no no 二つの縮んたものと思はれる。初の no は關係詞の no, 後の no は代名詞の no である。卽ち

Tarô no no wa yoi; watasi no no mo yoi.

Tarô n' no wa yoi; watasi n' no mo yoi.

Tarô no wa yoi; watasi no mo yoi.

この順序で、段々に簡單になつたので、終りの no の前に關係詞の no が略されてあると見られる。

[ni no to wa mo などの樣々な場合を纏めたのが卷尾の「文法字引」にある]。

動　詞

167. kaku, yomu などは勿論、漢語で出來た kenkyû-suru, hunpatusuru などもそれぞれ只一つの簡單な考を表はすから、皆一つの動詞と見て、一つにつづけて書く。但し「を」を挿んで「研究をする」と云へば「研究」は名詞になるから Kenkyû wo suru とする。

「を」のある なしで、このやうに取扱をまるでちがへることの正當だといふことは、「英語を」「數學を」などを前に添へた場合を較べれば明かである。

Eigo wo kenkyûsuru.

と云へるのは kenkyûsuru が動詞だからである。

Eigo wo Kenkyû wo suru(*).

は無理な云ひ方と云はねばならない、寧ろ

Eigo no Kenkyû wo suru.

とした方が詞のつづき工合が素直であるのは、「研究を」といふ時の「研究」が名詞だからである。

168. 字音二字（稀には三字以上のもある）の動詞を、suru の前で離して書かうといふ說がある。實際長い語尾のついた kenkyûsinakattarô などになると、長過ぎて讀みにくいといふ感じがするから、kenkyû の次で離すのも便宜に相違ない。此流儀で kenkyû suru と書いても、kenkyû suru 全體で一つの動詞であることには變りがない。

此說に對して、さうするならば字音一字の動詞「對する」「信ずる」なども tai suru, sin zuru などと分けて書かなくては理窟に合ふまいと云ふ人もあるけれども、必ずしもさうではない。字音一字の動詞と二字の動詞とは、文語體では共に佐行變格であるけれども、いろいろな點で性質が違つて居る、例へば一字の字音動詞には suru が zuru に變ることや suru の前で音がつまることがあるが、二字のものにはそれがない、又「御……する、御……なさる、御……申す」などの形で、一字の方は「御察しする、御信じなさる、御察し申す」のやうに動詞語尾の「し」を保存する點で普通の動詞と同樣であるが、二字の方では「御同情する、御勉强なさる、御依賴申す」のや

(*) これと似た云ひ方のことが §192 にある。

うに「し」の語尾を保存しない、など。それ故に、一字の方はつづけて書き、二字の方は離して書くと區別を立てても理窟の上で不都合はない。

この通り、分けて書いて不都合だと云ふ重い理由はないと思はれるけれども、兎に角、一つの考を表はす一つの動詞であるから、重大な不都合のない限り、それに一語の形を與へる方が正當でもあり簡單でもあるから、私は前節の通りつづける方にして居る。實際多年の經驗に照して見ても、それで差支がない。[語尾によつて長くなることを云へば、字音動詞に限つたことではない、môsiagenakattarô, tobidasanakattarô の類は珍しいことはなくて字音動詞と同じ程度の長さである]。

169. 同じく suru のつく動詞でも、臨時に組立てたもの（外國語に suru を添へて動詞にしたのもこのうち）や、動詞の普通の名詞形へ suru のついたものなどは、suru の前につなぎ (-) を置くがよい。

San wo *nibai-suruto*, Roku ni naru.

tokuhitu-taisyo-subeki Koto.

Hon wo *yomiai-suru*. Ie no mae wo *sudôri-suru*.

Ki ga *tatigare-suru*.

但しそれの前に o や go がつくと、例へば、「お待受しませう」などでは「お待受」が餘計獨立な氣分を與へるから、omatiuke simasyô と離す方がよい (§186)。

170. 特別な形の動詞では、

形容詞の語根に「がる」のついたのも一つの動詞と見て一つづけに書く。

iyagaru, sabisigaru, atugaru, kikitagaru, kakinikugaru.

「ぶる」「めく」「めかす」などのついた動詞も上に準じて書く。

harumeku, rôzin-mekasu, gôketu-buru, mottai-buru.

「無くなる」（死亡する、紛失するの意）「無くする」「無くなす」（失ふ意味）といふ詞は形容詞の副詞形と動詞とで出來て居るが、今は殆ど一語のやうになつて居るから、一つづけにして nakunaru, nakusuru, nakunasu とする。

171. 二つの動詞を組合せて作つた動詞で、二つの意味が別々に表はれて居るのはつなぎ (-) を挿んで書く。

yari-tôsu, kaki-kudasu, kaki-hazimeru, kaki-dasu, kaki-ayamaru.

併し云ひ慣れた組立動詞で一つの考へを表すときは、つなぎを挿まない。

oikakeru, hikkakeru, toridasu, môsiageru.

172. 動詞變化の種類。普通の動詞を語尾の變化によつて分けると、

(1) 五段の動詞、kaku, osu, tatu の類。

(2) 一段の動詞、miru, okiru, ukeru の類。

(3) 「する、ずる」の動詞、suru, sinzuru, kenkyûsuru の類。

(4) 來る、kuru

この四通りになる。

茲には附け離しの問題を主にするから、これ等の四種類について一々變化の形を擧げない。只 miru といふ動詞を例にして語尾變化と附け離しの樣子を示す。

173. 語尾變化の形。 動詞は語尾の變化でいろいろな形になるが、私は動詞固有の變化として次の十二種を認め、他のものは特別な形とするが適當だと思ふ。肯定と否定と兩方揭げる。

切れる形
1. 現在。miru, — minai, (min, minu)
2. 過去。mita, — minakatta, (minanda)
3. 推量の現在。miyô, — mimai, (minakarô)
4. 推量の過去。mitarô, — minakattarô, (minandarô)
5. 命令。mii! miro! (miyo!) — miruna!

續く形
6. 接續。mite, — minaide, (minakute, minde), mizuni
7. 中止。mi, — mizu
8. 列擧。mitari, — minakattari, (minandari)

條件の形
9. 不定條件の現在。miruto, — minaito, (minto)
10. 不定條件の過去。mitara, mitaraba, — minakattara, (minakattaraba, minandara)
11. 定條件の現在。mireba, — minakereba, (mineba)
12. 定條件の過去。mitareba — minakattareba, (minandareba)

接續の形は wa 又は mo の添うた形でも使はれる。

mitewa, mitemo, minaidewa, minaidemo, minakutewa, minakutemo, mindewa, mindemo, mizuniwa, mizunimo.

174. 否定の部分 nai は、意味の上から最も大切なものであるといふ點から、成るべく目立つ方がよい。從つてそれの前を離すがよいといふことも考へられる。實際そのやうに (mi nai, mi nakatta などと) 書いて見たこともあるけれども、云ふときの心持から見て、例へば「見ない」を二つの獨立の語とするのは (「書かない」の kaka を獨立の語とするなどは殊に) 適當と思はれないから、矢張り上の通りにつづけて書くことにして居る。又實際の經驗で見ると、それで別に不都合や不便はないやうである。

否定の形の變化は「i で終る形容詞」の變化 (§212) と同じである。

175. 命令の miyo! の形は、私は文語の形と見たいのであるけれども、或る地方では實際口語にも使ふと云ふことであるから、茲に入れて置いた。又 miro の形は野卑な感じがするので、私は命令の標準の形としては mii! の形 (五段の動詞では kake! の形) を取りたいと思ふ。實際の話では、丁寧でない命令の云ひ方が普通使はれないから、「見い」「捨てい」「せい」「來い」はおかしいやうに思はれるが、それを間接の引用の形に使つて見れば、それが適當

だといふことが分る。「來いと申しました」、「我慢をせいと申しました」、「書いて見いと申しました」など。軍隊語の「氣を付けい」などもそれである(*)。

命令形にはも一つ、mina！の形がある。これに對しては、五段の動詞でも、他と同樣、中止形に na のついた形で使はれる、kakina！のやうに。(§187參照)

176. 否定命令の kakuna！の形は na をつづけて書く。kaku na とすれば、na は呼かけ詞で肯定の kaku へ感動の意の添うたものになる。

177. 普通の文法では mita mite などの ta のやうなのを「助動詞」として扱ふけれども、「ローマ字文では ta の部分だけを離しては書かないから、それを「助動詞」と云ふ別の語の扱ひにするのは便宜ではなくて、寧ろ語尾變化とするが適當である。

178. mi のやうな形は普通「連用形」といふ名前になつて居るが、私はこれ丈で動詞の働きをする場合を主にするといふ立場から、「中止形」の名前を取つた。尤も、肯定の中止形は、演說口調などには多く使はれるけれども、普通の話には比較的に少ない。否定の方は普通にも使はれる。

(*) 命令の形と同じ意味を表はす言ひ方で、文法上丁寧な形ではあるけれども、丁寧さの淡薄なのは、mi nasai！のやうな言ひ方と、miraretai のやうな言ひ方である。場合によつてこれらを使つてもよい。

Warui no mo ari, yoi no mo arimasu.

Kaze mo hukazu, Ame mo huranai.

179. 列擧の形の次に「する」が來るのは離す。mitari kiitari suru.

180. miruto と mireba とは實際上殆ど同意味に使つて居るけれども、云ひ方の氣持から云へば、miruto の方は、まだ見ない所に自分を置いて假定する云ひ方、mireba の方は見た場合に自分を置いて假定する云ひ方であるから、miruto を不定條件、mireba を定條件と區別するのが至當と思はれる。

尤も、不定條件の形は、現在過去共、

Uti e *kaeruto*, Ame ga huri-dasimasita.

Uti e *kaettara*, Hito ga kite imasita.

のやうに、條件の意味でなく、事柄の相繼いで起ることを示すことがある。定條件の方でも同樣な使ひ方がある。併し、形の名前は、條件の方を主と見て、上のやうにして置く。

181. miruto の形の書き方に就て云ふべき事は、此 to を離して miru to と書けば引用の to 又は廣さ詞の to になることである。此場合の to に限つて前につづけるわけは、それの前に來る動詞の形を mita miyô などにかへて

は言へない（又は全く違ふ意味の to になる）のでも知れる通り、miru と to と離されない關係になつて居るからである。

「見ると」は「見るが」「見るに」などと組立上似たやうにも見えるけれども、「が」は「見たが」とも使はれるし、「見るに」は同じ心持で「見るのに」といふことも出來るから、これ等は miru ga, miru ni と書き、「見ると」だけは、さういふ自由が丸でないから、miruto とかく。

182. mitaraba, mireba, mitareba などの ba を「てにをは」又は接續詞と見るのも一つの見方であるけれども、一般に獨立の接續詞として適當な語は、それの前にある文句を終止形（上の表の (1) から (4) までのうち）のどれにでもすることの出來るものだとするのが適切と思はれる。ba は此條件に協はないから、獨立の接續詞とは見ないで、動詞の語尾變化に入れる。

「見るならば」の類の言ひ方になると、「見たならば、見ようならば」とも云へるから、「ならば」だけを接續詞として、miru naraba としてよい。miru nara も同樣。

「見なかつたれば」は普通使はない形だけれども、それの略した形 minakattarya は云はないことはない。

183. 動詞變化の特別な形としては、

A. 「動詞の次で離して書くもの：—

miru, minai, mita, minakatta } darô, de arô / desyô, de gozaimasyô, } これは動詞の性質
rasii, rasiku / sôna, sôni, sô de / yôna, yôni, yô de } これは形容詞の性質

mi { tutu / nagara / gatera } これは副詞句。tobiagari sama, ...to ii sama なども此類。

tutu, nagara, gatera は、mi なら mi と云ふ只一つのきまつた形からだけつゞくから、一般の方針から云ふと、前につゞける方が理窟に合ふわけで、以前には實際つゞけて書いて居たこともある。併し、今では、tutu nagara gatera を「補ひを要する副詞」(§219) と見て、前を離す方を便宜と考へて居る。[此場合の mi と、次の例にある mi-sôna, mitai, mirubeki の mi miru と較べると、此場合の方は、時の考が明かに感ぜられて動詞的の性質が完全であるし、後の方は、時の考がなくて形容詞的の性質が主になつて居る。此點からも、mi tutu 等は間を離し、mi-sôna 等はつゞけるのが適して居るやうに感ぜられる]。

B. 動詞へすぐつづける形：—

mitakke. これは動詞の性質（これは「思ひ起しの形」で特別なものとし、§173 の列に入れないのが適當であらう）。

mi-sôna, mi-sôni, mi-sô de / mitai, mitaku 等 / mirubeki, mirubeku } これは形容詞の性質。

「見たつて」（「見たつて云ひました」「見たつてだめです」

などの）といふ言ひ方は「見たつけ」に似て居るけれども、「見たと」又は「見たとて」の略であるし、「見るつて」「見ないつて」等いろいろにつづくから、動詞の形とは見ない。これは mita tte と書いて tte を接續詞と見る。

184. 存在の動詞の aru は、否定形が aranai でなくて單に nai である外、變化は前と同樣である。只否定の命令形だけは普通の形のやうに aruna! である。

gozaru に就いては變つたことがない。但し、「ます」へ續く形は、gozarimasu よりも gozaimasu が普通である。

185. 指定の動詞。指定の de aru, de nai は、存在の aru, nai と同じやうに變化する。只それと de の間を離す。

肯定の簡單にした形 da, desu は次のやうに變る。これはいづれも de を離さない。

現在	過去	推量の現在	推量の過去	接續	列擧
da	datta	darô	dattarô	de	dattari
desu	desita	desyô	desitarô	desite	desitari

不定條件の現在	不定條件の過去	定條件の現在	定條件の過去
dato, nara(-ba)	dattara	nareba	dattareba
desuto	desitara	—	desitareba

中止の形は動詞なしに使はれる。例へば、

Watasi wa Nipponzin, anata wa .....

尙 da といつて然るべき處を na と云ふことがある、これは名詞又は koto, no などにつづく場合である、（mono へつづくときは da のまま）。

Anohito no rippana Gakusya na koto wo kiite,...

186. 語を丁寧にするためにつかふ itasu, môsu, tukamaturu, nasaru, kudasaru, asobasu や tamae などを動詞の次に添へるときには、つなぎなしに離して書く。こんな動詞の前につける「御」(o, go) は、分りにくい虞のある場合には、間につなぎ (-) を置く(*)。

o や go のついた動詞の名詞形に suru のついたのも同樣 suru の前を離す（§ 169 の終りの項參照）。

二字以上の字音動詞は、かう云ふ場合には、中止形の語尾 si を省いて助動詞に續く。尤も tamae の前では（時には nasaru の前でも）si が殘る。

ohanasi itasu,	oide nasaru.
o-hikiuke môsu,	o-kaki asobasu.
kaki nasai,	o-kaki nasai!
o-tadune suru,	go-sansei suru.
kaki tamae!	benkyôsi tamae!

かういふのは、組立からいへば、組合せ動詞であるけれども、詞の主ナ意味が前の部分だけにあることが普通の組

(*) つなぎ (-) の代りに「分けるしるし」(') を使ふ流儀もある。これも惡いことはない。o'bikiuke, go'hunpatu 等。

合せ動詞と違ふから、かういふ特別な取扱にする。又 o-hikiuke, go-hunpatu, o-kaki などは、suru, môsu, nasaru などの補ひ語（名詞形の動詞）だと見てもよい。

187. okaki nasai! を略して okaki! と云ふことがある。okaki na! okaki yo! は、この okaki へ呼びかけ詞の na yo を添へたものと思はれるから、na yo を離す。

同じく命令形の kakina! では、kaki だけでは命令にならないから、na を獨立な呼びかけ詞とは見られない。それ故に na を前につけて書く。（これと否定命令の na とは、na の前が i であると u であるとで見分けられる）。又下品な命令の形の kakinê! も、同樣に nê をつけて書く。

188. masu. 「勉强します」「書きます」の「ます」は、itasu môsu などと同種の助動詞であるけれども、獨立して使はれないのと、短いのと、會話の最も普通な形であるのとから、便宜上前へつけて書いて居る(*)。

kakimasu, benkyôsimasu.

masu のいろいろな形の附け離しは前の例から推して知られる。只注意すべきは、否定形の過去の形として mimasenanda よりも普通に使はれる mimasen desita の形がある。これは kaku desyô などと同種類と見て desita

(*) tamau と同じ意味の、古典語の「ます」— これは四段活用である — は mi masu のやうに離して書く。

の前を離す。これについては、それを接續形 mimasende の類と見て desita の前をつゞける方が理窟上正しいといふ說もあるが、實際上の便宜からは兎に角 desita の前を離す方がよい。

189. eru (uru), kaneru, dekiru が他の動詞につゞいて使はれる場合なども特別な組合せ動詞として離して書く。

kaki uru, kaki-ayamari enai, benkyôsi uru;

kaki kaneru; sinbô dekiru.

この終りの云ひ方（「辛抱出來る」の類）は全く正當な云ひ方であるかどうかと思はれるが、あつて都合のよいものだから認めたいと思ふ。

190. 受身、可能、敬讓などの接尾語 reru, rareru や、使役の接尾語 seru, saseru は前へつづけて書く。

yomareru, mirareru;

yomaseru, misaseru.

191. 形容詞形（連體形）。動詞のいろいろな形は動詞の役目をする外に、他の役目を兼ねることがある。

現在と過去は形容詞の役目を兼ねることがある(*)。

saku Hana, hareta Hi, watasi ga mita Hito.

Heitai ni yukanai Otoko.

(*) 現在と變つた形で連體形になるのは、da の連體形が場合によつて na となることである（§185）。

次に來る名詞又は不定代名詞が略されると、形容詞形が名詞のやうになる。

yuku (no) to kaeru (no) to ga.....

推量の現在過去は稀に同様に使はれる。

.....arô Rikutu ga nai.

taisita Kanemoti などの taisita のやうなのは全くの形容詞である。

192. 名詞形。中止形は名詞の役に使はれる、此使ひ方では漢語（二字以上）に suru のついた動詞では、語尾 si が取れることが多い。

Ie wo *torihiroge* no tameni.

Hon wo *kai* ni yuku.

Hon wo *sensaku* (*sensakusi*) ni yuku.

動詞の前に o をつけた形（二字漢語の動詞では go をつけて語尾の si を略する）は、次に wo negau (kou, inoru) とつづける形でも多く使はれる。wo の次に negau, kou, inoru の他の詞を使つてもよい理窟だけれども、多少無理に感ぜられる(*)。

Todokesyo wo o-dasi wo negau.

Kono Sigoto ni go-zyoryoku wo inoru.

(*) §167 にあつた Eigo wo kenkyû wo suru なども、理窟では不都合がない (kenkyû を動詞の名詞形と見れば) けれども、普通でない。

次のやうな言ひ方も、名詞形を使つたものと見られる。

Eigo wo *yomi* wa suru ga, *kaki* wa sinai.

Eigo wo *yomi* mo *kaki* mo dekinai.

これの變つた使ひ方は、

Hon wo *kai* wa *katta* ga,.....

Soba wo *kui* mo *kuttari*,.....

193. 中止形は本當の名詞にもなる。

Negai, Todoke, Hataraki, Kutabire.

他の名詞と結び付けた組合せ名詞も多い。

Kamiire; Tenugui; Tabemono; Amehuri.

Kawari, Tegawari; Tuduki, Tudukimono.

Yôkô-gaeri, Amerika-gayoi, Kodomo-damasi, Mukô-mizu, Kari-zumai (*).

特に普通にあるのは -te, -yô, -kata のついたもので、

Utaite, Utaiyô, Utaikata の類。

194. 本當の名詞と動詞の名詞形との區別は:——

本當の名詞には何時といふ心持が丸でない、又前に形容詞が來る。動詞の名詞形には時の心持が含まれるし、又副詞性の詞や句が前に來る、これは大文字にしない。

Kore no	kuwasii	*Gosetumei*	wo negaimasu.
(形容詞句)	(形容詞)	(名　詞)	
Kore wo	kuwasiku	*gosetumei*	wo negaimasu.
(副詞句)	(副詞)	(動　詞)	

(*) この種類の詞に no のついたのは形容詞と見る (§203)。

動詞の名詞形又は動詞から出た本當の名詞へ no のついた文句も同様に判斷される。

konaida *gotyûmon* (動詞) no Hon.

konaida no *Gotyûmon* (名詞)。

Hikôki wo *kenbutu* (動詞) no Hito.

Hikôki no *Kenbutu* (名詞) no tameni.

195. 前節の規則に反して本當の名詞の前に副詞性の文句の來る場合は§136で見たものである。即ち、動詞の中止形へ -te, -yô, -kata のついたのは本當の名詞であるに拘らず、それが動詞から來て居る關係から次のやうな特別な使ひ方をする。

Yome ni (副詞句) *Moraite* ga nai.

dô (副詞) *Siyô* mo nai.

yokoni (副詞) *Katamukekata* ga tarinai.

196. **連用形。**中止形は又連用形と稱へて、それの後に他の動詞や形容詞をつづけて組合せ詞を作るのに使ふ。

yari-tôsu, *kaki*-ayamaru, *kaki*-yasui, *kaki*-nikui.

197. **副詞形。**接續の形と條件の形は接續詞の用を兼ねる。そして、それから前の文句が次の文句に對して副詞の關係になる。

Ame ga *hutte*, Dimen ga katamaru.

Kaze ga *hukeba*, Ame ga hareru.

中で副詞の氣持の最も多いのは、接續の形が單獨に使はれる場合である。

kagande aruku. *tuduite* benkyôsuru.

tatte iru, Hon wo yonde iru などは、意味の上では、「何々して居る」全體で一種の動詞の形(進行の形)と見る方が適切なやうであるけれども、形の上では tatte yonde を接續の形(副詞形)として差支がない。

形容詞

198. uresii, akai などは勿論一つの形容詞であるが、omoomosii, hukubukusii, sôzôsii などのやうに同じ語を重ねたものに「しい」をつけたのも矢張一つの形容詞である。

なほ rippana, konnanna, hontôno などのやうに na 又は no といふ語尾を持つたのも矢張一つの形容詞である。

かういふ語で、「立派」「困難」「本當」等を名詞としないのは、「立派な」「困難な」「本當の」が「美しい」「むづかしい」「正しい」と全く同様な云ひ方で其間に「立派」「困難」「本當」といふ無形名詞の觀念を別に持たないからである。

形はこれと同じで、副詞に na や no のついたものもある(§221)。

199. **副詞形。**i で終る形容詞は、i を ku にかへて副詞をつくる。na (又は no) で終る形容詞は、それを ni にかへて副詞を作る。

この外に動詞形（動詞の役目をする形）があるが、それは別に述べる（§212, 213）。

西洋の文法では「美しくなる、奇麗になる」に對する「美しく、奇麗に」に形容詞形を使ふが、日本語では副詞形を使ふ。

200. i で終る形容詞の副詞形は場合によつて次のやうな音便變化をする。

akaku　が　akô

uresiku　が　uresiu（又は uresyû, §75）

usuku　が　usuu（又は usû）

omoku　が　omô

例。Yô koso oide kudasaimasita.

「ございます」につづく場合には、此音便變化のあるのが普通で、否定の場合には、もとのままの方が普通である。

Taihen uresiu gozaimasu.

Ikkô uresiku gozaimasen.

201. 漢語から來た詞に ni の添うたの（例へば「奇麗に」）を附けて書くのは上の通りそれを副詞形と見るからである。實際の場合に當つて、ni を前へ附けるのが當つて居るかどうかを見分けるには、それを i で終る形容詞の副詞形（例へば「美しく」）に取りかへて見ればよい。さう取りかへて差支がないならば、ni を續けてよい。さう云へないならば、ni は離すべきである。例へば、

Sore wa *kireini* sôinai.

と、ni を前へつづけて書くかといふに、kireini を utukusiku と云ひかへて、Sore wa *utukusiku* sôinai とは云へない。必ず Sore wa *utukusii ni* sôinai と云ふから、

Sore wa *kirei ni* sôinai.

と、ni の前を離して書く。

これはつまり「きれいであるに sôinai」又は「きれいなに sôinai」と云ふ言ひ方の語尾を略したのである。

202. 色々な語に「的」「性」「風」「流」「上」「形」「なり」「だらけ」などがついたのに更に「な」又は「の」のついたのも一つの形容詞と見て、一つゞけに書く。

bizyututekina,　ryûkôseino,　syoseihûna,

igirisuhûna,　amerikaryûno,　gakumonzyôno,

kakugatano,　tamagonarino,　hokoridarakena.

「性、風、流、上、形」などのついた詞には名詞もある、"Ryûkôsei ga tuyoi", "Amerikahû ga hayaru" などに於けるやうに。從つて、それへ no のついた詞も、名詞へ關係詞の no が添うたものとして、"Ryûkôsei no Kaze", "Amerikahû no Ryôri" などとしても差支ない(*)。併し、形容詞にした方が、文章の組立が簡單になるだけよい。それのよく分る場合は、次に來る名詞にもつと外に形容詞が

(*) na の添うた言ひ方は（§185 に出した場合の外）形容詞ときめてよい。

つく場合である。hagesii ryûkôseino Kaze, kyonen hayatta ryûkôseino Kaze と書けば、hagesii も、kyonen hayatta も Kaze を形容することが明かであるけれども、hagesii Ryûkôsei no Kaze, kyonen hayatta Ryûkôsei no Kaze では、「流行性が劇しい、流行性が去年はやつた」やうに見えて、文を見て了解するのに都合が悪い。

203. いろいろな語に動詞の名詞形を組み合せて no を添へたやうな語も形容詞と見るのが適當である。

kodomo-damasino Hon ; *kari-zumaino* Ie ;

yôkô-gaerino Sinsi ; *amerika-gayoino* Hune.

204. 名詞と no にするか、形容詞にするかが問題になるもう一つの場合は、物質名詞である。「木製の、鐵製の」の意味で「木の、鐵の」といふのを、Ki no, Tetu no と書くことも出來るし、又 kino, tetuno と書くことも出來る。

これも、前節と同じわけで、形容詞として使ふ方を奬勵したい。ôkina kino Hako と ôkina Ki no Hako, omoi kinno Kusari と omoi Kin no Kusari を較べると、形容詞の形にした方が工合のよいことが明である。

同じく「木の、鐵の」でも、「木製の、鐵製の」の意味でないのは、名詞と no と離して書く。Ki no Mokume, Akagane no Seisitu などでは kino, akaganeno とは書けない。

205. -no や -na のついた形容詞をいくつか廣さ詞で

結び付けて使ふときには、最後のものの外には -no や -na を省くのが普通である。

migi *ka* hidarino Te

kakugata *to* marugatano Tukue

i で終る形容詞にはかういふ言ひ方はない。必ず akai Kami ya aoi Kami, akai Kami ya aoi no のやうに云ふ。

206. 名詞に「らしい」「がましい」などがついて普通の繼つた語になつたもの(*)、動詞に「よい」「にくい」「たい」「べき」などのついたもの、動詞の中止形や形容詞に「さうな」のついたもの、これらは凡て一つの形容詞と見て一つゞけに書く。

otokorasii, taningamasii ;

yomiyoi, kakinikui, nomitai ;

dekisôna, uresisôna, nomitasôna ;

yomubeki, kenkyûsubeki.

「べき」の形は文語の形が殘つて居るのであるが、「べし」「べけれ」などは使はれない（「べく」は稀に使ふ）。

207. 「らしい」「やうな」「さうな」「ふうな(の)」「あんばいな(の)」「ぐあいな(の)」などが、形容詞の性質の語「動詞の切れる形を含む）を受けて使はれるのは、補ひ語を要

(*)「であるらしい」の意味の rasii は前を離す。
Are wa ano Otoko rasii. Sore wa Itô Kun rasii.

する特別な形容詞と見て、形容詞性の語を補ひ語とする。

Tôkyô e kuru rasii Yôsu.

Hana no yôna Kanbase.

yôkôsuru sôna Uwasa.

konna hûna Yôsu.

yoi anbaina Dekibae.

yoi guaina Koroai.

Hû, Anbai, Guai 等は元來名詞であるは勿論、實際名詞とすべき場合もある。上のやうな場合にも、名詞として、

yoi Anbai no Dekibae

等と書いてもよいわけであるが、Hû, Anbai, Guai の意味の輕い場合には、上のやうに小文字で書く方が氣持がよい。特にそれの次が「の」でなくて、「な」である場合には、形容詞の感じが強い。

副詞及び廣さ詞の bakari, dake, giri (kiri), gurai, hodo, tôri, tame, nagara, gatera などに no (又は na) のついたのも此類の形容詞である (§221, 250 參照)。

208. yôna の前に kono, sono, ano, dono のついたのは一つの形容詞と見てつゞけて書く。副詞から來た tôrina に就ても同様。

konoyôna, sonoyôna, anoyôna, donoyôna.

(=konna, sonna, anna, donna);

konotôrina, sonotôrina, anotôrina, (donotôrina).

これ等は、kono, ano 等を離して書いてもよいやうなものであるけれども、此場合の kono, ano 等は kore no, are no と同じ意味で、普通の

kono, ano 等と違ふから、獨立した kono, ano 等の形を與へない方が工合がよい。それで、yôna や tôrina までくるめてそれを各々一つの出來上つた語と見て上のやうに書く。(§293 參照)

209. 代名詞から來た

kono, sono, ano, dono;

korerano, sorerano, arerano;

kotirano, sotirano, atirano, dotirano

(kottino, sottino, attino, dottino)

や、副詞の kô, sô, â, dô に iu, itta, sita のついた

kôiu, sôiu, âiu, dôiu;

kôitta, sôitta, âitta, dôitta;

kôsita, sôsita, âsita, dôsita

なども、konoyôna, sonoyôna, anoyôna, donoyôna と同様な意味の場合には、各々一つの形容詞と見る。

但し、上と同様な文句でも、下のやうな使ひ方では、各一つの形容詞ではないから一纏めには書かない。

1. 「こちらの、そちらの」等、「こつちの、そつちの」等の「こちら、そちら、こつち、そつち」等が或る場所を示す場合、卽ち「こちらにある」等と云ひかへられる場合には、no を離して書く。

kotti no, kotira no, sotti no, sotira no 等。

2. 「かういふ、さういふ」等、「かうした、さうした」等

「かういつた、さういつた」等の iu, itta, sita (site) が「云ふ」「爲る」といふ動詞の意味を明かに持つて居る場合には、それの前で離す。

Kimi wa *sô iu* kara komaru.

Anohito wa *dô itta* ne?

Anotoki boku wa *kô sita* .....

Konomaeno Nitiyô wo kimi wa *dô site* sugosita?

210. 形容詞には i 語尾のもの, na (又は no) 語尾のものの外に、動詞の過去の形と同じ ta (da) の語尾のものがある。上の kôitta, sôitta, âitta, kôsita 等の外、tonda, taisita などは要用な例である。

この外、hutotta, hiraketa のやうな類の多數のものは、-te iru と同じ意味のものである (hutotta=hutotte iru)。

この種類のものには、補ひ語があつて、初めて意味が完全になるものが多い。

Ti no tuita Katana.　*Me no* tumatta Nuno.

いろいろな副詞の次に sita sinai が添うて形容詞の役をして居るのも此節の類と見られる。

hakkiri sita Bunsyô.　hakkiri sinai Iikata.

gudugudu sita Kodomo.　sikkari sinai Ooko.

「はつきりした」などは hakkirisita と一纏めにして普通の形容詞のやうに見ることも出來るけれども、「はつきりと

した」と「と」の挿まつたのになると、一語にするのは寧ろ不適當に感ぜられる。それは多分、「と」がつくと、「はつきりと」が獨立な副詞だといふ氣持が明かになるからであらう。併し此點では、hakkiri も hakkirito と同じやうに獨立な副詞として使はれる (hakkiri kaku, hakkirito kaku など) のであるから、兩方とも離して書く方がよい。又「した、しない」がいろいろ變る場合に、例へば hakkiri sinakereba. hakkiri sasetakatta などと言ふ例を見ると、尙更間をつけることが不適當と思はれる。

Ano Onna wa taihen *hutotte iru* は此類の形容詞の動詞形とも見られるけれども、これは Hana ga kireini *saite iru* などと同じやうな動詞と見た方が適當である。同樣に taihen *hutotte iru* Onna も、taihen hutotta Onna と意味は同じやうでも、動詞 hutoru の副詞形に iru の連體形を添へたものと見た方がよい。又 ni-sannen konokata mekimekito *hiraketa* Mati では hiraketa は動詞の過去の形である。

211. 漢語口調の詞には taru の語尾のものがある。

煌々たる kôkôtaru (副詞 kôkôto)

漫々たる manmantaru (副詞 manmanto)

前節の過去の形 hiraketa を hiraketaru などと云ふのは、語尾は同じでも、ここに云ふのと場合が違ふ。これは ru を省いて ta の語尾にするがよい。

212. **動詞形** (活用形)。形容詞は動詞の役目、卽ち言はうと思ふことを言ひ立てる役目にも使はれる。例へば、

yoi, kireina, hontôno の動詞形は次のやうに使はれる。

Tenki ga *yoi*.

Ano Hana wa *kirei da*.

Kono Hanasi wa *hontô da*.

形容詞の動詞形は、動詞と同樣に、語尾がいろいろに變る。i で終る形容詞の語尾變化は次の通り。

切れる形
- 現在。 yoi.
- 過去。 yokatta
- 推量の現在。 yokarô
- 推量の過去。 yokattarô
- 命令。 yokare! (yoku are!)

續く形
- 接續。 yokute
- 中止。 yoku
- 列擧。 yokattari

條件の形
- 不定條件の現在。 yoito
- 不定條件の過去。 yokattara
- 定條件の現在。 yokereba (yokerya)
- 定條件の過去。 yokattareba (yokattarya)

否定は yoku nai の i を上の通り變化させたもの。只命令形が yoku aruna! となる。

外に、動詞の場合と同樣に、次のやうな形がある。

yoi / yokatta
- darô
- desyô
- rasii
- sôna
- yôna

（離す形）

- yokattakke
- yokarisôna
- yokarubeki

（續ける形）

丁寧に云ふには、副詞形に gozaimasu を添へる (§200)。

213. na (又は no) の語尾のものでは、例へば kirei de aru 又は kirei da 全體を形容詞の動詞形と見る。そのわけは、§198 と同樣に、それが、全體で例へば utukusii といふやうな形容詞一つと同樣で、其間に「きれい」と云ふ名詞の觀念がないからである。

動詞形の形容詞と指定の動詞とを比較するに、例へば

a. Kono Hana wa *kirei da*.——動詞形の形容詞

b. Anohito wa Ekaki *da*.——指定の動詞

語尾變化は兩方全く同樣である (§185 參照) が、只違ふのは、名詞へ續く形 (連體形) で、指定の動詞の

Anohito ga Ekaki *na* koto wo.....

に對して、

Kono Hana ga *kireina* koto wo.....

のやうに na を一方は離し、一方はつけること、及び形容詞の方には副詞形 kireini があることである。

214. konoyôna, sonoyôna 等は、副詞形動詞形共、普通の通りであるが、konna, sonna, anna, donna は少し特別で、konnani (konni とはならない)、konna da (kon da とはならない)、konna datta などと活用する。

215. onazi といふ詞は、文語では i の形容詞になつて居るけれども、口語では、onazii, onazikatta, onazikarô とは普通云はない。「同じ人」「同じ家」などは文語の方の規則から云へば熟語と見るのが正しいやうであるけれども、「同じ」はどんな名詞の前にでも使はれる點など形容詞と同様であるし、又口語としては onazii といふべき語の語尾のつまつたものといふ心持も多少あるやうであるから、少くも便宜上それを一つの特別な形容詞と見て、名詞から離して書くことにして居る、onazi Hito, onazi Ie のやうに。又 onazii に對する副詞形 onaziku は、特別な使ひ途に限られて居る。

副詞形及び動詞形には onazini, onazi da 等の形が普通であり、それに對する形容詞 onazina も使はれる。

216. **形容詞と名詞と兩方に使はれる詞。** Kenkô, Byôki, Baka, Yakkai, Sewa, Zyama, Tanosimi, Osimai の類の語は、na を添へて、kenkôna Toti, kenkôna Karada などの

やうに形容詞にも使はれ、又 Kenkô wo sokonau などのやうに名詞にも使はれる。次に na が來れば、形容詞と定まり、ga, wo, kara などの關係詞が來れば名詞ときまるけれども、次に no, ni, de (da) が來ると、形だけではどちらともきめられない。

byôkino Hito と Byôki no Hito はどちらでも正しい。普通の心持は前の方に當つて居るやうであるけれども、「重い病氣の人」といふときには「重い」が「病氣」にかかつて居る形容詞の形を持つて居るから、どうしても

omoi Byôki no Hito

と書かなくてはならない。

同様に

A Kun wa Baka (名詞) da.

A Kun wa baka (形容詞) da.

はいづれも正しいが、yoppodono (形容詞) をつければ

A Kun wa yoppodono Baka (名詞) da.

と書かねばならず、yoppodo (副詞) をつければ

A Kun wa yoppodo baka da (形容詞)、

としなければならない。

ni を添へた形についても同様で、

Zyama (名詞) ni naru.

zyamani (形容詞の副詞形) naru.

何れでもよいわけであるが、前に句がつけば、

Hito no (形容詞句) Zyama ni naru.

Hito ni (副詞句) zyamani naru.

と書き方も分れて來る。[尤も副詞句が前に來ても其次を Zyama (名詞) ni として惡いといふ絶對的な理窟はない。Zyama ni といふ副詞句を形容するものとすれば、それの前を副詞句にしてもよいわけである。併し、zyamana といふ形容詞に對して zyamani といふ副詞が認められる以上は、それですむ處を Zyama ni といふ句にする謂れがない。]

Gotisô ni naru の類の「御馳走」は全くの名詞と見るべきであらう。

副　詞

217. 副詞には

(1) 形容詞の副詞形。

uresiku, yukwaini などや、

(2) 動詞の續く形、卽ち

osite susumu,

kangaezuni hanasu,

kangaenaide hanasu.

の osite, kangaezuni, kangaenaide のやうな形の外に、

(3) 本來のもの、

sukosi, takusan, sudeni, mottomo, tada, hanahada, sukoburu の類、

(4) その外いろいろな語から轉じたもの、

zentai, tokorodokoro, amari, sasiatari, itiban, tokidoki, kekkyoku の類。

(5) 「と」のついた副詞で纏まつた一語と見るべきものは to を前へつけて書く。

onoduto, tyanto, kitinto, sikkato.

「と」を省いても副詞として使はれるのもある:—

sikkarito, bon'yarito, kittirito, sizento.

(6) 同じく「と」を添へて(又は添へないで)云ふのに、音や樣子をまねた語(擬聲詞)があるが、それは to を離して書く方が適當である。pikari to, poturi to, bôbô to, ponpon to, pikapika to, gorogoro to.

218. 名詞や代名詞から來た「時の副詞」、

konotoki, sonotoki, anotoki, arutoki;

itu, itumo, ituka;

kyô, kinô, ototoi, asu, asita, asatte, konban, yûbe;

kongetu, raigetu, sengetu; kotosi, kyonen, rainen;

mainiti, maiban, maituki, mainen;

ima, mukasi, syôrai, genzai.

これ等を副詞とするわけは、次に關係詞を置かずに使ふ

のが普通だからである:— A Kun ga *asu* kuru; *kotosi* kono Sigoto wo siyô; *syôrai* hattensuru darô.

此等の語は、次に關係詞が來ても、意味が普通の場合と同樣ならば、矢張副詞（名詞狀に使はれた副詞）として小文字で書く:—kyô kara asu made; mukasi nimo.

尤も ima, mukasi, syôrai, genzai などは、場合によつては本當の名詞と見る方が適當なこともある、例へば

Mukasi wo omou; Ima wo kangaeru;

Syôrai wo omonpakaru.

「朝、晝、夜、午前、午後、春、夏、秋、冬」などは、通常の名詞として、——時に副詞狀に使はれる場合でも——大文字で書く。

Asa okite.....

kono *Natu* sotira e mairimasu.

「今日、昨日」等は副詞として小文字で書き、「朝、春」等は名詞として大文字で書くといふ差別を立てるのには、絕對的な理由はない。只「今日、昨日」等は副詞として使はれることが最も多く、「朝、春」等は名詞として使はれることが最も普通だといふだけであるが、實際上も上に出した邊で差別を立てるのが、心持に適して居るやうである。

219. tame(-ni); giri, gurai(-ni), bakari(-ni) dake(-ni), hodo(-ni), tôri(-ni) dôri(-ni); nagara, tutu, sidai(-ni), sama, gatera(-ni); toki(-ni), koro, kekkwa, sue(-ni), ageku(-ni)

などは補ひの語を要する副詞と見る（下の文例で、斜な字體が補ひの語）。 toki, kekkwa などを副詞と見るわけは、前節と同じく、それが關係詞なしで使はれるからである。そして、それと同じ心持で云ふときには、「に」其他の關係詞があつても矢張副詞と見て小文字で書く、特に ni の添うたのは ni を前へつけて書く。

Hon wo yomi nagara. *Hon wo yomi* tutu.

Taku e kaeri sidai (sidaini).

kô ii sama abare-dasita.

Sanpo gatera, 又は *sanpo* gatera.(*)

Obosimesi dôrini. *Ohanasi no* tôrini simasita.

anotoki giri dete konai.

miageru guraini (bakarini, hodoni) ôkii.

zimansuru dake aru.

otyaku no tokini. *otyaku* no toki kara.

seimituna Kenkyû no kekkwa, kôiu Koto ga wakatta.

茲に云ふ bakari, gurai, dake は、皆 hodo と殆ど同樣な意味を持つ場合のもの、又 giri は giri de と云つてもよい場合のものである。これ等は又廣さ詞としても使はれる(§246)。

(*) Sanpo は名詞と見ても sanposi の略の動詞の名詞形と見てもよい。

§207 に出した rasii, yôna, hûna, anbaina, guaina などの副詞形もこの類である。

補ひの詞が完全な文章（節）になれば、玆に副詞と稱へて居る詞は自然に接續詞だといふことになる。

koregiri, koregurai, korebakari (koreppakari), koredake, korehodo, konotôri, sonotôri 等は各一語に書く。

220. 特別な副詞に、名詞に -yoku, -waruku, -naku, -nasini をつけたのがある。例、

ikioiyoku, genkiyoku, kimotiyoku, gokigen'yoku, un'yoku, unwaruku, sikatanaku, sôinaku, yonennaku, nanigokoronasini, sikatanasini.

これらに對する形容詞は Genki no yoi, Sikata no nai, Un no warui のやうな形になる。尤も、sôinai, yonennai などとも云ふ。

221. 副詞には、no 又は na がつくと形容詞になるものが多い。

sukosino, takusanna, angwaina, tatimatino, mattakuno, sekkakuno, motokarano, sukoburuno の類。

補ひ語を要するのでは、

Mono wo tabe *nagarano* Hanasi ; Sanpo *gaterano* Kaimono ; miageru *bakarino* (*hodono*, *guraina*) Ookisa ; mita *tôrino* Hanasi ; zimansuru *dakeno* mono ; sôiu *tameno* Yôi の類。

補ひ語まで一語にしたのは

koregirino, koreguraino, koreppakarino, koredakeno, korehodono, konotôrino, sonotôrino, anotôrino 等。

222. 時の副詞に no を添へたのは no の前を離す方が適當と思はれる。尤も、「今の、昔の、將來の、現在の」は、性質を表はすやうな場合には全くの形容詞と見て imano, mukasino, syôraino, genzaino と書いてもよい。

kinô no Hanasi. sonotoki no Dekigoto.

ima no Hito. Syôrai no (又は syôraino) Sensô.

數　詞

223. 凡て數詞は、hitotu, hutatu, mittu.....kokonotu, tô, iti, ni,.....などと字で書くのが正式である。

それには、一から九まで、何十といふ數、何百といふ數、何千といふ數、何萬といふ數、など一つの位を表はすものを各々別々に一まとまりにし、その間につなぎ (-) を入れて書くがよい。尤も「何十何」は間につなぎを挿まないでつづけて書いてもよい。

nizyû-iti (nizyûiti), sitizyû-go (sitizyûgo), sanbyaku-rokuzyû-go, goman-nisen-happyaku-kuzyû-roku, hassen-sihyaku-sanzyû-goman.

などと書く。理窟の上では、つなぎなしに續けて書いてよ

いわけであるけれども、つなぎを入れる方が讀むのに便利である。又、便宜上つなぎを省いて離して書くといふことも考へられるけれども、例へば二千三百六十六本が

nisen sanbyaku rokuzyû roppon

となると、二千と三百と六十と六本との四つの語のやうに見えるのが變に思はれる（さうなつてはわるいといふ理由もないけれども）。實際上は、十萬以上の數で下の方まで數字のある數では、億の次、萬の次などで離すのがよかりさうである（さうすると「何千何百何十何萬」と「何千何百何十何本」とが別になるけれども、かう長いのになつては止むを得まい）。

224. 何人、何本、何冊、何日、何ヶ月、何年等の nin, hon, satu, niti, kagetu (tuki), nen 等は前につづけて書く。

外國語では、かういふ語は名詞として離して書くのが例であるけれども、日本語ではこれ等は名詞ではなくて、「助數詞」と稱へて、前に來る數と一緒になつて初めて數詞になつて居る。のみならず、例へば hon が pon になつたり、bon になつたりする點を見ても、それを獨立に書くのが不適當と思はれる。

sannin, gohon, tôka, hyakuniti, rokkagetu, issennen, sanmanbon, sanman-sanzyû-ippon.

225. 「三人」の「人」が英語の three men の men と

は違つて名詞でないことは、「人が三人居ます」といふのが普通の言ひ方で、「三人が居ます」とは云はないので知れる。尤も「人が五人居て、三人は立つて居た」のやうな場合には「三人」が名詞狀に使はれて居るけれども、それは前に Hito と云ふ詞が出で居るために「三人」の處ではそれを略してあるのである。

「三博士、五中尉」のやうなの(*)は、「誰々の五中尉が居た」と云つて、「博士が三博士居た」とはいはないので知れる通り、上の「三人」の云ひ方とは資格が違ふ。「三博士」の博士は名詞であるが、「三人」の人は名詞ではない。

226. 長さ、升目、目方、金高などの單位を示す言葉も矢張り前へつけて書く。違ふ單位の數が續くときには、間を離す。

issyaku ; niken gosyaku sisun ;

issyô ; sando hassyô gogô ;

nizyûmonme ; gokwan sanbyakume ;

nizissen ; sanzyû-hassen.

227. 金高の圓だけは特別扱ひにして離して大文字で書く。三圓拾八錢を

san En zyû-hassen.

これは、金高は人に利害關係の特に多いもので、目立つ方

(*) これの書き方は §242 にある。

が望ましいのに、en は普通以上に目立たな過ぎるし、前に s を書き込めば錢に變るなどで不都合だからである。幸ひ圓は音便で變ることがないから離して書いて差支へることがない。

「圓」には外國語方面で使はれて居る yen といふ綴りがあるけれども、ローマ字では ye といふ綴りを使はない（§33）。

228. 大凡の數を云ふのに、「五六本、二三百、五千三四百」などと云ふ云ひ方がある。これは

go-roppon, ni-sanbyaku, gosen-san-sihyaku

などと、間につなぎを入れて書く。

229. 數詞には算用數字を使つて便利なこともある。併しローマ字文の初學者には一般に算用數字を使ひ過ぎる傾がある。「一度逢つた人」を "1 do atta Hito" と書いたり、「何十錢」を "nan 10 sen" 「一般に」を "1 panni" と書くなどは劇しい例であるが、それ程でなくても、"Kasa wo 1-pon" とか、"Kami wo 3-mai" とかいふのは、不體裁で殺風景である。大體のきまりとしては、

文章の中では、年月日、番地、品物の番號、物の數を澤山並べ立てる場合の類の外は、十以下の數を數字では書かないことときめるがよい。

十以上の數でも、何十何といふ數や gohyakunin, sanzenbon などのやうに簡單にいへる數は字にした方がよい（數字でもよいけれども）。

230. 數字に助數詞の添うたのは、2566-nen のやうに間につなぎを入れるのが正式である。

便宜上 2566 nen のやうにつなぎを省いて離して書いてもよいけれども、數の次に音便の變化のある場合には、つなぎを省いてはならない。

2566-pon,　3000-bon.　3-400-pon.

231. 算用數字に略字を添へる時には、此略字の前を離し、音便にかまはず書く。三尺八寸を 3 sk. 8 sn. のやうに。これはつまり sk. sn. などを符牒として見るからである。

232. 何年、何月、何日が「何ヶ年、何ヶ月、何ヶ日」の意ならば、小文字で書くが、日附ならば、各々只一つの年、月、日の名になつて居るから、名詞と見て大文字で書く。

大正七年十月三十日を

Taisyô Sitinen Zyûgwatu Sanzyûniti.

略して　Tsy. 7 n. 10 gt. 30 nt.

233. 午前、午後の「何時」も各々一つの時刻の名であるから、大文字で書くが、その下の「半」や「何分」などは分量を表すものと見て小文字で書く。

午前十時半　Gozen Zyûzi han.

午前十時十分　Gozen Zyûzi zippun.

午前十時十分過(前)　Gozen Zyûzi zippun-sugi. (-mae)

尤も分などは大抵數字で 10-pun-sugi などと書いてよい。

234. きまつた年月日時でなく、問ひの「何年」、「何月」、「何日」、「何時」なども同樣で、日數、時間數でないのは大文字で書く。

Ima wa Nanzi desu ka?

235. 何割、何倍などは次のやうに書く。

go-wari, hyaku-bai.

236. 分數は「何分の」を形容詞と見て nizyû-sanbunno san (23-bunno 3) のやうに書く。

237. 普通の數詞は、詞の役目としては副詞樣に使ふのが本體で、他に名詞樣と形容詞樣に使ふことがある。

Hon ga *zissatu* aru (副詞樣)

zissatu aru Hon ga.....(,,)

sonouti *zissatu* wa.....(名詞樣)

zissatuno Hon wa ôkuwa nai ga,.....(形容詞樣)

no の添ふ形に就いては §240 を見られたい。

238. 順序を表はす幾つ目、何番、第幾つ、第何番、何番目、第何番目などは次のやうに書く。

sanban, daisan, daisanban, sanbanme, daisanbanme

これを名詞として使ふのに、只「何番」といふだけでなく、或る特別なものを考へて言ふときには、大文字で Sanban, Daisanbanme などとする。家の「何代目」、雜誌などの何

號、第何號などは通常、名詞として使はれるのであるから、

Sandaime, Daisandaime.

Sangô (3 Gô), Daisangô (Dai 3 Gô).

239. dutu, gotoni, okini などは離して書く。

120 dutu, sannen gotoni, sannen okini.

240. 數詞に no が附いて形容詞になるのは、no をつづけて書く。

hitotuno Katamari, hitorino Hito, ippikino Inu, senbonno Hasira; itibanno Hito; Sekai de daiitino Tokwai; sekai-itino Yama; daiitigôno Hon (又は Daiitigô no Hon)、

但し、長さ、目方、升目、金高などには、no をつづけない。

sanzyaku-gosun no Bô,

itiri no Miti,

sen En no Kane.

又子供などの年を添へて「六つの太郎」「三つのやつちやん」などの「の」は上の場合と違ふことは勿論で、

Tosi ga muttu no Tarô. kotosi mittu no Yattyan.

241. 上のやうに、長さ、目方、升目、金高などでは no の前を離し、只の數では no をつゞけるわけは次の通り。

第一に、心持から云へば、長さ金高等では「それだけの

分量」といふ觀念が別にあるのが通常であり、只の數では「いくつ」といふ觀念を品物を離れて別に持たないのが普通である。例へば「千圓といふ金」「三尺だけの長さの棒」とは實際にもいふけれども、「三枚だけの數の紙」とは普通に云はない。又「長さ三尺の棒」とは云ふが、「枚數三枚の紙」とはいはない。sanzyaku no Bô, sanmaino Kami とするのは、かういふ差に當つて居る。

第二に、書き方の實際について見るに、數の方では、はしたのないのが普通であるのに、長さ、目方、金高等では、何尺何寸何分、何圓何十何錢といふことが普通である。iti En sanzyûgosen gorinno Kane もおかしく、iti-En-sanzyû-gosen-gorinno Kane も餘りくだくだしいので、no の前を離すことが殆ど必要である。數の方では hitotuno Isi, hutarino Hito などは no をつづけて書くのが自然的である (§128 に出した例參照) し、zyûsanmaino Kami, 235-honno Hude など大きな數になつても別におかしくない。

Kamikazu 230-mai no Hon, nimannin no Guntai などは、「紙 230 枚で出來て居る本」「人二萬人で出來て居る軍隊」の意味で、「本」「軍隊」の數を示すのでないから、no を離す。

242. 漢語口調から起つた言ひ方に「三博士」「五大尉」などといふことがある。これは數詞ではない (§225)、「三人の博士」「五人の大尉」を略したので、數詞に名詞の合したものである。それ故に、その儘を書けば、san-Hakusi, go-Taii のやうに(又はつなぎを略して san Hakusi, go Taii と) 書く筈であるけれども、斯ういふ云ひ方は善い日本語でないから、成るべくは正しく、sanninno Hakusi, goninno Taii などと書くべきである。

廣さ詞

243. 廣さ詞は接續詞と呼びかけ詞を除いた外のいろいろな語の後に添へて、その語のどれだけの範圍を意味して居るかを示す語である(*)。例、Kodomo *dake* ni ; anata ni *dake* ; nete *bakari* iru ; mittu *nari* yottu *nari* ; yoku *sae* nareba などの dake, bakari, nari, sae 等。

244. 主な廣さ詞は次の通り。

a. bakari, dake. demo, dewa, giri (kiri, kkiri), gurai (kurai, kkurai), ka, koso (kosowa), nado (nando), nanka, nari (narito, naritomo), sae (saemo).

b. mo, wa.

c. hoka, sika.

(*) 廣さ詞と §147 の「附添ひ名詞」の二との差は、廣さ詞はここに云ふやうに種々の語や句の次に挿むことの外に定まつた形式なしに使はれるに反し、「附添ひ名詞」の二は名詞の使ひ方で使はれるときまつて居る點にある。

d. demo, ka, nari, to, ya, yara.

e. aruiwa, matawa, narabini, oyobi.

a は普通の廣さ詞。中で ka は、"dare ka ni", "doko kara ka" のやうな場合の ka である。

b は場合によつて前の詞へつづけて書くもの (§247)。

c は必ず後に否定の語の來るもの。

d は同種類の語を二つ以上並べるときに間に使ふ、最後にも置くことがある。

e は同種類の語を二つ以上並べるときに、間に又は最後の語の前に置くもの。

245. 廣さ詞の要用な性質は、大抵の場合に、それを省いても語の筋が通ることである。但し、名詞、代名詞の次にそれが來て、それの次に關係詞の來ないこともあるが、これは ga 又は wo といふ關係詞の代りに使はれてゐると見るべき場合で、此場合には、廣さ詞を省くと同時に ga 又は wo を入れねば語の筋が保たれない。又上の d e の種類で同種類の語を二つ以上重ねて使ふ場合には、廣さ詞を省いて文句を作るには、同時に、同種の語を一つだけ殘し他を省いて見ねばならない。

Watasi *wa* Gakkô *nado* de Sake *nado* nomimasen.
(廣さ詞を省けば、Watasi ga Gakkô de Sake wo nomimasen.)

Koko kara *dewa* mienai.

Koko kara *demo* mienai.

Akaku *demo* aoku *demo* narimasu.

(廣さ詞を省けば Akaku narimasu.)

Kyôto kara *to* Sendai kara *to* kimasita.

注意。關係詞にも (§158) 接續詞にも (§252) to がある。

246. 上に出した廣さ詞の中で、bakari, dake, gurai, giri は副詞としても使はれる (§219)。副詞の bakari, dake, gurai は hodo と同樣な意味である。廣さ詞の bakari と dake は文語の nomi と同樣な意味のもの、gurai は「他は兎に角、何ぐらい」と云ふ意味のもので、兩種類全く違ふものである。又 giri は、副詞のものは giri de としてよい場合、廣さ詞のは nomi と同樣な場合である。四つの語とも、廣さ詞である場合は、前節の性質からでも見分けがつく。例へば

Kakureta giri (副詞) dete konai.

watasi giri (廣さ詞) ni kudasai!

前の方は giri を省いては文章にならないが、後の方は giri を省いても文章になる。

247. 廣さ詞は一般には獨立させて書くが、只 wa と mo とだけは、それが關係詞 (no を除く、§165)、接續形の動詞、接續形の形容詞、副詞、又は他の廣さ詞（これは名詞

生の語に續く場合（§249 の 5, 6, 7）を除く）(*) の次に來る時には續けて書く。

niwa, nimo, karawa, karamo, madewa, mademo, 等；
kaitewa, kaitemo, kakanaidewa, kakanaidemo；
yokutewa, yokutemo, kirei dewa, kirei demo；
yokuwa, yokumo, kireiniwa, kireinimo；
yokoni dakewa okeru ga,……(dake と wa をつける)
watasi dake wa……(dake と wa とはなす)。

「東京から京都までは 150 里ある」は二通りに書ける。

a. Tôkyô kara Kyôto madewa 150-ri aru.
b. Tôkyô kara Kyôto made wa 150-ri aru.

a は「東京から京都まで 150 里ある」へ wa のついたので、Tôkyô……madewa が普通の副詞句である。b は「東京から京都までが 150 里ある」の ga が wa に變つたので、Tôkyô……made が名詞の役をして居る副詞句である。

248. 上のやうな連絡のときに、wa と mo に限つて前へつづけて書くのは、主として便宜上のことで、絶對的の理窟はない。他の廣さ詞は離して書くのだから、wa と mo も離してもよいわけである。只 wa と mo は、(1) 特に多

(*) 名詞につづく場合を除く理由は、例へば watasi dake wa の wa は ga に代つたものだ（§165 の但し書）と見るからである。

く使はれる、(2) ga 又は wo に代る場合の外、文章の文法上の連絡の爲には、それが獨立の語として見える必要がない（§245）、(3) 他の dake bakari などに較べて短い爲に、他の語に續けて書いても目ざわりにならない。然るに (4) 一方では、それを離して書くと、關係詞（ga 又は wo に代つた場合）のやうに見えて、文章を見て了解するのに工合がわるい。これ等の理由から、wa と mo だけは、差支ない限り前につづけて書くことにして居る（§165の終の項參照）。且つ實際上にも、それが都合がよいやうである。

時の副詞と數詞とには、wa と mo をつけない方が工合がよい。

249. 廣さ詞が他の語につづく工合に二通りある。

a. 副詞の役目をする語や句に續く場合。
b. 名詞の役目をする語や句に續く場合。

a のうちには、ぢき前の語が

1. 副詞の場合、waruku sika dekinai.
2. 動詞の場合、nete bakari iru.
3. 關係詞の場合、watasi ni dake saseru.
4. 數詞の場合、sen demo nisen demo.

b のうちには、ぢき前の語が

5. 名詞の場合、Tori bakari totte iru.
6. 代名詞の場合、watasi dake ni saseru.

7. 動詞、形容詞の切れる形の場合、akarui dake ga Torie da.　mita dake dewa dame da.

などがある(*)。稍變つたのは、

8. 動詞に使ふ特別な組立、naki nado simasen!

この 8 の場合は簡單な動詞に廣さ詞の觀念を挿むときに使ふ形である。卽ち例へば nakumai, naita, nakanai 等に wa, mo, nado 等を挿むには、動詞の名詞形 naki の次に廣さ詞を置き、終りに suru のそれぞれの形 sumai, sita, sinai 等を使ふのである。

naki wa sumai, naki mo sita, naki nado sinai 等。

二字の字音動詞や他の「何々する」と云ふ形の動詞をこのやうに使ふときには、名詞形に si が付かない (§ 192)。

Ongaku wo benkyô nado suru mono desu ka?

250. 廣さ詞に形容詞の語尾 na 又は no のつくのに次のやうな場合がある。

a. 廣さ詞の bakari, gurai は na (又は no) がついて「補ひを要する形容詞」になる。

Ki *bakarino* Yama.

(*) 尤も、凡ての廣さ詞が是等凡ての使ひ方に使はれるとは限らない。例へば、多くのものは、watasi dake ni, watasi ni dake のやうに兩樣に使はれるけれども、wa, mo, koso, sae, dewa, demo, narito は名詞と關係詞の間に挿まれる形では使はれない。

sikarareta *guraina* koto de.....

これ等と同じ形のものは副詞から來た形容詞にもあるが、ここのは意味がちがふ (§ 219, 221, 246)。

Kono Yama wa Kusa bakari da のやうな文章では bakari は廣さ詞のやうに見えるけれども、bakari da は bakarino といふ形容詞の活用である。だから bakari を省いては意味をなさない。

b. 不定數詞を形容詞形に使ふ場合に語尾 no の前に廣さ詞 ka を挿むことは普通に行はれる、「何人かの人」「いく軒かの家」「何百本かの木」などのやうに。これ等に於ける no は形容詞語尾であるから、それを獨立させて書くのは、見た氣持から云つても適當でない。それ故、

nannin kano Hito,

ikuken kano Ie,

nanbyappon kano Ki

と書くのが適當と思はれる。但し、數詞で no を離す場合 (§ 240 の後の方の場合) を上のやうに云ふときには、矢張 no を離す方がよからう。

sanzyaku nanzun ka no Nagasa.

nan En nanzissen ka no Kane.

稀に使はれる言ひ方に「何人もの人」「幾軒もの家」とい

ふのがある。これも上に準じて、nannin mono Hito, ikuken mono Ie などと書く。

接　續　詞

251. 接續詞は文章を起し又は下につづける語と定義したい。これには mata, matawa, aruiwa, sate, oyobi, nao, naraba などは勿論、色々な詞の組み合つたものでも、一つの接續詞の役をするものは一つゞけに書くことを原則とする。

sôsite (sosite), sôsuruto, sonoue, sorekara, tuitewa, zituwa, sikaruni, sikasinagara, tokoroga, tokorode, daga, dakara など。

併し、本來幾語かで出來て居る接續詞で、餘り長くなるものは、本來の句の成立を參考して適當に分けて書く。

de aru kara, sore da kara, towa iu monono, samo araba are 等。

nominarazu, sikanominarazu, sikasinagara などは分けてもよいやうであるが、習慣は多分つづく方になるだらう。

252. 接續詞はそれの使はれる位置によつて二つに分けられる。

A. 文句の初めに來るもの:——

これには、文章全體に關係する副詞の性質のものもあるが、それ等は普通の副詞と使ひ方が違ふし、且つ文章を起すといふ性質が著しいから、やはり接續詞に入れたい。

aruiwa, daga, dakara, datte, de, de aru kara, demo, dewa, gwanrai, ittai, kekkyoku, keredomo, mosimo, mottomo, sikasi, sokode, sôsite, sôsuruto, sore da kara, sorede (-mo, -wa), soreni, soretomo, soreyueni, suruto, tokorode, tokoroga, tonikaku, yueni, zituwa.

此類の接續詞の前に外の文句が來て切れて居るときは、大抵それの終りを大句切り (;) で切るのが具合がよい。

Kyô wa Tenki ga yoi ; sikasi, Kaze ga tuyoi.

B. 文句の終りに來るもの:——

ageku, bakarini, ga, kara, kekkwa, keredomo, monode, monono, nara, naraba, nareba, ni, node, noni, si, sue, to (-mo, -wa), tokini, tokorode, tokoroga, tôri, ue, uede, ueni, utini, yôni.

此うち、nara, naraba は、指定の動詞では動詞を兼ねるし、又 na の形容詞では形容詞の一部分と見る。

これ等が接續詞として使はれる場合の例は、「何々した」又は「何々する」と云ふ文句を前に置いて見れば知れる。其うちで注意すべき點を擧げると、

ga :—"Itte mita *ga*, dame datta" の ga は接續詞だけ

れども、"Itte mita *ga* yoi" の ga は名詞節を受けた關係詞である。

ni:—ni は anohito no ossyaru *ni*,.. ...のやうな ni.

node, noni:—node は「爲に」のやうな意味の場合、noni (ni) は「に拘らず」のやうな意味の場合である。「ので、のに」の no が不定代名詞 (§157e) である場合には、no を離す。

to:—人の云つたことなどの終りに置いて、それと後の文句との關係を表はすのが接續詞の to である。例、Diki kaeru *to* itte kimasita.

もう一つ tomo と同じやうな意味で次のやうな特別な云ひ方の to がある、これも接續詞である。

Dô narô *to* kamawanai.

yukô *to* yukumai to.....

yukazu *to* yokarô.

同じく動詞の切れる形につづく to でも、yuku to kaeru to wa tigau の to は廣さ詞である。又「行けば、よければ」と同樣な意味の「行くと、よいと」の to は條件の -to で、これは前へつづけて書く (§181)。

253. その外に動詞、形容詞の活用の一部として、接續の用をする語尾の形は、

kakeba, yomeba (eba を ya に訛つて kakya, yomya

ともなる) の -ba;

kaite, yonde の -te, -de;

kakuto, yamuto (sô dato yoi の dato もこれ) の -to などである。

呼びかけ詞

254. 呼びかけ詞は次の三種類に分けて見られる。

A. 獨立なもの:—— Aa, Ano nê, Ara, Are, Dokkoi, Dore, Dorya, Ei, Hahâ, Hai, Hatena, Hei, Hora, Ie, Iya, Iyô, Kôtuto, Kora, Kore, Korewa-korewa, Mâ, Mosi, Mosi-mosi, Nâni, Naruhodo, Oi, Oi-oi, Oo, Oya, Oya-oya, Sâ, Sâsâ, Sorewa-sorewa, Yâ, Yare-yare, Yô.

これ等の呼かけ詞からすぐ文章へ續く場合には間に句切り (,) を置き、さうでない場合には呼ぶしるし (!) を置く。

B. 文の終りに來るもの:—— 問ひの ka? kai? dai? mon'ka? koto? no? 其他の na! nâ! ne! nê! ka nâ! zo! ze! sa! yo! ya! wa! tomo! mono! koto! no!

C. 文章の中途に插むもの (これには呼びかける氣持の目立たないものあるけれども、便宜上これに入れる):—— ano, ê, haya, mô, nâ, ne, sa, sono, yo.

255. 動詞の語尾になつて、呼びかけを作る添へ詞は命令の語尾 (§175, 176) である。即ち、

命令の(*) -ro, -i, -yo, -na.　(例 mii! miro! miyo! mina!

否定命令の　-na (例 miruna!),

[否定命令の -na と前節の na とを混同してはいけない。

miru na!=miru ne! miru nâ!

miruna!=mitewa ikenai.]

命令形の次には、英語流では！を置かないのが普通であり、獨逸流は置くのを規則にしてあるが、兎に角呼びかけるのに相違ないから、日本文では必ず呼ぶしるし (!) を添へることにきめたい。英文の習慣だと！をつけるのは餘り際立つて激しいやうに感ずるらしいけれども、單に「呼ぶしるし」といふ習慣がつけば、そんな嫌はなくなる。

文章の組立

256. 文章は「題目」の部分と「言立て」の部分とで出來て居る。

Hito ga *kuru.*
題目　言立て

257. 題目は名詞又はそれに代る語(代名詞、副詞など)、又は終りに no のついた句又は節を主な部分とし、それに ga 又はそれに代る廣さ詞がついて居るのが普通である。尤も丸で省かれることもある。

(*) 五段の動詞だけは特別な添へ詞なしに命令の形になる (§175)。

Watasi ga yuku.

Sore kara ga daizi da.

Zi wo kaku no ga okkû da.

Watasi ga itta no wa sore da.

(*Watasi wa*) Itte mairimasu.

名詞には形容詞性の語句節が添ふことがある。

Ookina Inu ga iru.

Watasi ga tukutta Hon wa sore desu.

258. 言立ては動詞又は動詞形の形容詞であるのが簡單な場合であるが、それが副詞性の語句節を持つて居ることや、補ひ語を持つて居ることや、複雜な組立を持つて居ることや、節で出來て居ることなどもある。

Kono Hon wa *yoi.*

〃　〃　〃 *taihen yoi.*

〃　〃　〃 *watasi ga katta no yorimo yoi.*

〃　〃　〃 *yokute katu yasui.*

〃　〃　〃 *Insatu ga senmei da.*

此最後の例のやうなのでは、人によつては Kono Hon wa を「總主格」又は「文主」などと稱へ、Insatu ga を普通の題目のやうに見るやうであるが、私はさういふ特別な見方をしないで、單に Kono Hon wa を題目とし、Insatu ga senmei da を節になつて居る言立てとするが適

當だと思ふ、(Insatu gaは單にその節の中の題目である)。これは上と同じことを次の形に言ひかへて見ればよく分る:——

Kore wa Insatu ga senmeina Hon da.

第五章　ことば及び言ひ方

ローマ字文を書くときの根本の方針

259. ローマ字文を書くときに一番氣持のよいことは、素直な本當の日本語をそのまゝ遠慮なしに書けることである。ローマ字文を書き慣れて居て、たまに漢字交り文を書くと、始終漢字のあて方——字の形の思ひ出せないのは別としても——について障害物につき當る感じがする。現に此一つの文章でも、「たまに」を「稀に」と書いてよいかわるいか、「あて方」を「宛て方」とするか「當て方」とするか、「ついて」を「就いて」とするか、「つき當る」は「衝き當る」か「突き當る」かと云ふ處でつき當つて居る。漢字交り文ばかり書いて居る人は、此「つき當り」に慣れて居るために無感覺になつて居るけれども、ローマ字文をいくらか、書き慣れると、この違ひがよく感ぜられて、漢字交り文を書くことの不自然さが知れる。

書いた上の形を見ても、若し今私が書いて居るやうに、なるべく素直な日本語をそのまゝ書かうとすると、動詞、形容詞、名詞、副詞のやうな詞でも假名で書くのが多くな

るために（「たまに」「つき當る」「いやに」の類）、語の切れ目が見えにくくなつて、いやなものである。この點を見よくしようとすると、自然「稀に」「衝突する」「不愉快に」などと言葉を取りかへて書くことになる。これは素直な日本語の擁護の上から見ても、甚だ好ましくないことである。

上に述べたのは、漢字交り文の方面から見てのことであるが、かういふ點は特にローマ字の特長を揮ふべき點であるから、ローマ字文を書く時には、それの優れたかういふ點を育て上げるやうにしなければならない。

260. 上の通りであるから、ローマ字文を書くときに、先づ漢字交り文で書き、（又は書かないまでも漢字交り文で文句を考へ）、それをローマ字で書き直すといふやり方は、ローマ字文を殺すやり方である。

ローマ字文は、是非、自分の自然のことばを其儘直接にローマ字で書かなければいけない。

ローマ字文の書き始めには、このやうにしようとすると、勝手がちがふ爲に一寸まごつくことがあるけれども、この方が自然に合つたやり方だから、ぢきにそれに慣れて、ローマ字文を書くことの氣持よさ、漢字交り文の不自由さを、しみじみと感ずるやうになる。

そして此方針で進むことによつて始めて日本文の正當な自然の發達が得られるのである。

こ　と　ば

261. 上の方針に從つた詞の選び方の例を擧げると、

aruku（「歩行する」と言ひかへるに及ばない）

hairu（「入學する、入院する、入營する」と
hayaru（「流行する」と
uturu（「傳染する、感染する」と
tatiagaru（「起立する」と
tamani（「稀に」と
iyani（「嫌ひに、不愉快に」と
sukini（「好むやうに」と
suguto（「直に」と
suwaru（「着席する、著座する」と
komaru（「苦しむ」
konareru（「消化する」と
yasasii（「容易に」と
言ひかへるに及ばない）

dikini（「直に」を tadatini と
sukeru（「助ける」を tasukeru と
itu（「何時」を nanzi と
讀まれる懸念がいらない）

hidoi（「酷い」で
mudukasii（「難かしい、六かしい」で
kimaru（「極まる、定まる」で
首をひねる必要がない）

wakaru (「判る、分る」で
Sirusi (「印」か「標」かで
yoi (「善」か「良」か「好」かで
} 首をひねる必要がない)

262. 口語の漢字に困らないに拘らず、文語流の詞が使はれる場合もある。これも、特別な理由がない以上、實際の口語に使ふ方を書くべきである。

tukau (「用ひる」は
kiku (尋ねる意味の「問ふ」は
tanomu (「乞ふ」は
taihen (「大に」「甚だ」は
ôkii, ôkina (「大なる」は
} 文語體のことば)

此外多く使はれる文語體のことばには、yori (§285), nite (§285), gotoki (§279), gotoku (§280) などがあるが、「言ひ方」の部類として後に出す。

263. 漢語の言ひ方が口語として無理ではなくても、同じ意味の素直な本來の日本語があるときには、多くは本來の日本語の方がよい。

「說明する」でもよいが、tokiakasu が尙よい。
「通行する」よりは、tôru, yuku, tôriaruku がよい。
「反射する」よりは terikaesu (さういへる場合なら)。
「努力する」よりは tutomeru.
「盡力する」よりは、Tikara wo tukusu, Hone wo oru.

「周旋する」は、torimotu ともいへる。
「修繕する」よりは naosu, tukurou.
「使役する」よりは tukau, oitukau.
「以來」よりは konokata.
「在來」よりは koremade.
「本來」よりは motoyori, motokara, motomoto.
「多少の」よりは ikurakano.
「嚴肅な」「莊重な」よりは、ogosokana, omoomosii.
「價値」よりは Neuti.

264. 漢語よりも本來の日本語を選ぶとする時に、少し都合の惡いのは抽象名詞である。抽象名詞は現在多く漢語(例へば漢語動詞の語尾の suru を省いた形)になつて居るが、本來の日本語では、動詞の名詞形(中止形)や、形容詞の語根或はそれに「さ」「み」「げ」などをそへたものを抽象名詞に使ふことが出來る。これは現在でも多少使はれて居るから、それをもつとおしひろめ使ひならして行けばよい。

Takasa, Nagasa, Omomi, Hukami, Kawayuge, Nikuge; Osi, Isogi, Masi, Moti, Kaeri, Aruki, Sozoroaruki, Yomi, Yomikaki.

265. 上に述べたのは、元來の日本語で適當な語のある場合に、漢語を使はない方がよいといふだけのことで、强

いて漢語を排斥するといふ意味ではない。口で云つて紛れない漢語ならば、書いても差支ない。

266. 漢語、殊に短い漢語には音が同じで意味のちがふ語が多い。それを言ひ分ける方法は各の語について考へなければならないが、次のことは一般に注意すべきである。漢語でも本來の日本語でも、あまり簡單な語よりは少し長い語の方がまぎれなくてよい場合が多い。

I（意）よりは Imi, Kokoromoti;
I（胃）　〃　Inohu;
I（威）　〃　Ikô, Isei;
Ri（利）Huri（不利）よりは Rieki, Hurieki;
An（案）よりは Kangae, Mokuromi, Sitagaki など;
In（印）　〃　Ingyô;
Tyû（忠）　〃　Tyûgi;
Kô（孝）　〃　Kôkô, Oyakôkô;
Kô（功）　〃　Tegara, Isaosi;
Na（名）　〃　Namae;
Na（菜）　〃　Nanoha, Nappa;
Hô（法）　〃　Hôhô, Hôritu;
Hô（方）　〃　Hôkô, Hômen;
Ron（論）よりは Giron, Ronbun;
Bun（文）　〃　Bunsyô, Ronbun;

Bun（分）　〃　Mibun, Bungen;
Dai（題）　〃　Hyôdai, Mondai;
Dai（臺）　〃　Okidai, Nosedai 等;
Dai（代）　〃　Daikin;
（「子の代、孫の代」の「代」は Dai でよからう）
Yôgwa（洋畫）よりは Seiyôgwa;
Yôgaku（洋樂）　〃　Seiyô-ongaku;
Yôsyoku（洋食）　〃　Seiyô-ryôri;
Wasyoku（和食）　〃　Nippon-ryôri.
「漢字」に對する一つの言ひ方は Sinamozi,
「幹事」　〃　〃　〃　Sewanin.

「科學、化學」はいつも紛はしくてこまるが、Kwagaku を化學の意味にだけ使ひ、科學といふ所は Rigaku と云ふのがよい。「理學」に、廣い意味で心理學や論理學などを含ませることは字義から云つても當然である。

「眞理、心理」は、Sinri を「眞理」の意味とし、「心理」の方は大抵 Sinrigaku 又は Sinri-sayô と言ひかへられる。

「市立、私立」は市立を Si-date, 私立を Hito-date と區別されさうである。[Hito は個人と法人とを併せた意味。]

267. 漢語には聞いただけで分りにくい組合せ詞が澤山ある。殊に形容の語と名詞とを組合せた詞にそれが多い。かういふのは形容詞と名詞と二つに分けていふ方がよい。

強敵 よりは tuyoi Teki;
特例 〃 tokubetuna Rei;
高山 〃 takai Yama;
急坂 〃 kyûna Saka;
一例, 一種 よりは hitotuno Rei, hitotuno Tagui;
同音, 同法 〃 onazi On, onazi Hôhô;
水中 よりは Midu no naka;
山上 〃 Yama no ue;
門外 〃 Mon no soto;
前部、後部よりは maeno Bubun, usirono Bubun;
一大公園よりは hitotuno ôkina Kôen.

組合せ詞でも、本來の日本語の組合せ詞なれば、多くは分りにくいことがないから、漢語よりはそれの方がよい。

Taiu (大雨) よりは Ooame;
Syûu (驟雨) 〃 Niwakaame (又は Yûdati);
hisansuru (飛散する) よりは tobi-tiru;
suikôsuru (推考する) 〃 osikangaeru.

268. 組合せ詞を作る場合に、よく言葉をはしょることがある。場合によつては便利だけれども、一般の方針としては、各部分をはしょらずに完全に書き表はす方がよい。

電鍍 よりは Denki-mekki;
電解 〃 Denki-bunkai;

帝大 よりは Teikoku-Daigaku;
帝劇 〃 Teikoku Gekidyô
南滿 〃 Minami-Mansyû.

日本のローマ字社で「社友」といふ制度を設けたときに、普通ならば「社友費」とすべきものを Syayû-hiyô とした。これは「費用」といふ語がそれだけでも成立つて居る語だからである。

「日獨戰爭」などの Niti や Doku は、漢字を使つて居るから分るが、Nippon や Doitu といふ詞には Niti といふ部分も Doku といふ部分もないから、かういふ略語はローマ字の世の中では行はれない。こんなのは Nippon-Doitu-sensô などと正しく云ふのがよい。「日獨戰爭」に慣れた耳には長たらしく聞えるけれども、外國語の例などで見ても、さういふものだとなれば苦にはならない。但し「關西、關東」のやうなのは出來上つた言葉と見て差支がない。

269. **新しい語。** 新しい物事に對する語の選び方は要用な問題である。

日本で新に出來た物の名前などに就ては、外の詞と紛れないといふ條件が必要なだけで、其外は意味なり口調なりの點から調べて相當に選ばれればよい。

270. 外國できまつた名前を持つて居る物事を日本文の中で云ふ場合の云ひ方書き方には、

a. 外國の名前も書き方ももとのまゝ取つて使ふか。

b. 外國の名前になるべく近い名前を日本の名として取り、書き方を日本流にするか。

c. 意味の當つて居る適當な日本語を新に作るか。

かう三つの方法がある。

271. ローマ字論者の中にも、「むづかしい漢語の譯語を新に作るよりも、外國の語を其まま使ふがよい。外國の語を其まま書くことの出來るのはローマ字の効能の一つだ」と論ずる人がある。

併し、さうすると其外國語（英語なら英語）を知つて居る人の外の一般の日本人に取つて、其語の書き方讀み方が非常な苦勞になる。

例へば、タイプライターなどは、これから益多く使はれて、一般の商店の小僧も使ふものになるであらうが、それを英語流の typewriter と書くことにすると、凡ての小僧が英語の發音や綴り方の大凡の規則でも心得て居ない以上、始終書き違へ讀み違へをして、片假名を使ふに比べて遙に不便なことになる。第一 typewriter の正しい發音が大抵の日本人に（英語の一通り出來る人にも）出來ないといふことになると、さういふ語のある文章は一體誰に讀み書きさせる文章だと問ひたくなる。さう嚴密に正しい英語の發音をしなくてもよいとなると、尙更人によつてまちま

ちな言ひ方になつて何が正しい名前だか分らなくなる。

272. かう考へると、a の方法は少くも一般の日本人の使ふ語には不適當だと云はねばならない。

只少數の、外國語を知つて居て然るべきやうな人々の間にだけ使はれる語ならば、それでも差支ない。これは、學問上の專門語で、普通教育では不必要な程度のものに限るわけで其場合には全くの外國語として取扱はれるわけである（§88 b）。若し其語が、學問の成行の結果として、普通教育に入るやうになるならば、b 又は c の方針の語に取換へることが必要である。

273. b の方法は、名前が外國語に似て居るにしても、兎に角日本語が新に出來たものと見る行き方である。例へばタイプライターを Taipuraitâ と書いて、日本流の發音を正しいと見るのだから、一般の日本人の使ふべき書き方として適當な書き方である。

c の方法も、適當な語が選ばれ、それが一般に言はれるやうになりさへするならば、是亦適當な方法であることは勿論である。Hikôki や Sensuitei などは此類の語である。

274. b と c の方法は新な日本語を作るのだから、Taipuraitâ でも Hikôki でも、其語を始めて見る人には、説明なしでは了解されないのは當然である。「原語のままなら分るが、日本流の綴りに代へては分らない」とか「漢語

で新しい語を作つたのは漢字を見なければ分らない」とかいふ異論はよく聞くことであるけれども、何れも謂れのない異論である。其「分らない」が當然なのである。その「新な日本語」の説明は、「どう作つてどういふ用をするもの」などといふべきであり、又語原の説明としては「Taipuraitâ（英語の typewriter から）、」「Hikôki（漢字の「飛行機」から）」などとすべきである。そして、かういふ説明が字引になり其文章になりあれば、Taipuraitâ, Hikôki で通ずるのはいふまでもない。

c の方法を取るにしても、漢語でなく本來の日本語で組立てた語を作れば、特に分り易いといふ利益がある、Tômegane Musimegane の類はそれである。

275. 字の形などに關係した詞。 ローマ字を使ふとなれば、「くの字なり」「十字形」「八の字髯」「八の字をよせる」「大の字にねる」「イの一番に」などと云ふ言ひあらはし方をどうするかは問題である。く-no-zi-nari としても、又は Zyûzikei のやうに書いて使つても勿論差支はない。英語で河の三角洲のことを Delta といふが、これはギリシヤ文字の Δ (delta) の形から來たものであるのに、Δ の字を書かないで、只 Delta といふ語で通じてゐる。日本語でも、Zyûzikei といふ語は漢字の「十」から來たものであるといふだけで、一々十の字を書き表はさなくて少しも差支はな

い。「大の字にねる」「八の字ひげ」などもローマ字書きにしては、「大」「八」などの字がないだけ多少の面白味がなくなるが、併し理窟上、上の Zyûzikei の論と同樣にいへる。

ローマ字の世の中になれば、L-no-zi-nari, V-no-zi-nari などといふことも出て來よう。實際「S 形」「Z 形」「T 形」などといふいひ方が漢字交り文の中でも使はれてゐる。（漢字の「丁」とローマ字の T とは形も音もよく似て居るのは面白い。）又「イの一番に」は無論 "a-no-itibanni" となるに相違ない。

言ひ方

276. 文體は口語體を本體とする。口語體といつても、たゞ文章の終りを「である」又は「であります」としただけのものではいけない。詞並にすべての文法上の關係に於て口語體でなければならない。勿論口語體といつても、普通の世間話の通りの口調と限るわけではない、演說で云ふやうな、世間話の口調と多少違つて居る語彙や口調のものも含むわけである。併し、現在の所謂口語體には口語體といふ點で不注意な點が大變多いから、その點は大に注意する必要がある。さういふ不注意な點も、一つは漢字を使つて居るからであるから、ローマ字文では此點を十分に練り上げなければならない。